

はじめに

今回の学習指導要領改訂では、学校教育法30条2項（中学校では49条で準用）において、「思考力、判断力、表現力」の育成を学力の重要な要素として取り上げている。

一方、言語活動の充実は、文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月）において、初めて「国語力」ということばが取り上げられたことに源を発している。これは、学校教育のみならず、社会全体で育成すべき学力として、国語力の重要性が位置付けられたものである。この国語力の育成が求められたのは、その前年（平成15年）に行われたOECDのPISA調査によって、平成12年に行われた調査における「読解力」が8位であったのに対し、14位になったための危機意識でもあった。このことから、PISA型「読解力」を学校教育の中に位置付け、その学力の育成をいかに行うかが、問われるようになった。

この国語力は、「国語」ということが名前についているため、教科国語の学習の中で育成するという誤解が生じたため、中央教育審議会「審議のまとめ」（平成19年11月）において「各教科等における言語活動の充実」という言い方を行うようになった。この「各教科等における言語活動の充実」ということは、中央教育審議会「答申」（平成20年1月17日）において位置付けられ、平成20年3月の学習指導要領改訂において教育課程の改訂で充実すべき重要事項の第一として、定位した。

「各教科等における言語活動の充実」は、学校教育における全ての教科で行うことになるが、それはあくまで学習活動としてのものである。そこで、各教科においては、各教科の学習指導要領の目標と内容とに示されたものを、言語活動を通して育成することが求められている。一方、国語科においては、言語活動そのものを行うことが目的ではなく、言語活動を通して言語能力（その目標と内容とは、学習指導要領に示されている。）を育成することが主たる目的である。

この言語活動の充実は、学習活動であることを明確にしておかなくてはならない。学習活動であるが故に、その活動を通して育成された能力を評価することが必要となる。国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料』（p4～5）では、次のような指摘がある。

「思考・判断・表現」の観点のうち「表現」については、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価することを意味している。

つまり「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを内容としている。

従って、それぞれの単元（教材）の授業を構想し実施する際には、必ず「言語活動（記録・要約・説明・論述）」を通して、その中でどのような思考・判断がされていたかを、具体的に表出させたものから評価することが求められる。

本研究では、このことを中学校の国語科学習でいかに行うか、について具体的な授業を通して検討をした。

平成24年 3月

研究代表者 高木 展郎

目 次

はじめに	高木 展郎
第1章 国語科で育てる「学力」を問い直そう	5
第2章 研究と経緯と成果	11
第3章 中学校の研究と実践	21
・横浜市立港南台第一中学校の研究と実践について 思考力・判断力・表現力等の育成を図るカリキュラム・マネジメント	22
・「生徒のための授業づくり」	44
・「学校とは何か」を考える学校へ	55
第4章 授業実践～プロセス重視の指導案集	61
・「敬語～『職業体験学習シミュレーション』を体験しよう」	62
・「自然教室で学んだこと」をプレゼンテーションしよう	66
・「2年生に向けての決意」を作品にして伝え合おう	71
・「人物の心情を考えるために演じてみよう」	76
・「中学校生活を報告する文章を書いて交流しよう」	82
・「竹取物語」	90
・「2年生に向けての決意」をスピーチして聞き合おう	96
・太宰 治「走れメロス」	102
・「平和を築く」	107
・「三浦市のキャラクターデザインをプレゼンテーションしよう」	108
・『今昔物語』	109
・「走れメロス」	110
・「高校生活について考えよう～ラウンドテーブル型パネルディスカッション」	111
・「復興支援ポスターを作ろう」	112
・「身の回りのちょっと変なこと」	113
・小学生向けの学校紹介を作る	117

第1章 国語科で育てる「学力」を問い直そう

国語科で育てる「学力」を問い直そう

～『思考力・判断力・表現力』の育成のための 言語活動の充実を図る実践研究とは～

横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター 三浦 修一

1 前提として考えなければならないこと

学校は言うまでもなく、学習する児童生徒に「学力」を身に付けさせるために日々の教育活動を行っています。そして、「学力」については、2007年6月に一部改正された学校教育法で

第三十条 小学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第二十一条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

- 2 前項の場合においては、①生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、②基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、③これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、④主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。

(○数字、及び下線は引用者。第四十九条で中学校に、第七十条で高等学校に準用)

と示されたのは周知の通りです。

この法律と、2008年1月の中央教育審議会答申、さらに同年3月に告示された学習指導要領から、これからの学校教育で目指すべき方向性や学校の、さらには時代や社会の状況の変化に対応した授業のあり方が示されたと言えます。

特に最近の学校における教育研究や授業研究では、上記の「③これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」に焦点が当てられています。とりわけ「思考力、判断力、表現力」をどう育てるのか、具体的にはどうすることなのかについては、2011年11月に公表された国立教育政策研究所教育課程研究センターの『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』の中の次の記述がその拠り所となります。

②「思考・判断・表現」

「思考・判断・表現」の観点のうち「表現」については、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価することを意味している。

つまり「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを内容としている。

(「第1編 総説 第1章 学習評価の在り方について 2」下線は引用者)

国語科以外の教科でも、各単元等の学習において言語活動を行わせて、その中で表出された内容を評価することが必然となった訳です。

ただしここで注意しなければならないのは、言語活動をさせること自体が目的なのでは

なく、あくまでも「②基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、③これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことを目指して行われる学習指導の過程で言語活動が行われる必要があるということです。

そこで国語科においては、各教科における言語活動の基盤となることばの力、あるいは言語能力を、意図的・計画的に育てる授業を行うことが求められます。従って、これまで行ってきた国語科の授業における学習活動のあり方を、「言語活動」という視点から見直すこと、時には大胆にこれまでの発想を変えた学習活動を行わせることが、国語科の教師にとって喫緊の課題であると言えます。

2 国語科で育てる「学力」を問い直そう

国語科の授業を変えていかなければならないという前提にたつて、二つのことを考える必要があります。

第一は「何を」です。そして「どのように」が次の課題です。

「国語科の授業の何を变えるのか」ということについて考えるためには、まずは学習の目標を確かめる必要があります。それは学習指導要領に示された国語科の目標にある通り、

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

ことです。

ことさらこの国語科の目標を掲げたのは、具体的な授業研究や教材研究に向かう際に、もう一度改めてこの目標から発想することを求めたいからです。それはとりもなおさず、「国語科で育てる『学力』とは何か」を考え続ける必要があるのではないかと考えるからです。そういう問いを持ち続けること、問い直す姿勢を保つことをしないと、授業研究にしる教材研究にしる、時に技術論に陥る危険があるのではないのでしょうか。

さてそこで、この国語科の目標は、学習する児童生徒にとってはどんな意味をもつのでしょうか？ また、指導する私たち教師にとっては何を求められているのでしょうか？

これまでにも、この教科の目標については、学習指導要領の解説を基点として多くの議論がされてきました。この研究に参加している同人の皆さんにもそれぞれに思いがあって、それを具体的な研究で、そして生徒と向き合う授業の中で、表現してきています。それぞれに価値のある内容であることは言うまでもありません。が、もう一度確かめてみましょう。

まず、この目標の前提が確かに意識されてきたのでしょうか？

ここでいう前提とは、冒頭に挙げた学校教育を通して育てるとされた「学力」の規定です。また、中央教育審議会答申「5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方（1）改正教育基本法等を踏まえた学習指導要領改訂」で示された学習指導要領の基本理念である

- ① 「生きる力」という理念の共有
- ② 基礎的・基本的な知識・技能の習得
- ③ 思考力・判断力・表現力等の育成
- ④ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
- ⑤ 学習意欲の向上や学習習慣の確立

⑥ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実

です。さらには、これらの理念の前提となった、時代や社会の変化についての認識です。

具体的な内容についてはそれぞれの資料で確かめる必要がありますが、これらの資料から考えなければならないことは、学習指導要領の目標の文言それ自体は変わっていないけれど、その意味することについては、改めて考える必要がありはしないかということです。

最初の課題である「国語科の授業の何を変えるのか」については、これが出発点です。

「教科国語が育てる学力とは」という問いについて、これまでの議論や経緯を踏まえたうえで、たとえば「リテラシー」という考え方に沿って見直すとどんなことが見えてくるでしょう。あるいは、何が必要になるでしょう。

PISA調査で測定している読解リテラシーの内容は、国語科の学習指導要領の内容と多くが重なります。今回の学習指導要領の改訂では、このことが強く意識されています。しかし、国語科の授業を行っている先生方はどうでしょう。実際の授業のレベルではどうでしょうか。

このTMの会の研究が国語科の授業研究にとって大きな意味を持つ拠り所は、実はここにあると言えます。しかし、不十分だと言わざるを得ないことも含まれています。

学習指導要領は、私たち教師が授業を行うための枠組みです。だからこそ、それが本当に学習する児童生徒にとってどんな意味を持つのか、具体的なレベルだけでなく、その理念についてさえも、検討を加えながら考え続ける必要があります。

第二の課題は、「国語の授業をどのように変えるのか」ということです。

このことについては、これまでのこの会の議論や実践から明らかです。

- ①付きたい力を明確にしてから授業を始める（「初めに教材ありき」ではない単元構想）
- ②生徒に学習目標、学習活動（方法）、評価規準を示してから授業を行う（問題解決能力を高める授業）
- ③学習評価と学習活動が一体となった授業（評価の闇討ちをしない）
- ④学習の見通しと振り返りを大切にされた授業（メタ認知能力を高める学習）
- ⑤学習問題と課題とが明確な授業（意欲的に取り組める学習問題と解決すべき課題が明確な授業）
- ⑥「分からない」を大切にされた授業
- ⑦共に学び合う授業（教室という空間でこそできる学びを）

などに整理することができます。

3 日々の実践を大事にしよう

国語科の学習は「言語を用いて言語を学ぶ」というある意味での二重構造があります。そこからいくつかの誤解が生まれます。たとえば、「文章を読んで、考えたことを書いているのだから、それは『書くこと』の学習である」、あるいは「考えたことを話し合っているのだから、それを『話すこと・聞くこと』の評価とする」といった誤解です。

このような場合には、あくまでも「読んで考えたり話し合ったりした内容の妥当性」について、表出されたものについて評価したり確かめたりすることが、学習の本来の意味であるべきです。ところが、多くの教室では教師たちが、生徒の学習活動の姿に着目して、本来の学習の目的ではないところを評価することが起きています。その原因は、この二重

構造の意味を理解していないところにあると言えます。

今回の学習指導要領で国語科における言語活動が例示された意味は、このような混乱を避けるためでもあると言えるのではないのでしょうか。

実はこの混乱は、教室で授業を行っている先生方だけでなく、残念なことに教科書編集者にも見られます。

授業について研究して、その意味を確かめながらより良い授業となるように実践を積み重ねることから、このような混乱が避けられたり誤解が解けていったりすることが期待できます。

また、授業研究を積み重ねてきた教室では、生徒が確かに「育って」います。

もちろん、どの教室でも生徒は育ちます。けれども、意図が明確でなかったり、授業の組み立てがしっかりしていなかったりする教室での育ちとは明らかに差が出ます。それが顕著なのは、「学習する意欲」の差になって見られます。

なぜ、生徒の育ちがとりわけ学習する意欲の差で見られるのでしょうか。理由は明確です。よく練られた授業は、そして学習する目当てが明確な授業では、生徒は自分が学んでいることの意味が自覚できるようになるからです。

この会で授業研究に取り組んでいる先生方の教室は、どこもそうになっていると見ることができます。

4 未来へ繋ごう

国語科に限らず、これまでも授業について研究することが行われてきました。その成果が、我が国の教育水準を高めることや学校教育の質の維持向上に大きな役割を果たして来ました。多くの優れた実践とその成果から、私たち教師は多くのことを学ぶことができます。しかし留意しなければならないのは、それらの研究成果は、それぞれの時代や社会の状況の中で行われたものであるという点です。そして当然、教育は未来を生きる子どもたちのための営みです。これまでの成果はそれとして、授業を基盤とした教育研究も、まさに未来に繋がるものであることが求められます。

最近でこそ少なくなりましたが、授業研究会のスタイルというものがあって、何の反省も意識もなくこれまでの方法が踏襲されている研究会を見ることがあります。数十年にわたって変わることのない学習指導案の形式を用いている学校があります。

そういう研究会や学校で、「なぜそのスタイルか」、また、「なぜその形式か」を問うと、一様に驚かれます。問うている側に対して、自明のことであるスタイルや形式を問う不見識を疑うような眼さえも感じることがあります。使われている言葉一つをとっても、たとえば学習指導要領では使われていない「主題追求」などが話題になっていたりします。

教育はある部分では保守的な営みです。それは継続性が求められるという性格上、仕方のないことでしょうか。本研究会に助言をされている高木展郎^{*1}がいう「原体験」に基づいた授業であったり研究会であったりしてよいのでしょうか。

そういう現実も一方ではあり続けていることを念頭に、この研究は、どこで未来と繋がるのか、時代や社会の状況のなかで求められていることとは何かについて、おれることのないものであり続けたいと願っています。

*1 横浜国立大学教育人間科学部教授 附属教育デザインセンター長

第2章 研究の経緯と成果

「思考力・判断力・表現力」の育成のための言語活動の充実を図る中学校国語科の学習指導と評価についての研究 研究の経緯と成果

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

1 研究の目的

本研究は、「思考力・判断力・表現力」の育成のため、特に言語活動の充実を図る観点からの中学校国語科の学習指導と評価について、実践を通して研究することを目的とする。

新しい学習指導要領の総則では、「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」において、「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を重視すること」に配慮すべきことを述べている。

したがって、一人ひとりの生徒の言語に関する能力を育成するためには、学校教育活動全体を通じて、各教科等における言語活動を充実させる必要がある。

特に国語科においては、授業における学習活動がすなわち言語活動であり、学習者である生徒が身に付けなければならない能力としての学習指導要領の内容を習得したり、習得した力を活用したりするために行うものであるという位置付けを明確にした授業のあり方を確立する必要がある。さらにそのような学習の評価をどのようにするか、ということも含め、カリキュラム・マネジメントの視点からの授業改善が行われなければならない。

これらについて実践を通して研究していくことを目指して、本研究会を発足させ、研究を進めてきた。

2 研究の方法

本研究では、現在の我が国の教育を形作る理論を踏まえた上で、中学校における授業実践を通じた臨床的な研究を推進することを柱として取り組んできた。

特に授業における学習者としての生徒の成長・変容を見取るとともに、生徒による授業評価を行い、それらのリフレクション（振り返り跡づけして再構成し、吟味して意味づける行為）を学習方法や評価にフィードバックし、さらなる改善を目指す、いわゆる「PDCAサイクル」に「I」（=innovation,improvement）を加えた「カリキュラム・マネジメント」のあり方を描くことを目指し、いくつかの学校における取組において一定の成果を得た。

3 2年間の研究成果

平成22年度は5回の研究会を開催し、各メンバーの実践に基づき次の内容について研究を進めた。

- (1) 国語科で育成すべき学力についての整理。
- (2) 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれについての授業における言語活動の開発。

(3) 言語活動を通して育成する「思考力・判断力・表現力」の適切な評価のための学習指導案の開発。

平成22年度に神奈川県を会場として開催された第33回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会にはメンバー全員が関わり、全国の先生方と交流しながら上記のテーマについての研究を深めた。

メンバーの中村慎輔教諭が主宰する学習会「縹（はなだ）の会」との合同研究会を2回開催し、相互の研究成果を交流した。

平成23年度は6回の研究会を開催し、各メンバーの実践に基づき次の内容について研究を進めた。

(1) 「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のそれぞれについての授業における言語活動の開発。

(2) 言語活動を通して育成する「思考力・判断力・表現力」の適切な評価のための学習指導案の開発。

(3) 学校のカリキュラム・マネジメントにおける学校としての研究体制の位置付け。

さらに、平成23年度に群馬県を会場として開催された第40回全日本・第54回全関東地区中学校国語教育研究協議会において、国語科における「非連続型テキスト」について提案した小林美佐子先生はじめ茅ヶ崎地区の先生方とともに研究を深めた。

メンバーの勤務校である横浜市立港南台第一中学校、三浦市立三崎中学校、愛川町立愛川東中学校の研究発表会・公開授業研究会への参加や、横浜国立大学主催の教育実践フォーラム等に積極的に参加し、相互の研究成果を交流した。

これらの成果をまとめた研究報告書を作成した。

4 研究の組織 … 研究会の名称は「TMの会」（TM=teaching method）

氏名	所属（平成24年3月現在）	分担
高木 展郎	横浜国立大学教育人間科学部 教授	研究テーマに関わる理論 顧問（研究会への指導助言）
三藤 敏樹	横浜市立港南台第一中学校 主幹教諭	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践／総括（研究会の運営）
高橋 励	茅ヶ崎市教育委員会教育推進部 学校教育指導課指導主事	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践に対する指導助言
竹下 恭子	横浜市教育委員会指導部 高校教育課指導主事	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践に対する指導助言
小清水宣雄	三浦市立三崎中学校 総括教諭	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践
中村 慎輔	愛川町立愛川東中学校 教諭	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践

山内 裕介	横浜市立岡村中学校 教諭	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践
南崎 徳彦	横浜隼人中学・高等学校 教諭	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践
土屋 京子	横浜市立港南台第一中学校 教諭	研究テーマに関わる学習指導と評価の 開発・実践

※ 上記のメンバーに加えて、横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員三浦修一先生の指導・助言を受けて活動した。

5 研究会の記録

I 第1年次（平成22年度）

【第1回】

- 1 日時 平成22年7月10日（土） 16：30～
- 2 会場 横浜市立港南台第一中学校・校長室
- 3 参加者
三藤 敏樹、土屋 京子、小清水宣雄、高橋 励、中村 慎輔
新免 利也（（公財）日本教材文化研究財団専務理事）
阿部真砂美（（公財）日本教材文化研究財団事務局員）
吉川 宏志（（株）新学社編集部国語課課長）
- 4 内容
（1）本会設立の経緯
（2）挨拶（公財）日本教材文化研究財団専務理事 新免 利也
（3）今後の研究の方向性
- 5 自己紹介
- 6 次回の学習会について

【第2回】

- 1 日時 平成22年8月2日（月） 17：00～
- 2 会場 横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター
- 3 参加者
高橋 励、竹下 恭子、山内 裕介、中村 慎輔、小清水宣雄、三藤 敏樹
三浦 修一 先生（横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター研究員）
佐藤 昇（（公財）日本教材文化研究財団事務局長）
大浦 豊和（（株）新学社企画開発部課長）
吉川 宏志（（株）新学社編集部国語課課長）

4 内容

(1) 挨拶 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇

(2) メンバーの最近の活動から

3 各メンバーの今年度の活動について

4 今後の研究の方向性について

5 次回の学習会について

6 事務連絡

【第3回】 (「縹 (はなだ) の会」 との合同学習会)

1 日時 平成22年11月6日(土) 14:00~

2 会場 神奈川県企業庁「プロミティあつぎ」

3 参加者

高橋 励、中村 慎輔、小清水宣雄、南崎 徳彦、三藤 敏樹

木村信一郎 先生 (横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校教諭・縹の会)

遠藤ゆき子 先生 (厚木市立藤塚中学校教諭・縹の会)

犬塚寿美子 先生 (大和市立上和田中学校教諭・縹の会)

三浦 修一 先生 (横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター研究員)

大浦 豊和 (株) 新学社企画開発部課長)

4 内容

(1) 挨拶

(株) 新学社企画開発部課長 大浦 豊和

横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター研究員 三浦 修一 先生

(2) 参加者自己紹介

(3) 協議 第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会に向けて

5 事務連絡

6 次回の学習会について

【第4回】 (「縹 (はなだ) の会」 との合同学習会)

1 日時 平成23年1月29日(土) 14:00~

2 会場 神奈川県企業庁「プロミティあつぎ」

3 参加者

高橋 励、中村 慎輔、山内 祐介、竹下 恭子、三藤 敏樹

岩澤 鮎美 先生 (愛川町立愛川東中学校・縹の会)

齊藤 玲子 先生 (厚木市立森の里中学校教諭・縹の会)

佐藤 昇 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長)

大浦 豊和 (株) 新学社企画開発部課長)

前辻 文恵 (株) 新学社編集部国語課課長)

4 内容

- (1) 挨拶 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
- (2) 参加者自己紹介
- (3) 縹の会より提案と協議
- (4) 第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会を振り返って

5 次回の学習会について

【第5回】

1 日時 平成23年3月27日(日) 14:00~

2 会場 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校

3 参加者

高橋 励、中村 慎輔、山内 祐介、小清水宣雄、南崎 徳彦、三藤 敏樹
三浦 修一 先生(横浜国立大学非常勤講師)
佐藤 昇 ((公財) 日本教材文化研究財団事務局長)
吉川 宏志 ((株) 新学社編集部国語課課長)

4 内容

- (1) 挨拶 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
- (2) 提案と協議「全日中・関ブロ大会の成果を生かして」
- (3) 報告と協議「校内研究推進のあり方について」
- (4) 連絡
 - ア 各校の次年度の研究会等の予定について
 - イ 中間報告書の作成について
- (5) 次回の学習会について

Ⅱ 第2年次(平成23年度)

【第1回】

1 日時 平成23年6月11日(土) 14:00~

2 会場 福祉保健交流研修センター「ウイリング横浜」

3 参加者

竹下 恭子、山内 裕介、土屋 京子、中村 慎輔、小清水宣雄、南崎 徳彦、
三藤 敏樹
佐藤 昇 ((公財) 日本教材文化研究財団事務局長)
大浦 豊和 ((株) 新学社企画開発部課長)
吉川 宏志 ((株) 新学社編集部国語課課長)
三浦 修一 先生(横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員)

4 内容

- (1) 挨拶 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
 - (2) 提案と協議
「国語科の授業作りに活用する単元構想表」(山内)
 - (3) 近況報告
- 5 次回の学習会について

【第2回】

- 1 日時 平成23年7月30日(土) 14:00~
 - 2 会場 福祉保健交流研修センター「ウイリング横浜」
 - 3 参加者
高橋 励、小清水宣雄、南崎 徳彦、三藤 敏樹
浅井 俊二(駒沢大学文学部4年)
佐藤 昇 ((公財)日本教材文化研究財団事務局長)
大浦 豊和 ((株)新学社企画開発部課長)
三浦 修一 先生(横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員)
 - 4 内容
(1) 挨拶 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
(2) 提案と協議
ア 「プロセス重視の指導案」について(三藤)
イ 「授業研究ワークショップ」について(三浦先生)
(3) 近況報告…各出席者より
- 5 次回の学習会について

【第3回】

- 1 日時 平成23年10月1日(土) 13:00~
- 2 会場 神奈川県企業庁「プロミティあつぎ」
- 3 参加者
高橋 励、竹下 恭子、中村 慎輔、小清水宣雄、三藤 敏樹
小林美佐子 先生(茅ヶ崎市立浜須賀中学校)…群馬大会発表者
安藤 文 先生(茅ヶ崎市立鶴が台中学校)…群馬大会共同研究者
木村信一郎 先生(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校)…「縹の会」
前田 健太 先生(八王子市立城山中学校)…「縹の会」
三浦 修一 先生(横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員)
- 4 内容
(1) 参加者自己紹介
(2) 提案と協議「第40回全日本・第54回全関東地区中学校国語教育研究協議会群馬大会における神奈川県の発表内容の検討」

5 次回の学習会について

【第4回】

- 1 日時 平成23年11月26日（土） 13：00～
- 2 会場 神奈川県企業庁「プロミティあつぎ」
- 3 参加者
高橋 励、中村 慎輔、小清水宣雄、南崎 徳彦、三藤 敏樹
犬塚寿美子 先生（大和市立上和田中学校教諭・縹の会）
三浦 修一 先生（横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員）
佐藤 昇（（公財）日本教材文化研究財団事務局長）
大浦 豊和（（株）新学社企画開発部課長）
- 4 内容
（1）挨拶 （公財）日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
（2）報告1「日本教材文化研究財団 研究紀要の論文について」
（3）提案1「次年度以降の研究について」（三藤）
（4）提案2「研究報告書の作成について」（三藤）
（5）報告2「第40回全日本・第54回全関東地区中学校国語教育研究協議会群馬大会」
（中村先生・三藤／犬塚先生・三浦先生）
（6）協議「横浜国立大学 教育実践フォーラムにおける提案内容の検討」（中村・三浦先生）
「愛川町立愛川東中学校 校内研修会について」（中村）
- 5 今後の研究会について

【第5回】

- 1 日時 平成24年1月7日（土） 13：00～
- 2 会場 福祉健康交流研修センター「ウイリング横浜」
- 3 参加者
高橋 励、山内 裕介、中村 慎輔、小清水宣雄、南崎 徳彦、三藤 敏樹
小林美佐子 先生（茅ヶ崎市立浜須賀中）
三浦 修一 先生（横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員）
佐藤 昇（（公財）日本教材文化研究財団事務局長）
大浦 豊和（（株）新学社企画開発部課長）
山本 英嗣（（株）新学社中学営業部）
- 4 内容
（1）挨拶 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
（2）報告「第40回全日本・第54回全関東地区中学校国語教育研究協議会群馬大会」
（小林先生・三浦先生）

- (3) 協議「横浜国立大学 教育実践フォーラムにおける提案内容の検討」
(中村先生・三浦先生)

5 確認

- (1) 研究報告書の作成について (三藤)
- (2) 次年度以降の研究について (三藤)

6 次回の日程について

【第6回】

1 日時 平成24年3月17日(土) 13:00～

2 会場 福祉健康交流研修センター「ウイリング横浜」

3 参加者

高橋 励、竹下 恭子、中村 慎輔、小清水宣雄、南崎 徳彦、三藤 敏樹
三浦 修一 先生 (横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員)
佐藤 昇 ((公財) 日本教材文化研究財団事務局長)
大浦 豊和 ((株) 新学社企画開発部課長)

4 内容

(1) 挨拶 (公財) 日本教材文化研究財団事務局長 佐藤 昇
(株) 新学社企画開発部課長 大浦 豊和

(2) 確認

- ア 研究報告書の作成について (三藤)
- イ 次年度以降の研究について (三藤)

(3) 協議「各メンバーの2年間の取り組みの振り返り」

(4) 報告

- ア 「横浜国立大学 教育実践フォーラム2011における提案」 (中村・三浦先生)
- イ 「愛川町立愛川東中学校 第7回校内研究会」 (中村・三浦先生)
- ウ 「カナダの教育事情」 (三浦先生)

6 研究報告書について

本研究報告書は、上記2年間の研究成果をまとめたものである。

2年間を通じて助言をいただいた高木展郎先生には本研究会の研究主題である「『思考力・判断力・表現力』の育成のための言語活動の充実を図る中学校国語科の学習指導と評価」について、また三浦修一先生には学校における研究の実践について、それぞれ理論的な示唆をいただいた。

また、本研究主題の学校現場における実践として、横浜市立港南台第一中学校における取り組みについては三藤敏樹が、三浦市立三崎中学校における取り組みについては小清水宣雄が、愛川町立愛川東中学校における取り組みについては中村慎輔が、それぞれ記述した。この3校の授業研究には本研究会のメンバーも多く参加し、またこの3校における研

究を題材として本研究会の活動を進めてきた経緯からである。

さらに、本研究会のメンバーそれぞれが取り組んだ「言語活動を通して育成する『思考力・判断力・表現力』の適切な評価のための学習指導案の開発」の成果として、2年間に各メンバーが作成した「プロセス重視の指導案」を収録した。

第3章 中学校の研究と実践

横浜市立港南台第一中学校の研究と実践について

思考力・判断力・表現力等の育成を図るカリキュラム・マネジメント

— 各教科等における言語活動の充実 —

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

1 これまでの経緯と研究主題設定の理由

横浜市立港南台第一中学校（以下、本校）では、平成17～18年度の2年間にわたり、横浜市「国語科授業改善モデル作成協力校」の委嘱を受け、横浜市教育課程研究委員会中学校国語科専門部会の研究成果等に学びながら、国語科の授業における習熟度別指導の具体的展開や、PISA型「読解力」の育成のあり方について研究した。

さらに、平成19年度～20年度の2年間は、文部科学省の「国語力向上モデル事業」の委嘱を受け、本校の生徒の実態から、対人コミュニケーションの能力、とりわけ、自分自身の思いや考えを適切に表現する能力（表現力）のいっそうの向上が必要であるとの問題意識から、「表現力の育成を図る教育活動の工夫－各教科等における言語活動の充実－」を研究主題とする学校全体の取り組みによって、これらの力の育成を目指し、「指導と評価の一体化」を図る授業改善を図ることをねらいとして研究を進め、委嘱が終了した平成21年度も研究を継続してきた。

これまでの成果を踏まえて、学校教育法ならびに学習指導要領に示されたとおり、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・表現力・判断力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うためのカリキュラム・マネジメントの一層の推進を目指して、標記の研究主題を設定した。

2 今年度の研究内容

本校では新しいカリキュラムの完全実施に向けて、平成20年度の学校評価（内部評価・学校関係者評価）に基づき、本校の実態（生徒の実態・教職員の願い・保護者の願い・地域の願い）をもとに、学校教育目標「私たちは『深く思考し、的確に判断し、豊かに表現する』力と意欲をはぐくみます」を新たに策定した。この目標は、改正された学校教育法で示された学力観、すなわち「基礎的な知識及び技能の習得」「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を踏まえて策定したものである。平成21年度よりこの新しい学校教育目標に基づいて学校教育活動を展開しているが、研究主題について平成21年度は、移行措置をも踏まえながら前年度までを引き継いで研究と実践に取り組んできた。

今年度は、これまでの取り組みを踏まえて、新しい教育課程の編成と学校教育目標の実現に向けて新たに研究主題を標記の通り設定し、研究を位置付けたカリキュラム・マネジメントを推進することを通して、学校教育活動のより一層の充実を目指していく。

具体的には、横浜市の「学力向上プロジェクト・授業力向上推進校／体力向上推進拠点校」の委嘱を受け、思考力・判断力・表現力等の育成を目指して「言語活動の充実」を図

り、リフレクションを重視した授業研究を中心として研究を進めながら本校の「学力向上アクションプラン」を設定し、PDCAサイクルにI (=Innovation, Improvement) を位置付けた本校のカリキュラム・マネジメントの中で、その充実と改善を図っていく。特に、新しいカリキュラムに基づく評価について、実践を通して研究を深めていく。

3 授業改善に向けての具体的な取り組み

(1) 日常の授業交流

本校においても教員による授業時間中の巡回を行っているが、それを単なる「見回り」「清掃」ととらえるのではなく、巡回中の教員が適宜教室に入り、授業に参加することを積極的に行っている。

このことにより、自分の担当教科以外の授業における生徒の様子を知り、一人ひとりの生徒を理解したり、必要に応じて生徒を支援したりする「異教科チーム・ティーチング」の機会とするとともに、他教科の授業内容を実見することにより、それを自分の教科の指導に生かす「クロスカリキュラム」の絶好のチャンスととらえている。

また、「チーム・ティーチング」(以下「TT」)を実施している教科(国語)と「少人数指導」を実施している教科(数学・英語)では、TTあるいは少人数指導を基本としながら、授業(学習活動)の内容によっては、柔軟に学習形態を展開し、複数の教員が同じ時間・同じクラスの指導に当たることにより、生徒一人ひとりの個に応じた指導が可能となるだけでなく、教員どうしの学び合いの機会ともなっている。

さらに、平成21年度からは本校の教員が小学校において小学校の先生と一緒に授業を行う試みを英語科・国語科において行っている。このことにより、小学校の教員はより専門性の高い中学校の教員と共同で教材研究を行うことにより、9年間を見通した授業改善への意識を高めることができたとともに、中学校の教員にとっては、小中で異なる時間割、授業形態、子どもたちの様子などを肌で感じることができ、いわゆる研究協議だけでは得られない多くの気づきを得ることができた。

(2) 学習者による授業の振り返りと評価

新しい学習指導要領の総則では、「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」において、「各教科等の指導に当たっては、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるようにすること」に配慮するよう指摘している。

学習者が「思考」したり「判断」したりした内容は「表現」することによって定着するとともに評価することが可能となる。そして、そのためには各教科等において言語活動を意図的・計画的に位置付けて各教科等の力を付けていかなければならない。

その授業において学習者である生徒自身が学習を振り返り、自分の身に付いた力を意識するためには、単元の授業計画に「振り返り(リフレクション)」を位置付けることが必要である。その「振り返り(リフレクション)」は、単元における生徒の意識や能力の変容が記述されているので、学習のポートフォリオとして「関心・意欲・態度」の評価資料としても非常に有効なものとなる。

さらに、通常は独立して行っている授業評価(生徒による学校関係者評価)についても、

授業の中で実施することもできる。年度当初や年度末の授業で、「アンケート」や「リフレクション」の形式で生徒自身の学びについて記述させることにより、教員の授業のあり方について改善の資料となるとともに、生徒一人ひとりの「学びの履歴」を知る機会ともなる。このことは、入学したばかりの1年生について、彼らの小学校での学びについて中学校の教員が知る上で非常に有効であった。

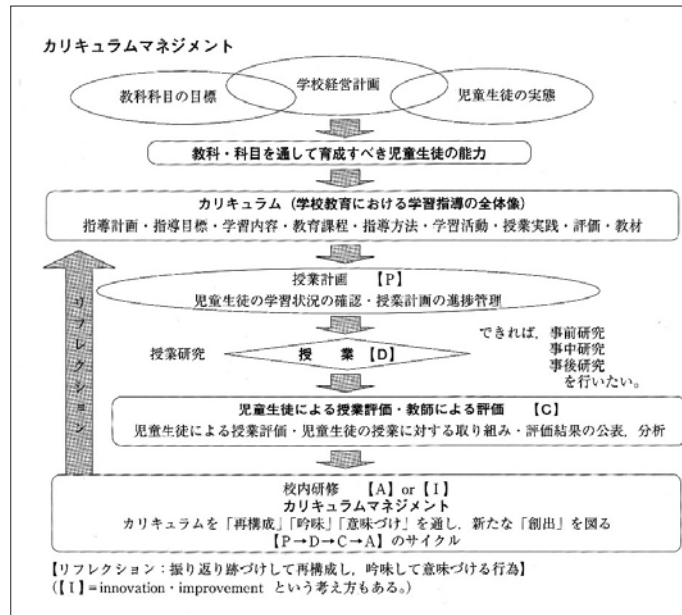
4 新しい授業研究のあり方

これまでの授業研究のスタイルは、事前に授業者が指導案を作成して授業を行い、研究協議ではまず授業者が自評をし、参加者とともに質疑応答を行って、助言者の講評、授業者への拍手、という形式が一般的であったが、本校の授業研究ではこの形式から脱却し、「学習者の側からの授業研究」とするための試みを5年前より継続してきた。

これは、授業研究を単なる「イベント」として行うのではなく、学校全体としてのカリキュラム・マネジメントに「リフレクション」

を位置付けた「PDCA+I」の考え方【図】に基づくものである。^{*1}

なお、本項（1）～（3）は、高木展郎の指導に基づき、本校における授業研究の際に取り組んでいる内容である。^{*2}



【図】カリキュラム・マネジメントにおける「PDCA+I」のチャート（高木展郎による）

（1）事前研究の重視

ア 授業計画を共同して作成する。教師集団としてチームで知恵を出し合い、授業の計画を立てる。

イ 学習材（教材）研究を共同して行う。教師一人ひとりの異なる経験に依拠した授業観、学習者の実態、学習材観を交流し、それらを生かした学習材（教材）研究を行う。

ウ 学習者の研究・情報交換を共同で行う。可能な限り学習者一人ひとりの学習状況の把握と情報交換を行う。また、これまでの学びの内容や進捗状況、他教科での授業の様子についても情報収集しておきたい。

エ ア～ウを通して行った事前研究を基に共同で学習指導案を立てる。研究授業の参加者が事前に授業案を検討することにより、授業過程・授業方法・授業内容について、共通理解を図る。

オ 「本時」だけでなく、単元全体の授業計画（学びのプロセス）を立てる。1時間単位の授業計画（いわゆる「本時案」）だけでは、授業の全体像を考えることが難しいので、年間の授業カリキュラムや単元・学習材全体の中での位置付けを明確にした授

業計画（プロセス重視の指導案）を作成するようにする。

カ 授業計画の時点で、評価項目（評価規準）の検討を行う。評価規準に実現の方法を具体的に明らかにするのが授業計画となる。

上記の考え方を実現するツールとして、本校では各教科共通の形式の「プロセス重視の学習指導案」を用いて授業研究を行っている。「プロセス重視の学習指導案」については「5」に詳述する。

（2）研究授業（事中研究）

ア 参加者は事前に着目しようとする学習者（あるいはグループ）を決定しておく。可能ならば、着目者についての授業中の学び方や授業中の様子を「学び手観察シート」に記録する。

イ 研究授業への参加者も授業に参加する（TT）。授業を「壁の花」として見るのではなく、せつかくの機会なので、授業参観している教師も含めて、みんなで授業を創る。

ウ 授業終了後、参加者は着目した学習者にインタビューを行い、その授業で何を学んだかを明らかにしておく。「学び手観察シート」に記入した内容を、研究協議（事後研究）で印刷・配布して資料とすることもできる。

エ 事中の研究では、指導者の教師としての力量をのみ見るのではなく、指導者と学習者との関わりや学習者どうしの関わり、学習者が何を学んでいるか、について見ることが求められる。本校の授業研究では、特に言語活動を通しての学習者の変容を見取することを目指している。

オ 港南台第一中の教員は共同で学習指導案を作成しているので、授業過程や授業方法、授業内容については、この時点では既に共通理解がなされている。したがって、授業中の研究は、学習者がどのように学んでいるか、ということに焦点化して研究することができる。

（3）研究協議（事後研究）

ア 授業者が自らの授業を振り返って反省を述べることは行わない。その授業のことを最も分かっている授業者が、「自評」という形で主にマイナス面のみを語ることは、授業を向上させる機会を失うことにほかならない。授業におけるプラス面とマイナス面を判断するのは、研究協議全体を通して行うことが必要である。

イ 学習者一人ひとりの表れを対象にして、参加者が語り合う。学習者一人ひとりに対する参加者からの授業評価は、参加者の見方や考え方、更に教師としての力量によって異なるものになる。それゆえ、多くの参加者が多面的・多角的な見方を語ることを通して授業を検討することが有益である。

ウ 授業に対する学習者からの評価を行う。学習者からの授業評価は、研究協議に数名の学習者を招いて、その授業に対する評価を学習者から直接聞く（研究協議の冒頭に学習者へのインタビューを行う）ことによって行う（写真）。また、授業後のインタビューを記述した「学び手観察シート」を印刷したものを活用することもできる。

インタビューに参加した学習者の感想

正直、あんなに人が来るとは思いませんでしたし、自分が予想していた感じや質問でもなかったもので、緊張したし、少し驚きました。

難しい質問ばかりされて困ったけど、授業のことなどいろいろ思い出せてよかったです。

立って大勢の人の前で話すのは苦手なので、あまり発言できなかったけど、他の人の発言を聞いて、自分でもたくさん考えることができた。

研究授業は人が多くて緊張したけど、いつもどおりにできたと思う。でもその後のインタビューがすごい緊張して考えがポンポン出てこなくて困った。自分の意見に驚いた先生もいらっちゃって、その意見について色々聞かれたのが一番緊張した。でも、一応答えられたから良かったと思う。



エ 教師側からの印象批評は行わない。学習者の「あらわれ」という事実を基に語る。この語らいを通して、参加者が学習者の何を見ていたか、何を理解したかが明らかになる。このことが、教師の力量を伸ばすことにもつながる。（自己の授業評価の相対化がこのような語らいによって図られる。）

オ 授業における「Plan-Do-Check-Action」のサイクルを再検討する。特に、結果としての評価を行うのではなく、その授業を行うことによって、次の授業への改善点を明らかにすることが重要である。

このような考え方にに基づき、多くの参加者が主体的に研究協議に参加する方法として、本校では学習者へのインタビューを含む「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」による研究協議を提案している。「『ラウンドテーブル型パネルディスカッション』による研究協議」については「6」に詳述する。

（４）保護者・地域の人々の授業研究への参加

本校では、このような授業研究のあり方を保護者や地域の人々にも公開し、特に保護者や地域の方々に研究授業（事中研究）のみならず研究協議（事後研究）にも参加していただくことにより、学校評価（学校関係者評価）の機会の一つとするとともに、「開かれた学校づくり」を推進し、港南台第一中学校の教育についての理解を深めていただく機会としている。

5 プロセス重視の学習指導案

新しい学習指導要領の総則では、「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」において、「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を重視すること」に配慮すべきことを述べている。したがって、一人ひとりの生徒の言語に関する能力を育成するためには、国語科だけでなく学校教育活動全体を通じて、各教科等における言語活動を充実させる必要がある。

文部科学省委嘱による「平成19・20年度国語力向上モデル事業」の推進にあたり、神奈川県教育委員会は同委嘱を受けた4校（横浜市立大鳥小学校、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校、神奈川県立七里ヶ浜高等学校、横浜市立港南台第一中学校）の研究推進担当者、保護者代表ならびに神奈川県・横浜市教育委員会の指導主事により、「神奈川県国語教育推進協議会」を組織して研究を推進した。本校と共に同委嘱を受けていた横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校では、PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメントの視点から、「付けたい力」を育成するプロセスを重視した学習指導案を提案している。

本校では、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校の研究成果に学びながら、研究主題に合わせた「プロセス重視の学習指導案」の形式で指導案を作成して授業研究を行っている。

プロセス重視の学習指導案について*3

授業者が学習指導案をどのような枠組みで構想するかということは、生徒の学習状況の理解、単元の構想、授業展開の工夫だけでなく、教科のカリキュラム・マネジメントともかかわるものである。その意味では学習指導案は、各学校のカリキュラムの特徴を反映しているものといえるだろう。今回本校で作成した学習指導案は、学習のプロセスを重視するということをコンセプトとしている。この学習指導案では、とくに次のことを考慮して作成している。

（1）育成を目指す学力から

「確かな学力」の育成を図ることは、各教科の最も重視すべき課題となっている。そこで、生徒の実態ならびに学習指導要領の指導事項を押さえながら、まず育成を目指す学力（身に付けたい力）を明確にし、ここを起点に授業を組み立てていく。

（2）カリキュラム作成の考え方の順序を反映する

教科のカリキュラムの作成の基本的な手順としては、「育成を目指す学力（身に付けたい力）→評価規準→単元や教材→学習のプロセス」を考えるということになる。この手順を基に学習指導案を構成し、カリキュラム作成の流れが分かるようにしている。

（3）学習のプロセスが一覧できるようにする

学習発表会などの公開授業では対象となる1時間が重視される。それも大事なことではあるが、育成を目指す学力を重視するならば、どのようなプロセスで育成を目指す学力を身に付けていったかを問題にすべきである。そこで、この学習指導案では、

身につけたい力をどのようなプロセスで身に付けていこうとしているかを重視して、一目で俯瞰できるようにしている。

(4) 情報量を絞り込む

この指導案では学習のプロセスを中心に情報を絞り込んである。それによって、カリキュラム作成の考え方ならびに授業を見る視点が明確になるようにしている。

(5) PISA型「読解力」の育成に対応

各教科において「読解力」を育成することを意識した授業を具体的に展開していくための参考になるようにするために、「読解力」育成と指導事項との関連、身に付けたい力の育成のプロセスが明確になるようにしている。

(6) 言語活動を明らかに

「身に付けたい力」を育成するために言語活動を充実させる必要がある。指導者は、言語活動を意識して学習活動を展開しなければ、その効果を期待することはできない。そのために、言語活動を明記している。

この指導案にはいわゆる「本時案」を記述しない。それは、上述の通り「育成を目指す学力を重視するならば、どのようなプロセスで育成を目指す学力を身に付けていったかを問題にすべき」であり、「学習のプロセスを中心に情報を絞り込んである」からであるが、教育実習生の指導等必要な場面では指導案の最終ページを本時案にするなど柔軟に形式を変更することが可能である。

この指導案を年間を通して積み重ねていくことにより、「指導と評価の一体化」を具現化した年間指導計画の作成が可能となる。つまり、カリキュラム・マネジメントにおける「Plan-Do-Check-Action」のサイクルを実践しながら、生きた「カリキュラムづくり」を進めていくことができる。

同様の形式の学習指導案は、本校と共に研究を進めている三浦市立三崎中学校においても、独自の工夫を取り入れながら活用されている。両校とも、神奈川県内に設置されている国立大学の附属中学校の先進的な研究に学びながら、その成果を咀嚼しそれぞれの学校なりに受け止めて、一般の公立中学校として生徒や地域の実態に即した研究・実践を進めている。

2年後に迫った新学習指導要領の完全実施にあたり、学校現場においては「評価」についての取り組みが急務である。

平成22年3月24日の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の報告「児童生徒の学習評価の在り方について」*4では、「評価規準や評価方法については、近年諸外国においても様々な研究や取り組み」が行われていることを指摘し、思考力・判断力・表現力等を評価するに当たっては、「様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価」を行うことや「レポートの作成や口頭発表等による評価」を行うこと、さらに「それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行う」ことを例示している。*5このことは、学習のプロセスの中で適切な評価方法による評価を行い、指導と評価の一体化を図ることが必要であることを示している。

また、同報告は、「授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である。一方で、指導後の児童生徒の状況を記録するための評価を行う際には、単元等ある程度長い区

切りの中で適切に設定した時期において『おおむね満足できる』状況等にあるかどうかを評価することが求められる」と指摘し、授業における「指導と評価の一体化」としての評価と「児童生徒の状況を記録するための評価」のそれぞれについて適切な時期に評価を行うことを求めている。今回の本校の「プロセス重視の指導案」では、評価規準の欄に具体的な評価方法を示すとともに、前者を「日常的な評価」、後者を「記録する評価」として示すことを試みた。

6 「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」による研究協議

始めに「学習者からの授業評価」として学習者へのインタビューを行い、研究協議の討論は、授業者・助言者をパネリストとして「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」の形式で行う。

「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」とは…*6

「ラウンドテーブル (Roundtable)」とは「円卓」のことで、各参加者が対等の立場でディスカッションできる形式として大学のゼミや討論の場で広く用いられているほか、外国では法廷にも取り入れられている形式である。また、アメリカABCテレビの「This Week」や、香港フェニックステレビの「時事辯論会」など海外のニュース番組にも取り入れられている。

パネルディスカッションは、意見の立場ごとにグループを組んで行う話し合いの形式である。したがって、「肯定・否定」の二値しかないディベートと異なり、自分の主張・立場に基づいてグループを組むことができ、参加者の思考の幅を広げるという点で有益である。さらに、パネリストを「ラウンドテーブル型」に配置し、フロアの人たちはそれぞれの立場に賛同するパネリストの後方に配置することにより、言語活動の過程の中で必然的にグループ討議が行われることになる。このようなことから、中学校国語科における「話すこと・聞くこと」の学習材としても適切な言語活動である。

このパネルディスカッションでは、研究授業を行った授業者ならびに助言者が、三つの立場に分かれて討論を行う。平成20年度・21年度の本校の研究発表会では、それぞれ「言語の教科（国語・英語）における言語活動」、「5教科の言語の教科以外の教科（社会・数学・理科）における言語活動」、「技能教科における言語活動」の三つの立場で発言し、その後のディスカッションの中で立場ごとにパネリストとフロアの方々が交流する場面を設定した。

いずれの年度も、当日は授業の主体である生徒の発言を契機として、パネリストとフロアが一体となって白熱した討論が行われた。「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」による研究協議は、教科の壁を越え、多くの参加者に発言の機会を保障し、授業に関わる人々すべて（生徒、教員、助言者、保護者、地域の人々）が参加することができる形式として、非常に有効であると考えている。



7 中学校国語科における「小中一貫カリキュラム」具現化の試み

中学校第1学年「書くこと『中学』校生活を報告する文章を書いて交流しよう」

本校では今年度授業研究を中心とする研究発表会を3回開催した。平成22年9月17日に開催した第2回研究発表会において、発表者（三藤）は学区内との小学校の教員とのTTによる国語科の授業「中学校生活を報告する文章を書いて交流しよう」を提案した。

この授業は、発表者が平成22年8月22日に開催された横浜市教育課程研究委員会・国語科専門部会研究協議会で提案し、前述の港南台第一中学校第2回研究発表会ならびに平成22年11月12日に開催された全日本・全関東地区中学校国語教育研究協議会において授業研究として行ったものであり、『横浜版学習指導要領評価の手引』にも国語科の指導事例として収録されている。

ここでは、本校の今年度の取り組みの成果の一つとして、「小中一貫カリキュラム」ならびに「評価」の視点を中心に、上記の授業の概要について報告する。

(1) 指導事項と言語活動

ア 指導事項

- 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。（「書くこと」オ）

イ 言語活動

- 小学校の先生に対して、中学校生活の「報告」をする文章を書く。（言語活動例ウ）

(2) 単元の目標

- 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめようとしたり、交流を通して考えを深めようとしたりする。
- 書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換したり、意見や助言の交換から学んだことを、自分の表現の参考にして書く。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成のために

ア 単元にかかわる生徒の学びの履歴（子どもの学びの実態）

「書くこと」の指導事項オ「交流」については、小学校第1学年及び第2学年では「書いたものを読み合い、よいところを見付けて感想を伝え合うこと」、第3学年及び第4学年では「書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと」、第5学年及び第6学年では「書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと」について学習してきている。ここでは、第5学年及び第6学年の指導事項を受けて、書いた文章を交流し合う指導事項を扱っている。

いわゆる「作文」に対しては苦手意識を持つ生徒が多いが、現実の生活の中では「メール」「ブログ」など書き言葉によって自分の考えを発信する活動が多く行われており、「書くこと」の言語活動そのものに対して拒否反応を示す生徒は少ない。生徒の「作文が苦手だ」という発言の背景には、与えられたテーマについて生徒自身が「書くことがない」という意識があると考えられる。書くべき内容がはっきりしていて、書くためのメディアが用意されてさえいれば、多くの生徒は生き生きと書く活動に取り組むものである。

いわゆる「中1ギャップ」を克服するための小中一貫カリキュラムの教科国語における取り組みとして、この時期の中学校1年生が小学校時代と現在の自分を見つめながら小学校の先生を対象として報告する文章を書くという言語活動は、書くべき内容が明らかであり、また生徒には小学校の先生に現在の自分について伝えたいというモチベーションもあるので、取り組みにあたり抵抗感が少ないと考えられる。

さらに、中学校に入学して半年間共に学び生活してきた仲間との交流を通して学習することにより、実生活においてまさに言語を活用しながら互いの能力を伸ばす場面とすることができる。

イ 指導の手だて

(ア) 生きて働く言語能力を育てるために、多様な内容や形態の言語活動を数多く行う。

国語科の授業は、言語活動を通して言語能力を身に付けていく営みである。「付けたい力」としての指導事項について、その力を身に付けるための「実の場」としての言語活動を意図的・計画的に設定することにより、生徒一人ひとりの言語能力をより確かなものにすることができる。この授業では、中学校生活を報告する文章で「書くこと」を行い、書いた文章を交流する、すなわち「読むこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動をはさんで再び「書くこと」に取り組むことを通して、書く能力をより確かなものにしていくことをねらいとしている。

(イ) 適切に伝え合うために、「言語意識」を明確にした言語活動を行う。

国語科の授業において育成する言語能力は、「社会生活に生きて働くよう、一人ひとりの生徒が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする力」^{*7}である。そのような力を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動を通して育成する際は、「相手」「目的や意図」「多様な場面や状況」等について明確な意識を持たせて言語活動に取り組む必要がある。具体的には、「目的意識」（何のために、どのようなねらいをもって言語活動を行うのか）、「相手意識」（誰に対する言語活動なのか）、「場面意識」（どのような場面における言語活動なのか）、「方法意識」（どのような方法、手段、条件で言語活動を行うのか）、「評

価意識」(言語活動の過程及び結果はどうであったか)等を明確にした上で言語活動を行わなければならない。^{*8}

この授業では、「小学校の先生」という「相手」に対して、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」を持ち、「国語科の授業」という場面において、「報告する文章を書く」という「方法」で言語活動を行い、書いた文章を交流するという「評価」の場面を設定している。それぞれの言語活動の中で、常に言語意識を明確に持たせて取り組ませるようにしたい。

(4) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
① 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめようとしたり、交流を通して考えを深めようとしたりしている。	② 書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。 ③ 意見や助言の交換から学んだことを、自分の表現の参考にして書いている。	④ 事象や行為などを表す多様な語句について、自分が文章で表現するときどのように活用すればよいかを考えながら書いている。

(5) 指導と評価の計画 (5時間) ^{*9}

学習目標 (☆) ・学習活動と内容 (学習活動における言語活動)	評価規準と指導の手だて (○) ＜評価方法＞
<p>☆ 報告する文章を記述するために、書く相手、目的に対する意識を持つ。</p> <p>1・2 中学校に入学して半年が経過した時点で、小学校の先生に現在の中学校生活について、入学時の自分と比較しながら報告する文章を書く。</p> <p>この授業に向けて、4月の授業開きの際に「中学生になっての思いや決意」についての自分の考えをまとめて書く活動を行っている。その文章を「入学時の自分と比較」するための資料として活用させるようにする。</p>	<p>④ 事象や行為などを表す多様な語句について、自分が文章で表現するときどのように活用すればよいかを考えながら書いている。＜文章の記述の確認～日常的な評価＞</p> <p>○【補充】国語辞典を活用して、自分が表現したい内容について他の言葉で言い換えるとどうなるか、どの言葉を用いたらより効果的かを考えさせる。</p> <p>○【発展】文章の中の自分の考えや気持ちの根拠が明確に書かれているかどうかを吟味し、それを表現するのによりふさわしい語句を選んで書くよう助言する。</p>
<p>☆ 書いた文章についての意見交換を通して、自己評価・相互評価のための視点を持つ。</p> <p>3 3～4人のグループで書いた作文を読み合い、意見や助言を交換し合う。</p>	<p>② 書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。 ＜話し合いの行動の観察～日常的な評価＞</p> <p>○【補充】他者から自分に対しての意見や助言をメモさせ、自分が他者に対してどのように考えを述べたらよいかの参考にさせる。</p> <p>○【補充】自分が書いた作文について、「何について報告しているか」「どんな材料を用いているか」「根拠となる事実(体験)は何か」についてもう一度考えさせる。</p> <p>○【発展】交流の際に、書き手と読み手の両方の視点から題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて自分の考えをまとめ、意見や助言を伝えるよう助言する。</p>

	<p>○ 学習者が小学校6年生であった当時の担任とTTで授業を行い、小学生の視点と中学生の視点の違いを意識させたり、「報告する相手」としての小学校の先生としての立場を学習者に伝えたりする支援を行う。</p>
<p>☆ 意見交換によって気付いたことから、自分が書いた文章を推敲するための視点を持つ。</p> <p>4 交流した時に得た他者の意見や助言を生かして、<u>書いた文章を推敲し、清書する。</u></p>	<p>③ 意見や助言の交換から学んだことを、自分の表現の参考にして書いている。〈文章の記述の確認～記録する評価〉</p> <p>○【補充】他者の作文を読んで良いと思った点や、他者からの助言をメモさせ、自分が書いた作文にどのように生かしたらよいかを考えさせる。</p> <p>○【発展】交流における指摘を読み手からの意識であるにとらえ、読み手の立場に立って自分の表現を練り直して書くよう助言する。</p>
<p>☆ 学習を振り返り、今後の学習に生かすための視点を持つ。</p> <p>5 <u>学習の振り返りを記述し</u>、報告する文章を書く時に自分の考えをどのようにまとめたらよいかや、記述する際に注意することについて、自分の考えを持つ。</p>	<p>① 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめようとしたり、交流を通して考えを深めようとしたりしている。〈振り返りの記述の分析～記録する評価〉</p> <p>○【補充】報告する文章を書くにあたって、どのような点が難しいと感じたかを振り返らせながら、次に書く時はどうしたらよいかを考えさせる。</p> <p>○【発展】学習を振り返ることを通して、書く場面だけでなく話したり聞いたりする場面や読む場面において自分の考えを深めるにはどうしたらよいかを考えるよう助言する。</p>

(6) 小中一貫カリキュラムと評価について

ア 小中一貫カリキュラムによる9年間の連続性のある指導と評価

～言語活動を「小中一貫カリキュラム」に位置付ける。

「小中一貫カリキュラム」は、義務教育9年間の連続性や適時性を図りながら、一人ひとりの子どもの学習状況に柔軟に対応するカリキュラムである。国語科の目標や指導事項の定着を図るには、9年間を見通した学習指導を実現し、日々の授業、単元・主題等、学年、小中学校間の指導内容の連続性のみならず、学習評価にもつながりをもたせて学習指導を支えることが必要である。

横浜市が推進する「小中一貫カリキュラム」は、義務教育9年間の連続性や適時性を図りながら、一人ひとりの子どもの学習状況に柔軟に対応するカリキュラムである。国語科の目標や指導事項の定着を図るには、9年間を見通した学習指導を実現し、日々の授業、単元・主題等、学年、小中学校間の指導内容の連続性のみならず、学習評価にもつながりをもたせて学習指導を支えることが必要である。

「中学校学習指導要領解説国語科編」において、「B書くこと」における「交流」の指導事項は、次のとおり示されている。^{*10}

小学校第1学年及び第2学年	書いたものを読み合い、良いところを見つけて感想を伝え合うこと。
小学校第3学年及び第4学年	書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。
小学校第5学年及び第6学年	書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。
中学校第1学年	書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。
中学校第2学年	書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げること。
中学校第3学年	書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、もの見方や考え方を深めること。

今回の授業にあたっては、小学生時代の自分の視点と中学生になって半年が経過した現在の自分の視点とを、自分自身が書いた文章を材料に振り返り、現在の自分について小学校の先生に報告する文章を書き、交流によってそれを練り上げていく言語活動を設定した。それに際して多様な視点からの助言ができるよう、9月に開催した港南台第一中学校の研究発表会の際は、学区内の小学校の先生（学習者が6年生当時の担任）とのTTを試みた。11月の全日本・全関東地区中学校国語教育研究協議会の際は、授業を行う西中学校の学区の西前小学校の旧6年の担任の先生にご参加いただき、また助言者の小学校国語の指導主事（南部学校教育事務所の増田伸子指導主事）ならびに司会者（本校の土屋京子教諭）もTTとして授業に参加した。

イ 言語活動についての指導と評価の一体化

授業における言語活動について、指導と評価を適切に行うためには、生徒の言語活動をしっかり見取るとともに、評価の指標を明らかにする必要がある。そのようにして、思考力・判断力・表現力等を評価することにより、「指導と評価の一体化」を図る授業改善と、より信頼性・妥当性のある評価が可能になる。

授業における言語活動は「パフォーマンス課題」であり、思考力・判断力・表現力等を評価する際に「パフォーマンス評価」を取り入れることにより、「指導と評価の一体化」を図る授業改善とより信頼性・妥当性のある評価が可能になる。

「パフォーマンス課題」とは、「リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題」であり、ここでは「論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）」が評価される。通常の筆記テストは幅広い知識を覚えているかを評価するには適しているが、学びの文脈の中で知識やスキルを使いこなす能力を評価しようとする際は、パフォーマンスの評価が必要となる。指導と評価の一体化を図る授業において、パフォーマンス課題は、教育目標の中

核部分、つまり、色々な文脈に転移して用いられるような重要部分に対応させて使う必要がある。つけたい力をうまく引き出し、伸ばすような条件を設定する必要がある。^{*11}

このことについて、平成22年3月24日の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の報告「児童生徒の学習評価の在り方について」では、「評価規準や評価方法については、近年諸外国においても様々な研究や取り組み」が行われていることを指摘し、そのような取り組みの一つとしての「パフォーマンス評価」について、「思考力・判断力・表現力等を評価する」に当たって、「パフォーマンス評価」に取り組んでいる例も見られる。パフォーマンス評価とは、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等による評価するという複雑なものまでを意味している。または、それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。」と説明している。^{*12}

この授業においては、単元の目標を実現するため、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動による「パフォーマンス課題」を設定し、実際の活動の中での生徒の表れを明らかにした評価規準を設定することにより、思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価の一体化を図っている。

また、同報告は、「授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である。一方で、指導後の児童生徒の状況を記録するための評価を行う際には、単元等ある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において「おおむね満足できる」状況等にあるかどうかを評価することが求められる」と指摘し、授業における「指導と評価の一体化」としての評価と「児童生徒の状況を記録するための評価」のそれぞれについて適切な時期に評価を行うことを求めている。今回の学習指導案では、前者を「日常的な評価」、後者を「記録する評価」として評価規準とともに示すことを試みた。

パフォーマンス評価を行うにあたっては、次のような「ルーブリック」(rubric：評価の指標)を活用することが有効である。^{*13}

A○	交流の際に、読み手(相手)である小学校の先生に対する意識を持ち、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」に即して書いた文章を読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。
A	交流の際に、書き手と読み手の両方の視点から題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて自分の考えをまとめ、意見や助言を伝えている。
B 評価規準	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。
CO	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて自分の意見を持つことはできるが、話し合いの中で意見や助言として発言することが難しい。
C	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて自分の意見をまとめることが難しい。

ここでは、評価規準に示した「おおむね満足できる状況」を実現していると判断される生徒のありようを「B」とし、「十分満足できる状況」を「A」、「十分満足できる状況のうち、特に高い程度のもの」を「A○」、「努力を要すると判断される状況」を「CO」、「努力を要すると判断される状況のうち、一層の努力を要するもの」を「C」として5段階で示した。ただし、「A○」「A」で表される状況は必ずしも段階的に示されるものではなく、「十分満足できる状況」は多様な表れをする場合があることに留意しておきたい。また、

「CO」「C」で表される「努力を要する状況」については、「B」で表される「おおむね満足できる状況」を実現するために必要な手だては生徒の段階に応じて示す必要がある。そこで、この授業の第4時（本時）においては、上記のループリックに基づき、「Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例」ならびに「Cの生徒への手だて」を複数示してある。

ループリックは、実際の生徒の状況（たとえば生徒が記述したパフォーマンス課題としての「報告文」）に基づいて再検討し修正する必要がある。その際は、あくまで指導事項に基づく評価規準を根拠として、生徒のパフォーマンスを上記のループリックにあるような記述語として表現する。

このようなループリックを作成・活用することにより、「Cの生徒への手だて」に示す手だてをより具体的なものにすることができ、また、「報告文」のような成果物を質的に評価する際も信頼性・妥当性を確保することが可能となる。

ただし、ループリックを作成することに多大な時間や労力をかけ過ぎてしまい、実際の生徒のパフォーマンスに対する評価に十分な時間や労力が割けなくなってしまうては本末転倒である。あくまでループリックは、評価規準に基づいて生徒のパフォーマンスを質的に評価するためのツールとして活用するものであり、生徒自身の学びの姿から作成するものであることを強調しておきたい。

（7）授業を終えて

ア 共同授業者（小学校の教員）の振り返りから

- ・ 中学生になると、漢字や敬語をしっかりと使える。また、お互いにアドバイスをすることもきちんとできることに感心した。。
- ・ 自分の経験や思いを具体的に書いてくれると、読む方としても楽しみである。
- ・ 今日の経験や様子を、学校に戻って児童にも伝えたい。

イ 学習者（生徒）の振り返りから

僕はこういうふうには報告する文章などの作文は苦手で、自分の考えをまとめるのはきらいだったのですが、友達にいろいろアドバイスをもらい、いろいろな語句を適切に使って書くことができたし、意見や助言の交換から学んだことを自分の表現の参考にすることができ、自分の考えを深めることができました。自分が気づけなかった間違いも見つけられたので、友達に見てもらうのは最初はいやだったのですが、最終的には良かったんだと思います。でも、もうちょっと具体的に書いたり、ひらがなを少なく漢字に直したりすれば、読み手に伝わりやすい「中学校生活を報告する文章」が書けたと思います。

ウ 授業を終えて見えてきたもの～今後の課題

横浜市が推進する「小中一貫カリキュラム」の先駆的实践としては、PSY（パイオニア・スクール・オブ・ヨコハマ）としての横浜市立立野小学校・仲尾台中学校における小中の教員がTTで行ったものがある。筆者（三藤）もその授業を参観した経験があり、中学校国語科の授業で小中の教員のTTを行うにあたり、小学校の先生の関わり方について、今回の授業の参考にさせていただいた。

小学校の先生とのTTにあたっては、事前の打ち合わせが重要であることは言うまでもない。今回の場合は、本年6月に実施した港南台第一中ブロック（港南台第一小、港南台第二小、港南台第三小、港南台第一中）の小中教員交流において国語科の分科会に小学校の授業者に参加していただき、参加者全員で授業内容の検討を行ったことは、今回の授業を行う上で有意義であった。

前述のとおり、今回の授業では言語意識を明確にした言語活動を行うことに重点を置いた。生徒の振り返りにあるように、中学校1年生にとって、小学校の時の先生という「ちょっと距離のある大人」を相手に文章を書く、という経験はこれまであまりしたことがなく、敬語の使い方や手紙の書き方について、この言語活動を通して習得することができた様子が伺える。

また、書いた文章を「交流」する中で相互批正を行うことにより、「書く」という言語活動が自分一人で完結するのではなく「話し合う」言語活動を通して行うことができたこと、そして、学び合いの中で文章の完成度を高めるとともに、「交流」したことの成果を自分自身の「書く」言語活動にフィードバックすることができたことは、生徒にとって今後に生きる大きな経験となったようである。

今回の全日本・全関東地区中学校国語教育研究協議会では、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校・横浜市立西中学校の2校を会場として研究授業が行われた。会場が2カ所に分かれていることは参加者の先生方にはご不便をおかけしたと思うが、公立中学校の生徒にとってこのような大会に学習者として参加し、多くの先生方と触れ合う機会を持つことは大きな意味があると授業者は考えている。港南台第一中学校でも、「言語活動の充実」をテーマとして毎年2～3回の公開授業研究会を開催しているが、今回の生徒の振り返りにもあるように、言語活動を伴う授業の中で参加者の先生方と触れ合う経験そのものが言語活動の「実の場」になっていることの効果は非常に大きいものがあると考えている。

今回の実践を通して、今後、「小中一貫カリキュラム」を実施していくうえでの大きな課題が明らかになった。今回のような授業を行う場合、まず生徒一人ひとりの小学校時代の生徒の学びの履歴を明らかにする必要がある。港南台第一中学校の国語科では、入学当初の国語の授業で調査（アンケート・リフレクション）を行い、生徒の国語の学習に対する関心や得意・不得意な分野、中学校での学習に向けての決意などを記述させるようにしている。このことは中学校での国語の授業への接続において大変有効であったが、今回の授業では、報告文あるいは手紙を書く対象である小学校の教員との人間関係にさまざまな課題が存在したことが生徒自身の口から数多く語られ、それゆえに相手意識を明らかにして文章を書くことに取り組みにくい状況があった。

今回の授業では、対象を小学校6年生当時の担任に限らず、それ以前の担任や養護教諭、

委員会活動やクラブ活動でお世話になった先生、校長先生などに広げたり、「〇〇小学校の先生方」のように対象を限定しないことを認めたりすることによって、そのような状況をクリアすることができたが、国語科に限らず小学校から中学校へのつながりの中で授業を行う場合、単に教科等の指導事項だけでなく、児童生徒の学校生活全体を見通す視点が欠かせない。「小中一貫」あるいは「小中の連携・接続」を考える場合、小中9年間を見通したカリキュラム・マネジメントを確立することの必要性を改めて認識した次第である。このことをも踏まえて、小中9年間を見通した国語科の授業あるいはカリキュラム・マネジメントについて、今後も小学校の先生方とも議論を続けていきたい。



8 研究の成果

ア 授業研究の活性化

教職員の授業研究に対する抵抗感が低くなり、積極的に授業研究に取り組もうとする教職員が多くなった。最近3年間で15回以上の公開授業研究を実施している。

イ 学習者（生徒）の意識・能力の変化

「受信－思考－発信」のPISA型「読解力」の視点を重視した授業を継続した結果、生徒の言語活動に対する意識に変化が生じてきた。一例を挙げると本校の各教科の授業の中で、文章を読んで読み取ったことについて考えたり、学習する内容や方法について話し合ったり、自分の考えを書いたりする言語活動に意識的に取り組んだ結果、「話すこと」「書くこと」による表現活動に対する生徒の抵抗感が少なくなった。

国語科における説明的文章の学習についての「リフレクション(振り返り)」の生徒の記述より

形式段落だけでなく、意味段落を使って文章をおおまかに区切ることで、説明文の、筆者の意見や話の流れを分かりやすくしていた。このように、序論、本論、結論を分かりやすく区切ることで、話の流れが分かりやすくなるということを学んだ。

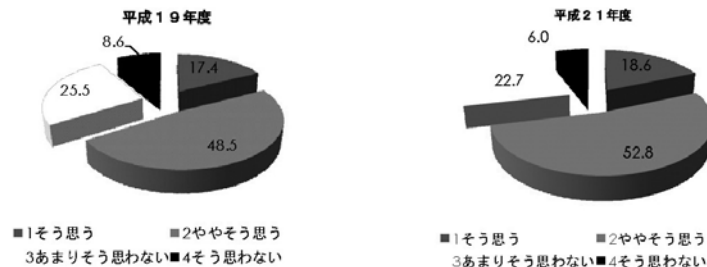
自分で作文を書くとき、意味段落をうまく使って、自分の言いたいことが分かりやすく伝わるようにしたい。

文章を書く（読む）うえで、相手に主張がうまく伝わるように、文章の流れを分かりやすくする書き方（読み方）を学びたい。

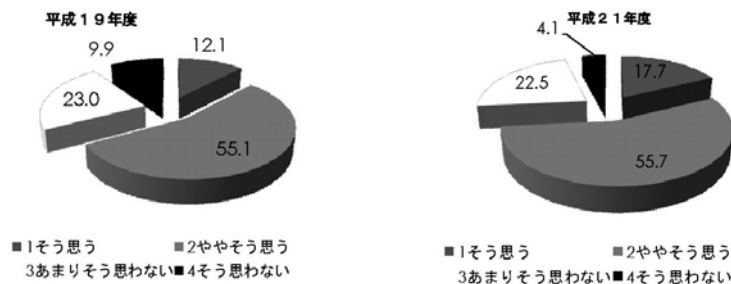
また、生徒の意識の変化は学校評価（生徒による学校関係者評価）にも表れている。平

成19年度と21年度の比較を次に示す。

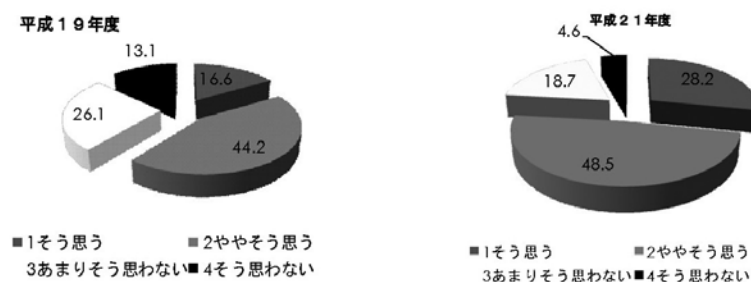
「あなたは授業で自分の力が伸びたと思いますか」という質問に対して、平成19年度は「そう思う」が17.4%、「ややそう思う」が48.5%であったのに対し、平成21年度は「そう思う」が18.6%、「ややそう思う」が52.8%であり、「そう思う」「ややそう思う」の合計で5.5%増加している。



次に、「あなたにとって、先生方は分かりやすく授業を進めていますか」という質問に対して、平成19年度は「そう思う」が12.1%、「ややそう思う」が55.1%であったのに対し、平成21年度は「そう思う」が17.7%、「ややそう思う」が55.7%であり、「そう思う」「ややそう思う」の合計で6.2%増加している。

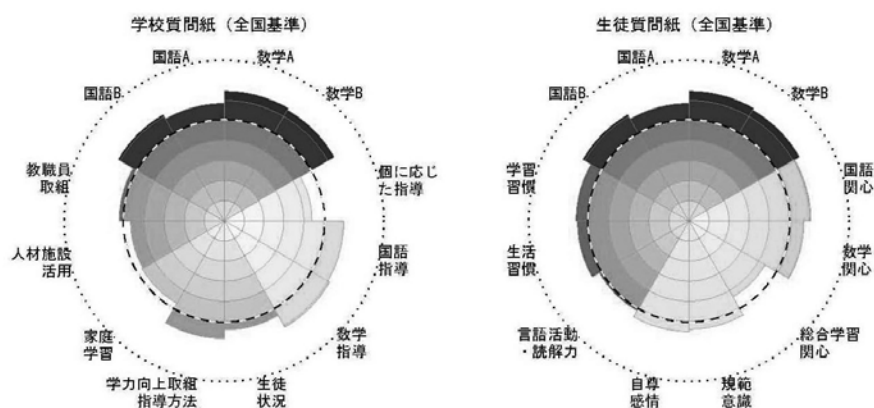


さらに、「あなたは、少人数制やTTの授業で授業内容がよく分かるようになりましたか」という質問に対しては、平成19年度は「そう思う」が16.6%、「ややそう思う」が44.2%であったのに対し、平成21年度は「そう思う」が28.2%、「ややそう思う」が48.5%であり、「そう思う」「ややそう思う」の合計で15.9%増加している。



わずか3年間の経年変化のみで結論を出すのは早計であるが、授業に対する生徒の意識は確実に変容していることが伺える。

また、平成21年度の全国学力・学習状況調査の本校のプロフィールは次の通りである。



教科の学力は高く、生徒の学習に対する取り組み、家庭学習、生活状況等も比較的安定している。

国語科B問題においては「書くこと」の「書かれている内容をとらえ、それに基づいて自分の考えを説明する」「文章から必要な情報を読み取り、簡潔にまとめて書く」の問題において、また「読むこと」の「表現の仕方や文章の構成をとらえる」「語句に注意し、その効果的な使い方に気付く」問題において80%以上の正答率であった。数学科B問題においては、「数と式」の「問題における考察の対象を明確にとらえている」問題、「図形」の「図形の特徴を的確にとらえることができる」問題、「数量関係」の「表から必要な情報を読み取ることができる」「与えられた情報を分類整理することができる」問題において80%以上の正答率であった。また、国語科B問題においては、正答率60%以下のものは1問もなかった。全体的にも、国語・数学のA・B両問題において、本校の正答率は県・全国平均を大きく上回っている。

生徒質問紙調査によると、教科の学習に対するメタ認知が高い生徒、日常生活に対して達成感・成就感を味わっていたり、自尊感情が高い生徒の正答率が高い。学校・家庭生活の両面において、今後も生徒自身がそのように感じられる場面を意識的に設定していくことがさらなる向上につながると考えられる。

横浜市が実施している「横浜市学習状況調査」においても、ほぼ同様の傾向が認められる。基礎的・基本的な知識の習得については「おおむね満足」の状況にあるが、一部の課題のある生徒に対する手だてが必要である。

ウ 公立中学校としての研究体制の確立

「国語力向上モデル事業」の委嘱を共に受けていた横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校をはじめ、多くの学校と情報交換や連携を行いながら、既存の学校組織を活用し、研究を日常のカリキュラム・マネジメントに位置付け、PDCAサイクルで推進する体制を確立した。これらについては、本校の「中期学校経営方針」「学力向上アクションプラン」にも反映させている。

さらに、これまで述べたように指導案の形式や研究協議のあり方について、本校独自の工夫を行いながら研究を推進している。

エ 外部リソースの活用

文部科学省や横浜市の研究指定校・研究協力校としての取り組み等を通して、神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会の指導主事の指導をいただく一方、文部科学省や大学等の調査官・研究者の先生方にもそれぞれの視点からの指導をいただいていた。また、本校の取り組みが「総合教育技術」「実践国語研究」等の雑誌に紹介されたこともあり、独立行政法人教員研修センターの「国語力向上指導者養成研修」をはじめ教育センターやNPO法人主催の研究会における発表の機会や、他県・他都市からの学校視察や講師依頼もいただくようになり、そのような機会を通して研究の成果を交流し、さらなる向上を目指している。

(ア) 平成21～23年度にご指導いただいている先生方

文部科学省教科調査官	富山 哲也 先生
横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター教授	高木 展郎 先生
横浜国立大学名誉教授	岡田 守弘 先生
早稲田大学教育・総合科学学術院教授	原田 哲男 先生
國學院大學文学部教授	田嶋 一 先生
十文字学園女子大学教授	狩野 浩二 先生
明治学院大学心理学部教授	新井 哲夫 先生
東邦大学理学部准教授	木村 泰紀 先生
國學院大學文学部助教	齋藤 智哉 先生
横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター主任研究員	三浦 修一 先生
横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター研究員	白井 達夫 先生
横浜市教育委員会北部学校教育事務所授業改善支援員	大場 裕二 先生
神奈川県教育委員会・横浜市教育委員会指導主事	各先生方

(イ) 平成21～23年度に学校視察にご来校いただいている学校等

広島県教育委員会 中学校学力向上対策事業 県外視察（平成21年10月6日）
 北九州市立教育センター（平成21年11月9日）
 広島県東広島市立西條中学校（平成21年12月1日）
 長崎県諫早市立諫早中学校（平成22年1月29日）
 北海道札幌市立美香保中学校（平成22年2月17日）
 長崎県大村市立桜が原中学校（平成22年2月19日）
 山形県東根市立第三中学校（平成22年2月26日）
 福岡県八女郡広川町立広川中学校（平成22年3月3日）
 神奈川県立向の岡工業高等学校（平成22年11月16日）
 神奈川県立横浜栄高等学校（平成22年12月2日）
 さいたま市立中・特別支援学校教頭会（平成23年1月18日）
 京都府京都市立中学校（西京区）（平成23年7月4日）

(ウ) 報告・提案等

平成21年度神奈川県立総合教育センター研究発表大会（平成21年8月5日）

平成21/22年度文部科学省・独立行政法人教員研修センター国語力向上指導者養成研修
(平成21年8月26日/平成22年8月25日)
平成22年度横浜市教育課程研究委員会国語科専門部会研究協議会(平成22年8月17日)
平成22年度横浜市教育センター第6回中学校・高等学校特別活動研修
(平成22年10月22日)
平成22年度神奈川県生徒指導連絡協議会第53回秋の研究大会「茅ヶ崎大会」
(平成22年11月11日)
平成22年度第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会
(平成22年11月12日)
平成22年度横浜教育実践フォーラム(平成23年1月22日)

(エ) 本校の取り組みが紹介された雑誌等

東京法令出版「月刊国語教育」平成20年12月号富山哲也「国語教育界の動向」
小学館「総合教育技術」平成21年11月号
特集1 「移行期」ならではの課題と解決実践事例③言語活動の充実
「各教科の学習指導案を簡略化し、全教科共通のスタイルを定着させることで、教科間の敷居を低くする」
明治図書『実践国語研究』平成22年2・3月号
「カリキュラム・マネジメントに位置付けた『普段着の研究』の取り組み―『各教科等における言語活動の充実』を軸として―」

(オ) 講師派遣等

大阪府高槻市立如是中学校「夏季校内研究会」(平成22年7月26日)
千葉市教務主任会「中・特別支援学校ブロック研修会」(平成22年7月27日)
新潟市立総合教育センター「言語活動の充実」講座(平成22年8月9日)
大阪府高槻市教育センター「第7回兼任所員代表者会中学部会(兼カリキュラム・コーディネーター研修)」(平成22年11月17日)
大阪府高槻市立冠中学校「校内研修会」(平成23年2月7日)
福井県坂井地区中学校教育研究会国語部会(平成23年2月18日)
大阪府高槻市立第十中学校「校内研修会」(平成23年8月26日)

8 現在の課題とまとめ～「普段着の研究」を

本校としての取り組みを継続する中で、各教科における言語活動の充実を意識した授業改善の視点はかなり確立することができた。今後は、学校教育活動全体を通して国語力・言語力の向上をいかに図っていくかが課題となる。

新学習指導要領に基づくカリキュラム・マネジメントを推進する中で、引き続き授業研究をその中核に位置付け、PDCAサイクルでの取り組みを推進しながら、さらなる学力向上を目指す授業改善に学校全体で取り組んでいきたいと考えている。

特に、国語科においては、実生活に生きることばの力を育成するための教科国語としての授業づくり(言語活動の開発)が急務である。

「中学校では教科の壁があって全職員で研究に取り組むことは難しい」とよく言われる。本校では「言語活動の充実」をテーマにすることにより、教科の壁をこえて研究と実践を推進しているが、あくまでそれは日常の子どもの学びに生き、長く続けられるものでなければならぬ。チームとしての教職員全員で、「普段着の研究」というプロジェクトを今後も推進していきたい。

-
- * 1 高木展郎「カリキュラムマネジメントについて」横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校FYプロジェクト編『読解力』とは何か－PISA調査における「読解力」（リーディング・リテラシー）を核としたカリキュラムマネジメント』p.35
 - * 2 参考文献：高木展郎『ことばの学びと評価国語科授業への視角』（2003年三省堂）
講演資料「新しい授業研究の考え方」
 - * 3 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編
『各教科等における「言語活動の充実」とは何か－カリキュラム・マネジメントに位置付けたリテラシーの育成－』（2009年三省堂）p.22
 - * 4 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/004/gaiyou/attach/1292216.htm
 - * 5 このような評価の指標を用いた評価については、平成17年度に横浜市教育課程研究委員会中学校国語科専門部会として「習熟度別指導」を展開する方策の一つとして、同年の横浜市ならびに神奈川県の研究協議会において提案した。
 - * 6 参考文献：文部科学省検定済教科書『現代の国語3』（三省堂）
拙稿「話す・聞く力を高める学びのプラン－ラウンドテーブル型パネルディスカッションの指導と評価」（『月刊国語教育2004・5別冊新しい国語科を拓く教材研究・開発マニュアル』）（東京法令出版）pp.26-29
 - * 7 中学校学習指導要領解説国語編p.9
 - * 8 河野庸介『中学校新国語科授業の基本用語辞典』（2006年明治図書）
 - * 9 ここに掲載したものは横浜市教育課程研究協議会での提案ならびに『横浜版学習指導要領評価の手引』に所収の形式であるので、本校の「プロセス重視の指導案」と若干形式が異なっている。
 - * 10 中学校学習指導要領解説国語編pp.110-111
 - * 11 「パフォーマンス課題」については、西岡加名恵・田中耕治編著『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案』（2009年学事出版）pp.8-10を参照。
 - * 12 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/004/gaiyou/attach/1292216.htm
 - * 13 「ルーブリック」については、前掲書（*4）pp.14-16を参照。

「生徒のための授業づくり」

～校内研究を通じた授業改善の取り組み～

三浦市立三崎中学校 小清水宣雄

1. はじめに

三浦市立三崎中学校（以下、本校）では「学習に対する意識を高め、基礎学力の確実な定着と学習意欲の向上を図る」ことを毎年学校重点課題として位置づけている。また、多くの公立中学校に見られるように、生徒指導やその対応に追われる事態が発生することもしばしばある。学校関係者であればこれらの背景に学習習慣の定着していない生徒、家庭に課題を抱える生徒、学習意欲の低い生徒の存在を想像し、「消耗戦」に疲弊していく教職員の姿を思い浮かべるであろう。通常そうした中で授業研究に力を注ごうとすることは教職員から歓迎されざることであり、具体的な方法を持たずに各々の教員が手探りで実践を行って研究に取り組んだとしても成果を実感することは難しいものであろう。

しかし、本校では平成20年度より「授業研究を核とした授業改善」に取り組み、研究を継続させてきている。その背景には「形式ではなく、実をとる」という前学校長の方針、研究の目的はあくまで「授業改善」であるという職員全体での確認、外部講師の招請と指導助言といった条件が不可欠であった。その上で先進校の研究成果から積極的に学びつつ、職員全員の「公開授業研究」の実施、「単元案形式の学習指導案」の導入、事後研究会での「生徒インタビュー」などを実現してきた。そして、平成22年度から研究テーマを「『学ぶ力』を身につけよう！～よく聴き・よく考え・しっかり伝える～」とし、生徒・保護者にもわかりやすく伝わるようにしている。

2. 研究の方法

研究推進委員会を中心に全教職員で実践研究に取り組み、「学校としての研究」としていく。そのために次の三点に焦点化して具体化を図る。

- (1) 研究推進委員会を中心とした研究内容についての理論的な研究。
- (2) 授業研究を核とした授業改善についての研究。
- (3) 毎月の授業研究会、研究発表会、学校関係者評価委員会などの機会に研究内容を学校外に示して評価を受け改善を図る。

3. 研究の経緯と内容

①なぜ授業をするのか？－教職員の意識変革－

研究の出発点は「私たちはなぜ授業をするのか？」という問いであった。当然、「授業は生徒のため」に行われるべきものであり、これからの社会を生きていく生徒に自己実現のベースとなる力をつけるためのものである。ところが、改めて見直した時、現実の授業が「教師のための授業」になっているということを否定することはできなかった。その一つの理由として、私たちがどこかで自分の原体験に依拠していること—いまだ「入試で答が書ける力」・「テストの穴埋めができたり、選択肢に答えることができる力」を「学力」

ととらえて授業を行っていること—があった。そのため、この問いは「本当の学力とは何か」ということについての批判的検討を行うことにつながった。まずは、「学校」が生徒に「学力」を育てる場・組織であること、そして、その育てるべき「学力」を職員間で明確にするようにした。新学習指導要領には、今求められている学力がこれまでの「知識再生」の「覚える学力」から「思考力」・「判断力」といった「考える学力」に大きく変わろうとしていることが明示されている。私たちはこれからの社会を生きる生徒に本当の学力を身に付けさせる授業を、「生徒のための授業」を実現すべきであることを自覚し、「授業改善」を中心とした研究に力を注ぐことになった。

研究の基本的な考え方—生徒のための授業を実現する「授業改善」を行うこと—を確認した後は、何を変えるのか、どこを変えるのかという具体的な取り組みに入った。最初に取り組んだことは我々教師の意識を見直すことであった。一年目の大半は、新学習指導要領の底流に流れる考え方を学ぶこと、外部講師の先生を通して最近の教育方法学の知見を学ぶことに終始した。その中で少しずつこれまでの「学力観」「授業観」「学習観」を変えることをねらった。一年間にわたる毎月の研究会の結果、「授業」に対する意識が変わるとともに、「研究」に対する意識も変わってきた。「授業」も「研究」もこれまでと同じことを今後も続けていけばよい、という考え方から抜け出し、「生徒のための授業」、「生徒のための研究」にするには何をすればよいのかを念頭に置くようになってきたのである。

②授業研究のあり方の検討—授業研究会の意味と方法—

授業研究を日常の授業改善につなげるためには、授業がその日だけの特別なものであっても意味がない。ところが、「研究」として授業を行うとしばしば一時間のための授業を作り上げることに精力を注ぎ、その日だけの特別な授業が行われる、ということがある。また、協議会も自評という名の言い訳から始まる“懺悔の会”となり、授業者は針の筵に座らされるということがある。これでは授業者として手を挙げる教師も少なくなり、何より「教師のための授業」になってしまう。「授業研究」は、自分たちが日常的に行っている授業を提案し、そこに存在する課題を生徒の学習の文脈に沿って検討し合い、その後の授業づくりへの視点を明らかにして共有化しあうことこそ価値がある—こうした横浜国大教育人間科学部の高木展郎先生の考え方（資料1）に基づいた授業研究を実現するべく、横浜国立大学教育人間科学部研究員の三浦修一先生の指導に基づき、事中研究、事後研究のあり方を見直した。特に事後研究③「生徒インタビュー」を取り入れたことは、授業が生徒のためのものになっていたかを確認するためであり、我々教師が生徒にとって価値ある授業を提供しているかということを知るための「授業評価」にほかならないものであった。また、教師だけの協議会では思いもつかなかった情報（時には耳の痛い苦笑してしまう内容もある）を生徒の口から直接知ることができたり、授業改善に役立つ材料を多く得ることもできたりした。こうした「研究」はこれまで行ってきた「研究」に比べ格段に活性化されたものとなり、



事後研究での生徒インタビューの様子

教職員がその意義を大いに実感できるものとなった。また、私たちの授業に対する姿勢を生徒に伝える機会、生徒からの信頼を得る機会にもなった。

資料1 授業研究の考え方

【事中研究】

- ①指導者の教師としての力量をのみ見るのではなく、指導者と生徒との関わりや生徒同士の関わり、生徒が何を学んでいるか、について見る。
- ②それぞれの教室で行われた授業から課題を含めて何を学ぶべきなのかを生徒の学びの文脈から読み取ることが意識する。
- ③「授業参観している教師も含めて、みんなで授業を作る」という考え方に立ち、授業を参観している教師も授業を「壁の花」として見ているのではなく、せっかくの機会なので、授業に参加する（TT）。
- ④授業終了後に、着目者についてはインタビューを行い、その授業で何を学んだかを明らかにする。
また、付箋紙型のカードに、参観者が複数の生徒へのインタビュー内容をメモ。事後研究でそれを印刷することもできる。

【事後研究】

- ①授業者が自らの授業を振り返る反省を述べることは行わない。その授業のことを最も分っている授業者が、「自評」という形で主にマイナス面のみを語ることは、授業を向上する機会を失することになる。授業におけるプラス面とマイナス面を判断するのは、研究協議会全体を通して行う。
- ②生徒一人ひとりの現われを対象にして、参観者が語り合う。生徒一人ひとりに対しての参観者からの授業評価は、参観者の見方や考え方、さらに教師としての力量によって見え方が異なる。そこで、多くの参観者からの多面的・多角的な見方を語ることを通して授業を検討することが有益である。
- ③生徒からの授業に対する評価を行う。生徒からの授業評価は、授業後のインタビューを記述した付箋紙の印刷によるものや、事後研究会に直接数人の生徒を招いて、その授業に対する評価を生徒から直接聞く（そこでインタビューを行う）ことによって行う。
- ④教師側からの「目が輝いていた」といった印象批評は行わない。生徒の「現れ」という事実を基に語る。この語りを通して、授業参観者が生徒の何を見ていたか、何を理解したかが明らかになる。この見え方が、教師の力量を伸ばすことになる。（自己の授業評価の相対化がこのような語りによって図られる。）
- ⑤授業における「Plan-Do-Check-Action」のサイクルを再検討する。特に、結果としての評価を行うのではなく、その授業を行うことによって、次の授業への改善点を明らかにすることが重要。

③「学習計画表」（開示型指導案）と「振り返り」－指導案の書式検討から－

本校では生徒の「学ぶ力」を育てる観点から、研究の一環として「学習指導案」とほぼ

同様の「学習計画表（＝開示型学習指導案）」を作成し、生徒・保護者に向けて公開することを試行している。これは、“評価規準・評価方法が示されてから始まる授業”を目指したものであり、資料2「学習指導案について」（4）「学習する生徒のための授業の計画という立場」に立ったものである。「生徒のための授業」を実現するためには授業が生徒に見える過程として行われることが必要であり、それによって生徒自身が自覚的に学ぶことができるのではないか、という考え方に基づいている。

また、自らの「学び」を省察する「振り返り」を全教科で行うようにしている。教科によって毎時間行う教科や單元ごとに行う教科という差異はあるものの、「振り返り」を授業の核にすることでその「学び方」、「身につけた力」を生徒に自覚させられるのではないか、という考え方で実施している。

こうしたことは新学習指導要領総則の第4の2（6）の、「各教科等の指導に当たっては、生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるようにすること」につながるものであり、生徒のメタ認知能力と学習意欲の育成をねらったものである。

資料2 学習指導案について

（平成21. 2. 10 校内研究会資料より抜粋）

（4）学習する生徒のための授業の計画という立場

- ①学習材での授業の全体像があらかじめ学習者に示されていること。
- ②評価規準が示されていること。
- ③学習活動の内容について学習者が理解した上で授業が行われること。
- ④「振り返り」により、学習者が自身の学習を確かめることができること。

なお、指導案は横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校ならびに横浜市立港南台第一中学校の研究成果を基に簡略化したものである。資料3「『付けたい力』から授業計画へ『学習指導計画』記入のために」の考え方に基づきA4版1枚で作成している。「本時案」の記述がないのは、学力は基本的には1時間で身につくものではないこと。「育成を目指す学力を重視するならば、どのようなプロセスで育成を目指す学力を身に付けていったかを問題にすべき」であるとの考え方からである。「学習のプロセス」を中心とした指導案を作成することで、單元全体の中にそれぞれの教科が求めている「評価の観点」が見えるようになったことは、授業者にとっても学習者にとっても有益であった。

*指導案の基本形は資料4「A4版1枚の指導案」に示す。

資料3 「付けたい力」から授業計画へ「学習指導計画」記入のために

（平成20. 11. 19 校内研究会資料より抜粋）

1 指導事項

学習指導要領の各教科の「内容」に示された指導事項を示す。

2 育成を目指す能力

1から導かれる、この單元（題材・教材）で生徒に身に付けさせる能力を示す。

3 教材

単元名・題材名・教材名を示す。

4 評価規準

各教科の評価規準を国立教育政策研究所資料から抜粋して、必要な修正を加える。

- 考え方
- (1) 評価規準は、4 観点（国語は3 観点）すべて設定する。
 - (2) 1 時間で、または1 次で1 つの評価をする。
 - (3) 「関心・意欲・態度」の評価は、学習の最終段階で行うものとして位置付ける。

5 評価規準と評価方法

4 で示した評価規準から、その授業における具体的な評価規準を考え、評価方法と組み合わせて記述する。4 の評価規準との整合性についての検討が必要である。

6 授業計画

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次とするのは、Ⅰが導入段階（課題提示＝「つかむ」）、Ⅱ学習の展開段階（課題追求＝「深める」）、Ⅲがまとめの段階（課題解決・振り返り＝「まとめる・振り返る」）という学習過程を踏まえるためである。それぞれの段階で必要な授業の時間数を考え、全体の計画とする。

7 学習活動（*昨年11月以降は「言語活動」に該当する部分に下線を引くことにした。）

5 の評価が可能な学習活動とはどのようなものか記述する。学習者の行動として考える。

8 ①指導上の留意点

この学習計画で、学習指導上、何を大事にするか、また指導過程の中で気をつけたい内容は何かを記述する。

②B規準に達しない学習者への指導

特に中心として位置づける評価規準について、学習する中で予想される躓きや、到達の不十分な学習者にどのように助言するか、指導するかを記述する。

資料4 A4版1枚の指導案

三崎中学校 第〇学年 〇〇科指導案 (〇月 〇週・ 〇時間)

指導内容	学習指導要領の内容から、単元・教材で扱う指導事項を示す		
育成を目指す能力	生徒に身に付けさせたい学力を示す		
単元・教材			
評価規準			
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
学習の過程で行う学習評価の規準を示す。 学習への見通しを持たせるために、授業の最初に示すことを前提に、設定する			
授業計画			
	具体の評価規準と評価方法	学習活動 (下線は〇〇科における言語活動)	
1	<ul style="list-style-type: none"> この単元(教材)の学習の過程を示す。 「具体の評価規準」は、単元の評価規準に基づき、各学習のまとまりで行う評価規準として示す。 「関心・意欲・態度」の評価は、学習の最終段階で行う。 数時間にまたがる評価もあり得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学習活動」は、毎時間の生徒が行う具体として示す。 学習のまとまりを整理して、単元(教材)全体の学習がどのように組織されているかを示す。 「振り返り」は、見通しについて行うものであって、そのためには、毎時間の学習についての見通しを明示することが必要である。 	
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
①指導上の留意点、②B規準に到達しない学習者への指導・支援			
<ul style="list-style-type: none"> 授業を行う上で授業者として留意していることを示す。例として「学習過程・学習形態・単元/教材などの工夫」や「学習活動の活性化のための取り組み」など。 また、生徒に配布する「学習計画」の場合、この欄には「学習のポイント・気をつけたいこと」を記載したり、生徒が「単元の振り返り」を書けるようにする。 			

④グループによる研究

本校の研究は、実践を重ねる中から仮説を立て、その仮説をもとに更に実践を重ねて仮説を生み出していくという「仮説生成型」の研究スタイルであった。これは私たちが日常的に行っている1時間、1時間の授業の振り返りを基に次の授業に活かしていくことを授業研究として意識的に行うことである。授業を中心に据えて、複数の教師でその授業を協議し、教師自身が自己を変革していく－その中で新しい授業を創造し展開する、そうした研究、「授業改善」を目指したものである。実際には、教科の特性によって教員を以下の3グループに分けて行ってきた。

授業研究の研究グループ

- A 国語、音楽、英語 (学習内容と学習対象が重なり合う教科)
- B 数学、理科、技術家庭 (内容についての科学的認識が問われる教科)
- C 社会、美術、保健体育 (学習の方法や表出で共同性と相互理解が求められる教科)

そして、毎月の研究会では各グループが1つの授業を行い、協議会で「学習指導のあり方」、「生徒の学習の構造化(学び方が身につくか)」について共通する内容をグループで協議し、授業改善の視点を洗い出している。まだまだ課題も多く焦点化も十分なものではないが、具体的な授業改善の視点を資料5「授業づくりの具体的な視点」として整理している。

資料5 「授業づくりの具体的な視点－授業を生徒に見える過程として行うために－」

プレ：授業を始める前に、この単元(教材・題材)で扱う学習の基盤となる学力がどの程度身に付いているかを、生徒自身に確かめさせる。

- ①授業を「能力(学力)」育成のための過程と考える。
- ②「学習の目標」と「評価規準」を示してから授業を始める。
- ③「評価規準」が評価できる「学習活動」を行わせる。
- ④この単元(教材・題材)で育成する「思考力・判断力・表現力」を基に、どのような言語活動をさせるのかを示す。
- ⑤「関心・意欲・態度」は、学習の最終段階で評価する。
- ⑥学習者による「振り返り」は、授業を行う教師への授業評価でもある。
- ⑦「教えるから授業」とはいえない、という意識をもって授業を組み立てる。
- ⑧生徒の「聞く力」を育てる授業を、学校として取り組む。
 - ☆他の生徒の発言を「聞く」習慣を付けよう
 - ☆教師が生徒の発言を「まとめる」ことをやめよう
 - ☆他の生徒の発言を「つなげる」発言を促そう
- ⑨教師が授業中に積極的に生徒の発言や行動を評価する。
- ⑩「答えを見つける」授業をやめることから始めよう。

(平成22.8.31 校内研究全体会資料より)

4. 成果と課題

本校での実践は他校では当たり前に行われていることかもしれない。しかし、学校として得られた成果は大きなものであった。これまでの取り組みは職員の授業に対する意識を大きく変え、苦しい状況の中でも「生徒のための授業」を少しでも実現しようとする姿勢を生み出した(資料6)。そして、この数年間で日常の授業風景は明らかに変わってきている。授業研究も日常化したものとなり、職員室内での共通の話題も生徒指導を中心にしたものから授業中の生徒の学びの姿を語り合うものになってきた。そして、何よりも、学習に価値を見いだす前向きな生徒が多くなり、授業に向かう生徒の姿勢に変化が見られたことが最大の収穫である。また、研究との関連は明確ではないが、生徒指導上の課題は依然として存在するものの、この数年間における本校の生徒指導上の問題は減少傾向にある。

なお、23年度は校長・教頭を含む大幅な人事異動により、研究もこれまでの取り組みを確認すること(資料7)からのスタートであった。人事異動は公立学校の宿命ではあるが、研究が足踏み状態であったことは否めない。しかし、これまでの研究を通して「生徒のための授業」が少しずつ実現されてきたという手応えは感じており、その蓄積を糧にさらに学校としての実践研究を重ねていきたい。

資料6 平成22年度 職員反省より

- 何か新しいものを創り出すのは、ものすごくパワーがいることであり、また周りからの反発などもあり、容易なことではないと実感しました。しかし、誰かが声を上げ、きっかけをつくらないことには、旧態を維持していただくの無意味なものになっていくことも強く感じました。もう5年目だというのに、教師としての力量が全くと言っていいほど付いていない自分ですが、今後も自分なりに精一杯、努力していきたいと思います。
- 教師も何かのきっかけがないと動かない。研究とは教師を動かす原動力でもある。
- 自分が今まで経験したどの研究・研修よりも実のある研究でした。
- 研究は大変な部分もあったが、間違いなく自分のためになった。この2年間の研究がなかったら自分の授業はどうなっていたかと思うと、本当に助かった。
- お恥ずかしいが、実践が全てみたいなきもちを持っていたことが、いかに誤りであるか分かった2年半である。ともすれば、校内だけで研究をすすめることが多いが、新しい価値を見つけるのは難しい。
三浦先生を招聘していただき本当にありがたかった。
- 研究会が教師の懺悔の時間ではなく、より有益なものにするためにどうすればよいかを考えさせられた。
- 様々な点で、授業改善の方法に気づいた。
- 自分自身の課題を見つけられ、○○のために△△するという具体的な対応や改善ができました。
- 自分の授業に対する考え方が今までとがらっと変わった。
- 単元や授業の流れが、教師にも生徒にも明確になった。生徒が学習指導案を見て確認している姿を見て、改めてその必要性を感じた。
- 研究発表に関するさまざまなこと、本当にありがとうございました。反省会で

- も言いましたが、こちらが「これは」と思って行った授業を、「いまいち」と生徒にばっさり切られるということを潔く受け止めていこうと思います。
- 生徒が主体的に動ける授業とはどんなものか…色々考え工夫してみたこと、これが大事なんですね。
 - 自分の授業が、本当に生徒のためのものになっているかを深く考えさせられました。
 - 勉強し続ける気持ちと工夫し続ける気持ちを持ち続けなくてはいけないなと思っております。
 - 勉強しなきゃな、こんな取り組みしてみたいなと意欲がわきました。
 - 生徒のエネルギーを強く感じ、もっと自分を鍛え上げなければ…と感じました。
 - 研究を通して、まだやることがいろいろとあるんだなと感じ、日々の努力が必要だと思いました。
 - 授業に今までやったことのないことを取り入れて指導を行うきっかけとなりました。
 - 指導者・授業者としての基本を学んだ（と思う）。
 - 生徒の実態に合わせて、今までにない取り組みを授業の中にこれからも取り入れていこうと思っています。
 - これからも研究のための研究にならないように、今後どう繋げていくかが重要だと思います。
 - 正直なところ、大変な研修でした。ただでさえ忙しいこの学校でここまでやったのはたいしたものだと思います。何かしらのきっかけがなければなかなかできない貴重な体験でした。研修した事柄が今後にも生かせ発展させることができるように努めたい。
 - なんだか、とても慌ただしく研究発表会を迎えた感じでした。あーもう少し授業内容を考えればとか…、振り返るといろいろと考えさせられます。でも、他の先生の授業を見たり指導案をみんなで検討した時間は大変貴重なものでした。授業の中でも、生徒から返ってくる反応・手応えが少しずつですが違ってきていると思います。今後も授業の工夫・改善は続けていきたいと思っています。
 - 今回は見学させていただきましたが、自分の経験のために授業を担当してみたいと思いました。大勢の先生方が見てくださっている中で、授業をするという緊張感を味わえば新しい感覚が手に入ると思います。まずは、日々の授業で勝負していきます。
 - 生徒の実態や課題を共有できた。
 - 目標を明確にし、見通しを持って授業する。
 - 三浦先生の話や自分の実践から新たな発見が本当に多くあった。
 - まず三浦先生の話で、今までの授業に対する自分の姿勢を考えさせられた。毎回の研究会での内容がとても有意義で楽しかった。
 - 学習内容の扱い方を、三中生に合わせて設定していく必要がある。
 - 今後も三崎中学校の発展のために教師が一丸となって、研究に取り組みねばいけないと思います。
 - 最新の情報が常に提示されたこの研修は大変有意義なものとなりました。

- まずは、教科についてや指導要領についての勉強をしなくては行けないと、先生方の授業を見学して感じました。
- 学問（学習原理）の価値を改めて発見した。それまでは、実践が全てくらいに考えていたので。
- 新しい価値を獲得し、そのことにチャレンジした2年半でした。
- 常に自分から新しい取り組みや改善の余地はないのかと工夫し続けることが大切だと思いました。研究に終わりなし。
- 自分の未熟さを改めて実感した。今後やらなければならないことが山ほどあり、これからが本当の勝負だと思う。
- まだまだ始まったばかりという印象。これで終わりではなく、これからが始まり。

資料7 平成23.6.16 校内研資料「三崎中学校が目指す授業」より（抜粋）

1 生徒による授業評価（生徒インタビュー）を行う意味と留意点

- ア 授業が生徒にとってどのような価値のあるものだったかを、授業に参加した生徒自身に語らせることにより、授業の質と内容について評価させることが第一義である。
- イ したがって、参加する教師には「インタビューを行うことが目的である」ことを自覚することがまず求められる。
- ウ インタビューにおける留意点（もしくはタブー）
 - （1）インタビューの趣旨は、受け手の中身を引き出すことにある。我々教師の教育観や指導観を押しつけるような質問や発言は行うべきではない。
 - （2）生徒の声を聞く時間である。一人の教師の発言は、最大でも1分程度であると心得て、「開かれた問い」を発することに徹するべきである。
 - （3）このインタビューの時間も含めて、我々教師と生徒とは、人格として対等の立場にあるという姿勢が伝わらなければ、生徒から価値のある発言を引き出すことはできない。

2 授業研究会の意味と方法

- ア 授業に参加した教師が、そこでどのような学習が行われていたかを確認することから出発する。
- イ 生徒の学習の経験がどのような意味を持つかを、具体的な場面から検討する。
- ウ 授業が学力を身につけさせるものとなっていたかという視点から、その授業の構造を検討する。
- エ 授業を行う教授者としての教師の行為の妥当性について検討する。
- オ より質の高い授業を行うために、その授業で改善すべき点について検討する。
- カ カリキュラム・マネジメントの立場から、その授業が前後の時間も含めて、学習する生徒の学力を育てているかを検討する。
- キ 特に課題となっている「生徒が思考力・判断力・表現力を身につけるための言語活動」がどのように位置付き、具体的にどのように行われているか、指導計画全体の妥当性も含めて検討する。

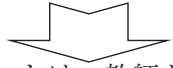
- ク その授業における評価規準と評価方法が妥当であるか、また、学習活動と合致しているかを検討する。
- ケ 学習の目標を授業に参加していた生徒がどの程度達していたかを評価することにより、その授業だけでなく単元（教材・題材）の指導計画そのものが妥当であったかを検討する。
- コ 学習者の取り組みの状況から、教科の関心・意欲・態度を育てる授業となっていたかを検討する。

3 学習指導のあり方を改善するための具体的な取り組み

(1) 授業を変える具体として

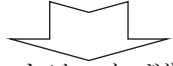
- ① そもそも問い・・・「授業はだれのものか」
- ② 授業の何を、どう変えるか

ア トークとチョークとジョークとワークシートからの離陸



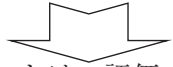
ポイントは：教師がしゃべっている間、生徒は学んでいない

イ 「一人で学ぶ」→「みんなで学ぶ」→「振り返る」という学習の流れ



ポイントは：なぜ学ぶのかを自覚させる仕掛け

ウ 評価規準・評価方法が示されてから始まる授業



ポイントは：評価の闇討ちをやめる

学習した成果をテストだけで測らない → 「量」の評価から「質」の評価へ

- ① 「答え」を求める学習をやめる
- ② 「正解」はあるのか
- ③ 平均点や100点満点への疑問

(2) 授業を考える枠組みとしての学習指導案の形式を創る

- ① 「学習評価」の改善から
- ② 「言語活動」が行われる授業を
- ③ 「見通しと振り返り」で学習意欲を育てる工夫を

*この資料は、「これまで目指してきたこと、明らかになったこと」を三崎中に異動された方の理解の一助として作成されたものです。

「学校とは何か」を考える学校へ ～「やらされている校内研」から「やりたい校内研」へ～

愛川町立愛川東中学校 中村 慎輔

1, 「学校をよくしたい」

1) 学校の課題 本校の現状

学校全体としては、大きな生徒指導的な問題を抱えているわけではなく、生徒の学校生活は、一応落ち着いてはいる。学校行事等にも積極的に取り組もうとする姿勢が生徒・教師・学校全体にある。その一方で、生徒の学力は県内と比較しても、高い方ではなく、学力の向上は本校の大きな課題である。日々の授業に関しても、なかなか前向きに取り組むことのできない生徒が各学級数名見られる。

また、不登校生徒が多く、学年が上がるにつれ、増加する傾向にある。不登校生徒の増加に歯止めをかけ、減少させていくことも本校の大きな課題である。

職員の年齢構成は、40代後半50代が多く、中堅が少なく、若手が多いという他校に多く見られる構成であり、若手の教員としての力量をアップさせることも課題の一つである。

2, 校内研テーマ「授業力向上」

1) 授業研究の必要性

生徒は毎年、体育大会・合唱コンクールといった学校行事に学級一丸となって取り組み、毎回大きな感動を与えてくれる。部活動も盛んで、どの部も朝・放課後と日々一生懸命、練習に励んでいる。そんな中、学校課題を改善し、学校をよくするためには、生徒の一日の学校生活の中で最も大きな時間を占める「授業」に着目し、教師がより「よい授業」をできるようになる必要があると考えた。ここでいう「よい授業」とは、教師と生徒、生徒と生徒が協力し、助け合ってわかる授業を目指そうというものである。わかるから楽しい、楽しいからわかるという理想の授業へ近づくために、生徒の学習意欲（やる気）を高める工夫が必要である。やる気を引き出すために、生徒どうしが教え合う・助け合う環境をいかに設定できるかを考え、実践していくことが教師の授業力向上につながると考え、校内研のテーマを「自ら学び、力を伸ばし、その手応えを感じることでできる生徒の育成～聴いて、考えて、つなげる授業を目指して～」とし、授業研究を年間通して行うことにした。

3, 「何とかしたいけど、どうしていいかわからない」

1) 教師の思い

昨年度までも校内で授業研は年3回行われてはいたが、これまで行われていた授業研究は旧態然としたものであった。各学年1名ずつ授業を行い、授業後、授業者が反省を述べ、その後質疑応答、そして参観者が感想や労いの言葉をかけて終わるといったものであった。授業者も若手が多く、「ベテランにやらせては申し訳ないから、とりあえずやる。」といった消極的な姿勢が見られた。

また、その他の教員にしても、「学校生活において、授業が大切なのはわかる。教師としてよい授業ができるようになりたいという思いもある。しかし、何を目指し、どういう授業をすればいいかわからない。」といった切実な声も聞かれていた。

4、職員の思いに答える学校改善のためのしかけ

1) 校長の思い

①学校組織の再編成

校内研を23年度の学校経営の柱に据え、目標の重点化、明確化を図り、すべてのグループがすべての領域で相互に支え合い、補完し合っていく組織に再編成した。

〈資料〉

平成23年度愛川東中学校教育計画より

・平成23年度の4つの学校づくり（重点）

(1) 自ら学び、力を伸ばし、生徒がその手応えを感じることができる学校

3つの学力（①基礎的・基本的な知識・技能 ②思考力・表現力など知識を活用する力③学習意欲）を伸ばすために、実践的な研究を行うなど、授業改善に取り組んでいく。

(2) 将来を見据え、生徒が生き生きと学校生活に臨む学校

(3) 心と体、心身ともにたくましく、生徒が健やかに伸びゆく学校

(4) 地域とともに、生徒も親も教師にとっても魅力あふれる学校

・学校運営組織 目的別プロジェクト型グループ構成及び重点目標

(注：校内研テーマと関連する重点項目のみを抜粋)

学び推進G

23年度重点事項：校内研究の充実（授業改善）「新学習指導要領の趣旨を生かした授業改善」

①初年度としては、テーマ内容の研修、理解、本校の課題の明確化とし、授業研究など実践的な研究をしていく。講師招聘による研修などを複数回実施する。「聞いて→考えて→つなげる」がベース。

②基礎基本だけにとらわれることなく、学力の定義としてうたわれた3点を総合的に研究推進する。

③小中の学びの接続(むしろ継続)を視野に入れて小中連携で取り組む内容としていく。23年度に中津、菅原小と合同研修会を計画する。また中高連携も視野に入れていく。

活力ある学校づくりG

23年度重点事項：生徒が生きる学級・学校行事、互いに支え合い、励まし合う

①生徒どうしの良い関わり合いの中から互いに伸びていく集団、安心感のある集団づくりを重点課題とし、教育活動の展開を通して、生徒が将来にわたって必要とされ

る力（生きる力・あきらめないこと・がんばり抜くこと・意欲や自主自発性）を伸ばして行く。

- ②校内研究における授業改善の基盤ともなる「楽しく、充実した学校生活」を目指していく。
- ③生徒指導・支援グループの課題「不登校の減少」とも関連する内容と考える。

生徒指導・支援G

23年度重点事項：支援教育の充実～不登校状態の改善（意味のある不登校生徒、学校に来ることによって伸びる生徒）

- ①活力ある学校づくりGとも関連。きちんとした中にも互いに居心地の良い学校を目指す。

地域連携・学校改善G

23年度重点事項：学校の良さの積極的発信・小中連携推進に向けた基盤づくり

- ①校内研究（授業改善）との関連を将来的に見据え、23年度は具体的に小学校、高等学校、地域との連携内容の整理、調整を中心に取り組んでいく。

②スクラップービルド

校内研を進めていくのは、先生方である。本年度校内研を重点化することで、それが昨年度と比べ、多忙感、負担増になってしまっは、形骸化してしまう。単純に仕事量を上乘せするのではなく、会議の精選を行った。具体的には、月1回行われていた職員会議を約半分に減らし、それに関連するグループ会議等も減らした。

2) 授業研の改善

①グループ構成

昨年度までは、学年単位のグループ構成で授業研及び研究協議を行ってきた。今年度からは、複数教科による研究グループを構成し、各グループの「事前研究計画」に沿って、グループで指導案の検討、授業の検討を行った。これにより授業者だけの授業でなく、また、グループメンバーが評論家・傍観者とならず、みんなで授業を作り上げていくという意識付けになった。

〈授業研究の研究グループ〉

- グループA 国語、音楽、英語 : 学習内容と学習対象が重なり合う教科
- グループB 数学、理科、技術家庭 : 内容についての科学的認識が問われる教科
- グループC 社会、美術、保健体育 : 学習方法や表出で共同性と相互理解が求められる教科

※上記のグループ構成は、三浦市立三崎中学校の校内研究実践を参考にさせてもらった。

校内研では、毎回この3グループが1つずつ授業研を行った。

②指導案

〈資料:本校校内研資料より抜粋〉

1) 「付きたい力」を育成する『プロセス重視の指導案』の使用
研究授業ということで、普段着の授業でない「イベント的」な授業を構想したり、「言語活動の充実」という文言の不十分な理解から活動あって学びなしという状況に陥ることが危惧される。

そこで、付きたい力を明確にした『プロセス重視の指導案』を本校内研修では採用した。

この指導案は、育成を目指す学力（身に付きたい力）が明確であり、学習のプロセスを中心に情報を絞り込んである。それによって、カリキュラム作成の考え方ならびに授業を見る視点が明確になるようにしている。従って、他教科の授業でもその後の研究協議で同じベースで話し合うことができるため、本年度の授業研究グループ構成にも適していると考えた。

2) 本校における『プロセス重視の指導案』の具体について

『プロセス重視の指導案』は、A4版4ページからなるものである。この指導案は、上述したとおり、われわれが授業研究を行っていく上で、大変優れた指導案であることは間違いない。ただし、従来版とはその形式が大きく異なることから、慣れない作成者にとっては、本指導案作成に対する負担感が大きくなるのも事実であろう。そこで、本校では、この『プロセス重視の指導案』の趣旨に沿った形式の簡略化された指導案を採用していきたい。これは、三浦市立三崎中学校校内研究で実際に用いられたものである。「学習指導計画表」と呼ばれている。

3) 生徒インタビュー

授業研の持ち方を変更したことにより、事中研・事後研も持ち方も大きく変更した。

事中研究・事後研究の持ち方については、実践先進校の実践事例を参考にし、取り組んだ。特に授業を受けた生徒に残ってもらい、授業について直接生徒から話を聞く「生徒インタビュー」では、授業中、教師が良かれと思って、親切丁寧に教えていたことが、生徒のインタビューで、「教え込まれるよりも、自分たちで考える授業をしたい。」との答えが返ってきたということがあった。教師のその授業に対する意図が生徒に伝わったのかを検証したり、教師の考えと生徒の考えのギャップを明らかにするという点で大変意義のあるものとなった。

3) 外部への発信

①一貫して継続した視点・検証

色々な人の色々な話を聞くのではなく、一貫した考え方で校内研を進めていった。

外部有識者の招聘

年間通じて同一指導主事による校内研への参加

同じ方向性で研究を進めている先進実践事例校の先生の話

②小中連携、中高連携

学力の向上は、中学校だけでできるものではない。小中連携、中高連携が重要と考え、毎回校内研の案内を学区の小学校、高校に送り、小学校の先生方に見てもらった。これにより中学校が学力向上のためにどのような取り組みをしているかを知ってもらうよい機会となり、研究協議を通じて意見交換もできた。将来的に同じスタイルで取り組めたらいいと考えている。

また、学校ホームページに校内研の案内を載せたり、学校評議委員の方々にも校内研に参加して頂いたりした。校内にとどまらず、外部の教育関係者の方々に積極的に見て頂くことで、毎回の校内研がおぎなりのものにならず、教師にとって緊張感のある、モチベーションの高いものになったと思われる。

4) 見えてきたこと、目指したいこと

①教師の意識改革 「やらされている校内研」から「やりたい校内研」へ

『プロセス重視の指導案』を本校内研修で採用したことにより、育成を目指す学力（身に付けたい力）を意識し、教師が各教科の学習指導要領解説を開く機会が増えた。また、1単位時間の授業ではなく、単元を通した学習のプロセスを意識できるようになった。これにより、先を見通したり、授業と授業の結びつきを自覚できるようになった。「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」または「教科書から脱却した自由な発想」ができるようになり、授業を考え、工夫する過程が楽しく、面白いものとなってきたようで、若手の教師達が放課後遅くまでアイデアを出し合い、相談する姿も見られた。

②生徒の変容

教師が面白がって授業をしようとする生徒にもそれは十分に伝わる。

授業研のために自分たちのクラスだけ残って勉強をするということに対し、最初は不満の声が大きかったが、ただ単に教科書を進めるだけでなく、「何か面白そうなことを先生がやってくれそうだな。」という生徒の期待感が芽生え、「残って勉強してみてもいいかな。」と思う生徒も出てきた。その後の生徒インタビューにも出席を希望する生徒が増えてきた。少しずつではあるが、学習意欲へと結びつつある。

③次年度へ向けて

「校内研の取り組みで授業をする際の意識が変わった。」

「校内研究を学校全体の取り組みとしてできたことはとても成果があった。『やらされている校内研』から『やりたい校内研』に変わったと思う。」

これらは、本年度の教育課程編成の反省に書かれた若手教員の言葉である。若手だけでなく、ベテラン教師も「やってみようかな。」という気になってきている者もいる。

校内研1年目、本校教師の意識が少しずつ変わってきている。次年度は本年度のやり方を継続しつつ、各教科等における言語活動の具体として「聴いて、考えて、つなげる」をどのように行うのかということについて、本年度以上に検討協議していきたい。

授業を通して生徒と真剣に向き合い、「生徒に付けたい力とは何か」「どうやったら生徒に付けたい力をつけられるのか」を考えることは、「教師の役割は何か」「学校の役割は何か」「そもそも学校とは何か」を考えていくことになる。それは「これからの学校のあるべき姿」をわれわれ現場の教師が考えることにつながっていくと思う。

〈資料〉平成23年度校内研究 年間活動実績

No.	日付	曜	研修内容
1	5/11	水	・第1回校内研究 ①具体的な提案と今後の予定 ②三浦修一先生講義「授業が変われば学校が変わる～生徒のための授業が行われる学校へ～」
2	6/29	水	・第2回校内研究 ①授業研究1（1名）授業者：中村慎輔（国語） 2年4組 ②研究協議 今後の研究協議の進め方のモデリング ③指導助言 三浦修一先生 高山真一指導主事
3	8/29	月	・第3回校内研究 小中高合同講演会 ワークショップ「学習評価から授業を変えていこう」～授業と学習評価の在り方を考えるために～
4	10/19	水	・第4回校内研究 ①授業研究2（各グループ1名：英語・数学・体育 計3名） ②研究協議（各グループ） ③指導講評 三浦修一先生 高山真一指導主事
5	12/7	水	・第5回校内研究 ①授業研究3（各グループ1名：音楽・数学・美術 計3名） ②研究協議（3グループ） ③指導助言 三浦修一先生 三藤敏樹先生 小清水宣雄先生
6	2/9	木	・第6回校内研究 ①授業研究4（各グループ1名：国語・理科・社会 計3名） ②研究協議（3グループ） ③指導助言 三浦修一先生 山本金吾先生 高山指導主事
7	3/15	木	・第7回校内研究 ①授業研究1（数学） ②研究協議（3グループ） ③校内研究先進実践校の紹介（横浜市立港南台第一中学校三藤敏樹主幹教諭） ④指導助言 三浦修一先生 山本金吾先生

第4章 授業実践～プロセス重視の指導案集～

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

1 日 時 平成24年1月27日（金） 5校時（12：45～13：35）

2 学習者（会場） 横浜市立港南台第一中学校 2年 5組（教室）

3 教科の視点から育成を目指す能力

（1）学習指導要領の指導事項から

- ・ 分かりやすい構成や展開を考えて話すとともに、敬語の働きに注意して話す能力。
（新学習指導要領 「話すこと・聞くこと」イ）

（2）評価規準

評価規準の作成のための参考資料（平成22年11月 国立教育政策研究所教育課程研究センター）

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
① 調べたり考えたりしたことなどについて、聞き手が理解しやすいように工夫して説明しようとしている。	② 説明に対する聞き手の意見や質問を予想して、話の中心と付加的な部分との関係に注意し、分かりやすい構成や展開を考えて話している。	③ 目的や場面に応じ、話し言葉と書き言葉の違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについて注意して話している。

4 単元・学習材名

「敬語 ～『職業体験学習シミュレーション』を体験しよう」

「敬語の指針」（平成19年2月2日 文化審議会答申）

5 授業にあたり

国語科における「敬語」の指導は、ともすると「尊敬語・謙譲語・丁寧語」といった敬語の種類等の形式的な知識の学習にとどまり、それを生かし、使い慣れることにまで至らないことになりがちである。しかし、「生きて働く言葉の力」の一つとして、主体的に自分の言葉遣いを選ぶ「自己表現」としての「敬語」を身に付けることは、「相互尊重」に基づく対人コミュニケーションにおいて不可欠であり、そのためには、一人ひとりの生徒の言語生活と結びつけて敬語の必要性や機能に気付かせ、敬語学習への意欲を持たせることが必要になる。

今回は、対人コミュニケーションの「実の場」として、本校の2年生で実施する職業体験学習の場面を設定し、その場面における言葉遣いをシミュレートすることを通して、自分の話し言葉を振り返らせるとともに、「敬語」の種類や性質、機能に気付かせ、あわせて文化庁「敬語の指針」に示された「敬語」についての基本的な知識を身に付けることを目指している。「職業体験学習」における事業所や顧客の人々に対するの相手意識の中で、

相手や場面に応じて適切な話し言葉で話したり、聞き取ったりする機会としたい。

また、資料として、「敬語の指針」（平成19年2月 文化審議会答申）を使用した。中学校2年生には少々難解な部分もあるが、社会生活の中で用いられる文書を読み、内容を読み取る経験もさせたいと考えた。

「敬語の指針」による敬語の五分類について、「中学校学習指導要領解説・国語」では「生徒の実態に応じて取り上げることも考えられる」（p.60）としている。今回は、特に「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ」の違いについて、「向かう先」を立てるのか、「相手」を立てるのかに着目し、日常用いられる会話に即して理解させるようにした。

この授業は、「総合的な学習の時間」における問題解決的な学習としての職業体験学習が2年生の学年末に行われる想定で構想している。具体的には夏休みを中心に取り組む職業調べレポートの作成と発表をもとにさまざまな職業についての学習や、社会人としての心構え、言葉遣い等の学習を進め、2月2・3日に実際の事業所での職場体験とその振り返りを実施する予定である。

職業体験学習に際しては、事前に行う電話あるいは訪問による打合せを始めとして、体験学習中の事業所の人々との会話、さらに体験する職種がサービス業である場合は顧客との対応など、日常の学校生活とは異なる言語生活の「実の場」が豊富に存在する。それらは、さまざまな立場の人々とのコミュニケーションにおける「自己表現」の能力が問われる。そしてそこでは人々との「相互尊重」の精神にもとづく自覚的なコミュニケーションが求められる。

それらのことを踏まえて、今回の授業ではサービス業を中心としたいくつかの事業所を想定し、事業所の経営者、従業員、顧客等の役割を演じながら職業体験学習のシミュレーションを行う言語活動に取り組ませている。そのような場面設定によって、異なる立場の相手とのコミュニケーションにおける「自己表現」を問われる機会としたい。シミュレーションにおけるロールプレイを行うためのグループでの話し合い、場面における適切な言葉遣い、とりわけ「敬語」の選択、ロールプレイにおける実際の話し方など、授業の中のあらゆる場面でこれまでの学習で習得した能力を活用することが求められている。そのような言語活動の中で、「受信→思考→発信」というPISA型「読解力」のプロセスを常に意識させながら授業を進めていきたい。

6 能力育成のプロセス（6時間扱い 本時は5時間目）

次	時	<p style="text-align: center;">評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】</p> <p>○ Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて</p>	<p>○主な学習活動 国語科における言語活動（下線）※</p> <p>・留意事項</p>
I	1 ～ 3		<p>○ 文化審議会答申「敬語の指針」を読み、敬語の働きと分類を知る。</p> <p>・ 尊敬語、謙譲語Ⅰ、謙譲語Ⅱ（丁重語）、丁寧語、美化語について、実際に使われる文脈に即して説明する。</p>
II	4	<p>③ 生活の中で、目的や場面に応じた敬語の働きと種類を理解している。</p> <p>【パフォーマンス（ロールプレイ）の観察】 ～日常的な評価</p> <p>○ その場の状況や文脈に即して、謙譲語Ⅰ・Ⅱを適切に使っている。</p> <p>☆ 敬語の分類の理解が不十分な学習者や適切な話し方や言葉遣いができていない学習者とロールプレイを行い、実際に言葉を使う場面の中で理解させる。</p>	<p>○ いくつかの例文を読んで状況や文脈に即して敬語の使い方を確認する。</p> <p>・ 自分側の人間には尊敬語を使わないこと、尊敬語と謙譲語を区別すること、敬語の使い方の過不足に注意させる。</p> <p>○ 教師とともにロールプレイを行い、実際に職業体験学習を行う際の話し方や言葉遣い、態度について理解する。</p> <p>・ 状況を設定して教師が生徒とロールプレイを演じながら、話し方や言葉遣い（敬語の使い方）について、実際の場面の中でどのように行われるか、気づいたことをメモさせる。</p>
	5 本 時	<p>② 話に対する聞き手の意見や質問を予想して、話の中心と付加的な部分との関係に注意したり、分かりやすい構成や展開を考えたりして、話したり聞き取ったりしている。</p> <p>【話し合い後の記述の確認】 ～記録する評価</p> <p>○ 適切な自己表現をするための話し方や言葉遣い（敬語の使い方）をしているだけでなく、相互尊重の態度で話したり聞き取ったりしている。</p> <p>☆ 適切な話し方や言葉遣い（敬語の使い方）ができていない場合、教師がその役を演じて不適切な言葉遣いをし、どう感じたかを考えさせながら適切な話し方や言葉遣い（敬語の使い方）について考えさせる。</p>	<p>○ 2～3人組になって状況と立場（役）を決め、ロールプレイ（役割演技）によって職業体験学習のシミュレーションを行う。</p> <p>・ 次のような状況を設定し、演じる役を決めさせる。</p> <p>・ 事業所は幼稚園、クリーニング店、レストラン等</p> <p>・ 演じる役は事業所の職員と体験中の生徒と客</p> <p>○ グループで「職業体験学習シミュレーション」の学習を振り返る話し合いを行い、話し方や言葉遣い（敬語の使い方）、発言の内容などについて気づいたことを記述して、自分の考えを持つ。</p> <p>・ 与えられた状況・内容における適切な言葉遣い（敬語の使い方）を考えて実際に話し、その時に気づいたことをメモするようにさせる。</p>

Ⅲ	6	<p>① 人と人がコミュニケーションを円滑を行うために、主体的に言葉遣いを選ぶ自己表現としての敬語を適切に使用おうとするとともに、相互尊重の気持ちを大切に話したり聞いたりしようとしている。</p> <p>【リフレクションの記述の分析】 ～記録する評価</p> <p>○ 話し合いを通して実際の言語生活に役立つ方法を見出そうとしていたり、自分の言語生活をよりよいものにしていたりしている。</p> <p>☆ 「『実際に働く時に気をつけたいこと』を他者に伝えるとしたらどうするか」という視点で考えさせる。</p>	<p>○ 「敬語」についての学習全体を振り返り、「敬語」についての自分の考えや、これからの自分自身の言語生活についての考えをまとめ、記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの授業で用いたワークシートに書いたメモをもとに、一人ひとりが自分の学習についてのリフレクションをするようにさせる。 ・ 職業体験学習の際だけでなく、他者と協働して行動する場合や、他者に自分の考えを伝える場合、他者の話を聞いて自分の考えをまとめる場合に注意することについて、敬語の使い方等言葉遣いを中心に考えさせる。
---	---	--	--

※ 国語科における学習活動は基本的にすべて言語活動であるので、ここでは「読むこと」の授業において学習者が思考・判断したことと、思考・判断した過程や結果を表現することに関わる言語活動を下線で示した。

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

駒澤大学文学部 浅井 俊二

1 日 時 平成23年7月1日（金） 4校時（12：35～13：25）

2 学習者（会場） 横浜市立港南台第一中学校 2年 4組（教室）

3 教科の視点から育成を目指す能力

（1）学習指導要領の指導事項から

- ・ 話の構成に注意し相手の反応を確かめながら話したり、自分の考えと結び付けて話を聞いたりする能力。

（新学習指導要領 「A 話すこと・聞くこと イ 話すこと／エ 聞くこと」 言語活動例 ア）

（2）評価規準

評価規準の作成のための参考資料（平成22年11月 国立教育政策研究所教育課程研究センター）

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
① 目的や場面に応じ、立場や考えの違いを踏まえて話したり、考えを比べながら聞いたり、相手の立場を尊重して話し合ったりしようとしている。	② 目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話している。 ③ 話の論理的な構成や展開などに注意して聞き、自分の考えと比較している。	④ 相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開の違いがあることを理解して話したり聞いたりしている。

4 単元・学習材名

「自然教室で学んだこと」をプレゼンテーションしよう

5 単元・学習材について

新学習指導要領中学校国語科における「A 話すこと・聞くこと」の言語活動例は、各学年とも「ア 報告や紹介、説明や発表、時間や場の条件に合わせてスピーチ」の系列と、「イ 対話、討論、意見を述べ合うこと」の系列が示されている。授業者（三藤）は、「ア」の系列の言語活動を扱う授業として、昨年度は「2年生に向けての決意」のスピーチを行った。今回の授業はこれを受けて、敬語の学習や「時間や場の条件に合わせた即興的なスピーチ」（3年）*1等の言語活動につながるものとして設定している。

「ア」の系列（報告、紹介、説明、発表、スピーチ等）の言語活動では、一人の「話し手」が「話すこと」の活動、他の学習者「聞くこと」の活動に取り組むことが同時並行的

に行われるので、指導事項・評価規準も「話すこと」「聞くこと」の両方を示す必要がある。

この単元では、学習指導要領に示された「資料や機器などを効果的に活用」する「資料」として、自然教室の事後学習として制作した「新聞」と、本校国語科や学級活動、総合的な学習の時間等で日常的に用いている「フリップ」を活用する言語活動を行う。話の要点を明らかにし聞き手に分かりやすくするためにこれらの「資料」を活用しながら説明することにより、話し手の意図が的確に伝わって聞き手の理解をより深めることを目指して、本単元を設定した。^{*2}

*1 この実践については、横浜市教育委員会『横浜版学習指導要領国語科編』（2009年3月 ぎょうせい）p.53を参照。

*2 「フリップを用いたプレゼンテーション」については、前掲書（*1）p.50を参照。

6 能力育成のプロセス（6時間扱い 本時は5時間目）

次	時	評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】	○ Aの状況を実現していると判断する際 のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて
I	1 ～ 4	④ 相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開の違いがあることを理解して話したり聞いたりしている。 【ワークシート（構成メモ）の記述の確認】 ～日常的な評価	○ 新聞の見出しとフリップの項目では、その目的の違いからそれぞれどのように表現したらよいかを考え、発表に生かしている。 ☆ 新聞やフリップの記述をそのまま棒読みにしたのでは聞き手にとって分かりにくいことに気付かせ、構想メモを作成させる。
II	5 本 時	② 目的や状況に応じて、作成した新聞やフリップを効果的に活用して話している。 【パフォーマンス（プレゼンテーション）の観察】 ～日常的な評価 ③ 話の論理的な構成や展開などに注意して聞き、自分の考えと比較している。 【ワークシート（聞き取りメモ）の記述の確認】 ～記録する評価	○ 新聞の見出しやイラストとフリップの関連を図り、視覚にも訴えながら話している。 ☆ 指示棒や手で新聞やフリップの当該の箇所を指し示しながら話すようにさせる。 ○ 同じ経験から異なる考えが引き出されることに気付き、その思考の過程や根拠について考えながら聞いている。 ☆ 聞き取った他者の考えと自分が作成した新聞やフリップの記述とを比較させ、異なる点を考えさせる。
III	6	① 目的や場面に応じ、経験や考えの違いを踏まえて話したり、考えを比べながら聞いたり、そのことについて話し合うことを通して、より分かりやすい伝え方について考えようとしている。 【ワークシート（振り返り）の記述の分析】 ～記録する評価	○ 振り返りの話し合いの中で、自他の考えの違いを踏まえながら、新聞やフリップの活用の仕方について他のメンバーにアドバイスをしようとしている。 ☆ 聞いていて分かりやすいと感じたプレゼンテーションについて、その理由を考えさせ、自分のプレゼンテーションをどのように改善したらよいかを考えさせる。

<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p style="text-align: center;"><u>国語科における言語活動（下線）※</u></p>	<p style="text-align: center;">留意事項</p>	<p style="text-align: center;">時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでのスピーチやプレゼンテーションの経験を振り返る。 ・ 校外学習（自然教室）についての3つの内容を発表するためのフリップの項目を考える。 ・ プレゼンテーションの構成を考え、フリップ・構想メモを作成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ フリップの内容は、「自然教室で制作した短歌」「自然教室を通して学んだこと」「今後に生かしたいこと」の3点とする。 ・ 自然教室の事後学習として制作した新聞をどのように活用するかを考えさせる。 	<p>1 ・ 2</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2人組でプレゼンテーションのリハーサルを行う。 ・ リハーサルを振り返って、自分のプレゼンテーションの内容や話し方、フリップや新聞の活用の仕方を修正する。 ・ フリップ・構想メモを清書する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新聞の見出しとフリップの項目での表現の違いに気付かせ、効果的な表現を考えるようにさせる。 	<p>3 ・ 4</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然教室の際のグループ（5～6人）毎に<u>プレゼンテーションを行う</u>。 ・ <u>聞き手はメモを取りながら聞き、必要に応じて質問をする</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新聞・フリップの活用の仕方にも着目させる。 ・ 話し手として、また聞き手として気づいたことをメモさせる。 	<p>5 本 時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ グループでプレゼンテーションの振り返りを行い、各自の新聞・フリップの活用の仕方や自他の考えの違いについて<u>話し合う</u>。 ・ 今回の学習を振り返り、資料を使ったプレゼンテーションや自他の考えの違いについて、気付いたことや考えたことを記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ プレゼンテーションのスキルと内容の両面に渡って意見交換を行うようにさせる。 	<p>6</p>

※ 国語科における学習活動は基本的にすべて言語活動であるので、ここでは「話すこと・読むこと」の授業において学習者が思考・判断したことと、思考・判断した過程や結果を表現することに関わる言語活動を下線で示した。

7 授業にあたり

新学習指導要領では、3年生の授業数が週1時間増加したが、言語能力を育成するための言語活動を行う時間が十分に保障されているとは言い難い状況には変わりがない。このような状況の中で、本校国語科では少ない授業時数の中で言語活動を行う時間を確保する工夫を行っている。

例えば昨年度（本校の第3回研究発表会）は、1年生の国語の学習のまとめとして、「2年生に向けての決意」のスピーチをする学習を行ったが、同時に、スピーチの内容として考えた「2年生に向けての決意」を漢字一字と数行の言葉で表現し、毛筆で書く学習を行った。この学習では「2年生に向けての決意」という同一のテーマで「話すこと・聞くこと」および「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（書写）」を扱うことになったが、そのことにより、生徒には教科国語で学習する内容のそれぞれが有機的な関連をもって「生きて働く言葉の力」になることが実感されている。

今回の授業では、本校の2年生において実施する旅行的行事である自然教室の事後学習として制作した新聞をプレゼンテーションのための資料として活用した。この新聞作りにあたっては、国語の授業で内容や形式について指導し、総合的な学習の時間の学習として完成させた。さらに、2年生で学ぶ「短歌」について、作歌とそれについての解説・鑑賞文を新聞の記事の一つとし、それを含めて自然教室に関わる3つのトピックをフリップに書いてプレゼンテーションを行うことにより、限られた時間を有効に使うとともに、学習者の負担を軽減し、効果的に能力の育成を図ることができるよう配慮した。

8 本校の研究主題「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラム・マネジメント—各教科等における言語活動の充実—」とのかかわり～新しい学習指導要領に向けて

音声言語による「話すこと・聞くこと」の言語活動は、日常の言語生活と深く関わるものであるが、それゆえに、学習者（生徒）にとって国語科の学習としての意識を持ちにくい面もあると思われる。自然教室という共通の体験・経験について新聞やフリップという資料を用いてプレゼンテーションを行うという言語活動に取り組むことによって、国語科における言語活動が日常の言語生活に生きるものとなるよう、「生きる力」としての言語能力の育成を図っていきたいと考えている。

国語科（書写）学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 宍倉 美佐・三藤 敏樹

1 日 時 平成23年 2月25日（金） 4校時（12：45～13：35）

2 学習者（会場） 横浜市立港南台第一中学校 1年 3組（国社教室）

3 教科の視点から育成を目指す能力

（1）学習指導要領の指導事項から

- ・ 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して書く能力。
（新学習指導要領 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」（2）-ア・イ）

（2）評価規準

国語への関心・意欲・態度	言語についての知識・理解・技能
① これまでに学習した書写の知識や技能を、場面に応じて適切に活用しようとしている。	② これまでに学習した書写の知識や技能を用いて、場面や目的にふさわしい活用の仕方を意識して書き表している。

4 単元・学習材名 「2年生に向けての決意」を作品にして伝え合おう

5 単元・学習材について

本単元は、第1学年における書写の学習の成果を応用する単元であり、学習のまとめとしての性格を有するものである。これまでに習得した知識・技能を、場面に応じて適切に活用するとともに、日常生活において書写の学習を生かそうとする意欲・態度の育成をねらいとしている。

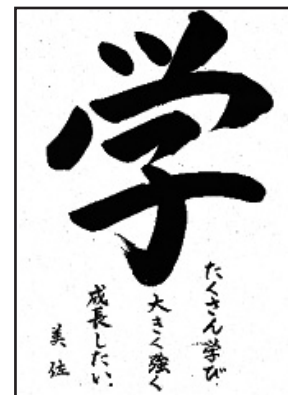
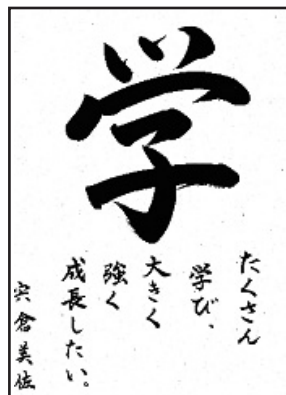
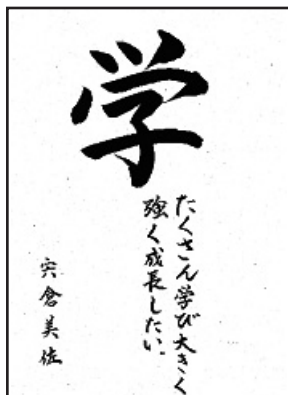
さらに、本単元は3校時に公開した同じ学習者（クラス）による「話すこと・聞くこと」の授業との関連を図っている。この授業では、スピーチの内容（2年生に向けての決意）を漢字一字とそれを説明する文章を毛筆で書く活動を行う。書写について、新学習指導要領の「解説」では、「国語科をはじめとする各教科等の学習や生活での活用場面を見通した学習活動の工夫や、適切な教材の開発なども必要である」*1と指摘している。4校時の授業では、「話すこと・聞くこと」の学習としてのスピーチの内容を焦点化した言葉を毛筆で表現した作品を制作する活動を通して、これまでに習得してきた知識や技能がどのような書字場面で活用されるのかについて、学習者が確認しながら進められるように配慮し、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」における、書写の学習の1年生のまとめとしての「生活に生かす書写」に取り組みさせたい。

本校では、書写の作品をその振り返りとともに画用紙の表紙に貼付したポートフォリオとしての「作品集」を作成させている。書写の作品をポートフォリオ化することにより、今回のようなまとめの学習の際にも、既習事項を活用することができる。

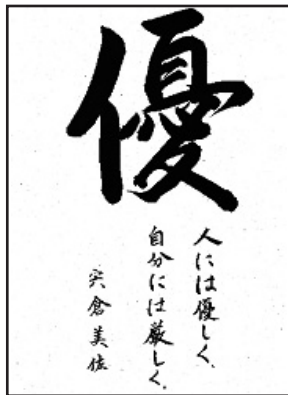
*1 『中学校学習指導要領解説 国語編』（平成20年9月 文部科学書）p.44

6 能力育成のプロセス（4時間扱い 本時は3時間目）

次	時	評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】	☆ Cの生徒への手だて
I	1		
II	2	② これまでに学習した書写の知識や技能(楷書と行書、字形や文字の大きさや配列等)を用いて、「話すこと・聞くこと」の学習で取り組んだスピーチの内容(2年生に向けての決意と具体的な取り組み)を表現する漢字一字と、それについての簡潔な説明を書く作品にふさわしい書き方を考えて書いている。 【パフォーマンス(書字)の観察】 ～日常的な評価 【パフォーマンス(作品)の分析】 ～記録する評価	☆ スピーチの内容を表現するためには、楷書を用いるのがよいか行書を用いるのがよいかを考えさせる。 ☆ スピーチの内容を表現する漢字一字と説明の文のバランスを考えながら何通りかの下書きをさせて、どれが良いと思うか、その理由は何かについて考えさせる。
	3 本時		
III	4	① これまでに学習した書写の知識や技能を、場面に応じて適切に活用しようとしている。 【振り返りの記述の分析】 ～記録する評価	☆ 自他の作品を比較して、今後毛筆で書く場合にはどのような点に注意したらよいかを考えさせる。



主な学習活動 国語科（書写）における言語活動（下線）	留意事項	時
<ul style="list-style-type: none"> 「話すこと・聞くこと」の学習で取り組んだスピーチの内容（2年生に向けての決意と具体的な取り組み）を表現する漢字一字と、それを説明する簡潔な（20～25字程度）の文を考える。 		1
<ul style="list-style-type: none"> 紙面全体に対してそれぞれの文字の大きさや書くべき位置を考えて調和的に割り当てたり、文字と文字との間の空け方や行の中心の取り方に注意したり、行と行の間の空け方に注意したりしながら鉛筆を用いて下書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 毛筆で書いた作品をイメージしながら下書きをさせる。 	2
<ul style="list-style-type: none"> 下書きについて、楷書・行書のどちらで書くか、字形・文字の大きさ・配列などは適切かなどについて検討し助言し合う。 検討した内容を踏まえて、「話すこと・聞くこと」の学習で取り組んだスピーチの内容（2年生に向けての決意と具体的な取り組み）を表現する漢字一字と、それについての簡潔な説明の文章を毛筆で清書する。 	<ul style="list-style-type: none"> これまでに学習した「一中」「大地」「自分の氏名（小筆）」「新風」「すみれ草」（以上は楷書）、「行書の筆遣い」「空想」「自分の氏名（小筆）」、「白夜」「流星」（以上は行書）における「今日の課題」（書字のポイント）を振り返らせる。 教科書の「楷書・行書一覧表」や『くずし字辞典』などを参考にさせる。 	3 本時
<ul style="list-style-type: none"> 完成した作品についてグループで評価し合う。 学習の振り返りを記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> 紙面全体に対するそれぞれの文字の大きさや書くべき位置の割り当て、文字と文字との間の空け方や行の中心の取り方、行と行の間の空け方などに着目して、お互いの作品を評価させる。 「今回の学習で学んだことを今後の書写の学習や日常生活にどのように生かすか」という視点で振り返りを記述するようにさせる。 	4



7 授業にあたり

「書写」の学習については、学習者の側、指導者の側のそれぞれに課題がある。

学習者の側の課題としては、携帯電話やパーソナルコンピュータの普及等に伴い、自分自身が筆記具を使用して肉筆で文字を書く機会が減少していること、そのため、文字を書く速度が遅くなっていることがまず挙げられる。また、そのために文字を書くことを面倒に感じ、正しい字を書こうとする意識が低下していると思われる。それは、例えば「絵文字」「ギャル字」「クセ字」という形で現れている。

一方、指導者の側には、まず、書写の指導時間を確保する等カリキュラム編成上の課題がある。そのうえ、国語科の教員免許状を取得していても必ずしも書字が得意であるとは限らず、毛筆書写に対する抵抗感を持つ指導者も多い。また、「書写指導」ではなく「書道教育」としての作品主義に陥りがちなことも課題である。

これらの課題を受けて、これからの書写指導の方向性として、本校国語科では次のように考えている。

一つは、硬筆で文字を「正しく整えて速く」書くための書写指導をすることである。日常生活の中では、肉筆で文字を書く機会が多くある。その際に求められるのが、硬筆で文字を「正しく整えて速く」書く能力である。

そして、硬筆の書字能力を向上させるためには、点画、筆脈をきちんと書くことによって、字形が整うことを理解させたい。そのための土台となるのが毛筆書写である。硬筆の書字能力の向上を目指すための毛筆指導という視点で指導にあたる必要がある。

松本仁志は、「中学校国語科における書写指導はあくまで国語の授業であり、『書道』教育や作品主義に陥ってはならない。したがって、書字があまり得意でない先生でもさまざまな工夫を行いながら授業を進める必要がある」*2と指摘している。授業者の一人（三藤）のように書字が得意でない国語の教師にとって書写の授業は、生徒と共に学ぶことのできる絶好の機会であるとも言える。今後も指導方法を工夫しながら、文字を大切に授業を進めて行きたい。

8 本校の研究主題「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラム・マネジメント—各教科等における言語活動の充実—」とのかかわり～新しい学習指導要領に向けて

新学習指導要領では、書写の指導について、「文字文化に親しみ、社会生活や学習活動に役立つよう内容や指導の在り方の改善を図るとともに、身の回りの文字に関心を持ち文字を効果的に書くように指導すること」*3を求めている。今年度本校では、第1学年において週に1回のチームティーチング（TT）を実施し、その時間に書写の学習を行っている。特に毛筆で書字する場合は、滝澤・宍倉・土屋がそれぞれの課題における書字のポイントを4～5点の「今日の課題」として説明し、三藤が水書板を用いて実際に書字を行ったうえで、学習者がそれを意識しながら実際に書く形で授業を行っている。また、評価についても、学習者が書字したものを芸術作品として評価するのではなく、あくまで「今日の課題」を実現できたかどうかによって評価する。このことにより、作品中心の「書道教育」ではなく、あくまで学習指導要領の指導事項に基づく「書写指導」の実現を図って

いる。そして、TTを行うことにより、生徒に学習に対する集中力を高める支援を行うことができたり、複数の教師が評価に関わることで、より客観性・信頼性の高い評価を行うことができたり、という効果がある。国語科の教師が他の国語科の教師の授業に「T2」として参加することは、必然的に教師どうし授業を見合うことになり、本校国語科教師の書写指導の力量の向上にとって大きな役割を果たしている。また、生徒にとっても、TTが日常化しているのも、授業に複数の指導者がいることについての違和感や抵抗感が払拭されている。このことは、本校の教職員が「チーム」で教育活動にあたっていることを常に生徒が実感することのできる機会として重要であると考えている。

今年度の第1学年の書写の授業では、ひらがな（硬筆）、カタカナ（硬筆）、楷書（硬筆）、楷書とそれに調和する仮名（硬筆）、楷書（毛筆）、楷書と調和する仮名（毛筆）、楷書と行書（硬筆）、行書（毛筆）の順で学習してきた。中学校入学後まず小学校1年生の教科書を用いて、ひらがな・カタカナを、その元になった漢字を意識しながら硬筆で書く学習を行った後、楷書ならびに楷書とそれに調和する仮名について硬筆→毛筆の順で練習した。その後いったん硬筆に戻って楷書と行書の違いを確認したのち、毛筆で行書を練習した。今回の授業はそれらの学習のまとめとして、日常生活に役立ち、文字文化に親しむ態度を育成することを目指したものである。



* 2 本校で平成18年度に開催した研究発表会（平成19年2月16日）における助言より。同研究発表会の詳細については、次を参照。

神奈川県横浜市立港南台第一中学校国語科「『書ける』先生も『書けない』先生も書写の授業に取り組もう」（『三省堂国語教育／ことばの学び』Vol.14（2007年10月 三省堂）p.10-11

* 3 『中学校学習指導要領解説／国語』（平成20年9月／文部科学省）p.8

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 土屋 京子・滝澤 なぎさ

- 1 日 時 平成22年 9月17日（金） 5校時（14：00～14：50）
- 2 学習者（会場） 横浜市立港南台第一中学校 3年 3組（3年3・4組教室）

3 教科の視点から育成を目指す能力

（1）学習指導要領の指導事項から

- 文章を読んで人間や社会について考え、自分の意見を持つ能力。
（新学習指導要領 「読むこと」 第3学年 エ 自分の考えの形成）

（2）評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
① 小説を読み、さまざまな状況における登場人物の心情について考えることを通して、自分のものの見方や考え方を広げようとしている。	② 登場人物の描写に注意して小説を読んで、登場人物の人間像をとらえている。 ③ 登場人物のものの見方や考え方から会話を構成することを通して、自分の考えをまとめている。	④ 立場や世代の違いによる言葉の違いを理解したり、敬語を適切に使ったりしている。

- 4 単元・学習材名 「人物の心情を考えるために演じてみよう」
「卒業ホームラン」（東京書籍『新しい国語』3 pp.80-86）

5 単元・学習材について

本学習材は、生活の中で読書に親しみ、自主的に読書生活を充実させようとするねらいをもって年間指導計画に位置づけた作品である。中学校3年生の学習者にとっては、今までの経験を思い出しながら登場人物に感情移入することができ、親しみやすい文学的文章といえる。

これまでの文学的文章の学習では、文章表現から詳細に心情を把握したり、心情変化をとらえたりすることに重点を置いて取り組んできたが、今回は学習者自身が興味のある登場人物を選び、その人物の性格、心情、ものの見方・考え方を読み取ったうえで、創作の会話もつけ加えながらその場の状況や一人ひとりの登場人物の心情を劇によって表現する言語活動を考えた。

この学年では、2年次に「走れメロス」を劇化するための脚本作りと、実際に劇を演じる言語活動を行った。そのことによって、単に受け身の姿勢で作品を読むだけでなく、自ら演じることを通して、登場人物の人間関係や心情に迫る読みができたと考えている。

そこで今回も、「卒業ホームラン」という親しみやすい作品の中で、学習者がとらえたさまざまな状況における登場人物一人ひとりの心情を、会話や動作で表現することを通して作品全体を味わうことにより、自分の考えを確かなものとして、次の読書につなげていくような機会としたい。

6 能力育成のプロセス（6時間扱い 本時は5時間目）

次	時	評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】	○ Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて
I	1		
	2	② 登場人物の描写に注意して小説を読んで、登場人物の人間像をとらえている。 【各自の行動の観察】～日常的な評価	○ その人物の行動や会話から、そのような行動や会話をする人物がどのような人物であるかを、自分の言葉で表現している。 ☆ 登場人物の立場や性格を直接的に表現している部分を探し、線を引かせる。
II	3	③ 登場人物のものの見方や考え方から会話を構成することを通して、自分の考えをまとめている。 【話し合いの行動の観察】～日常的な評価	○ 演じる役の人物について、その人物の心情を表す動作や会話内容について、その場面の前後のストーリーの展開や、登場人物どうしの人間関係を踏まえて自分の考えをまとめ、構成することができる。 ☆ 演じる役とかかわりのある人物を演じる学習者からのアドバイスを参考に考えさせる。
	4		
	5 本時	④ 立場や世代の違いによる言葉の違いを理解したり、敬語を適切に使ったりしている。 【発表のパフォーマンスの確認】～記録する評価	○ その場面の前後のストーリーの展開や、登場人物どうしの人間関係を踏まえて、その人物独特の言葉遣いや言い回しを台詞として表現している。 ☆ 自分の体験、他の作品、ドラマなどの場面を想起させ、その場面にふさわしい言葉遣いを考えさせる。
III	6	① 小説を読み、さまざまな状況における登場人物の心情について考えることを通して、自分のものの見方や考え方を広げようとしている。 【振り返りの記述の確認】～記録する評価	○ 自分の表現と他者の表現を比較しながら、それぞれの表現方法のもつ効果や、それぞれの表現の違いから生まれる人物像の違いについてとらえ、そのことを通して、読み取った作品世界についての自分の考えや今後の読書に生かしたい内容を、事例や根拠を挙げて具体的に記述している。 ☆ 演じるにあたって自分が何を考えたか、また、同じ役や場面を演じた他の人と比較し、それがどのように違っていたかを振り返って、その内容を記述するようにさせる。

<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p style="text-align: center;">国語科における言語活動（下線）</p>	<p style="text-align: center;">留意事項</p>	<p style="text-align: center;">時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「卒業ホームラン」を通読し、あらすじや登場人物を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物の心の動きが分かる表現に注意して読むようにさせる。 	1
<ul style="list-style-type: none"> ・ 再度「卒業ホームラン」を読み、場面の状況や人物の心情がわかる表現を確認する。 ・ とらえた状況や心情を交流しながら、登場人物の人物像を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文中の場面の状況や人物の心情が分かる部分に線を引いたり、余白にメモをするようにさせる。 ・ 4人程度のグループで、各自が読み取った人物像についての考えを交流させる。 	2
<ul style="list-style-type: none"> ・ 劇を発表するグループを作って誰が誰を演じるかの役割分担を決め、それぞれの役について話し合う。 ・ それぞれが演じる役ごとに集まり、その人物像を確認する話し合いを行う。 ・ 劇を発表するグループに戻り、台詞や動作などの役作りのための話し合いを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 劇を発表するグループは1～4人とする。グループの人数に応じて表現する分量を割り当てる。 ・ 自分が読み取ったり、前時の話し合いで確認した人物像を交流し合い、さらに深めるようにさせる。 ・ 場面の状況に応じた発言や態度等、役作りに必要な事柄についても意見を交換させるようにする。 ・ これまで深めてきた人物像の読みを、劇を発表するグループの中で交流させ、実際に演じるエピソードを台詞や演技を伴って構成するようにさせる。 	3
<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ毎に劇のリハーサルを行い、相互に助言し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表に先立って、役ごとに自分が演じる視点を発表させ、聴衆となった学習者はそれを踏まえて演じた表現について具体的に助言したり評価したりするようにさせる。 	4
<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ毎に劇の発表を行い、相互に評価し合う。 		5
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の振り返りを記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で演じてみて分かったことや他者が演じた発表を見て気付いたことを具体的に記述することを通して、作品に対する自分のものの見方や考え方がどう変化したかを明らかにするようにさせる。 	6

7 授業にあたり

登場人物の心情をとらえることを通して、自分のものの見方や考え方を深めさせるために、学習者一人ひとりの読みを「劇」として表現させる際には、次のようなことを配慮して指導する。

- ・ 登場人物の人間像をとらえるために、状況を表した文章や会話に注目させる。
- ・ 小説の登場人物という他者の視点から、文章の中から根拠を見つけ、その人物のものの見方・考え方をとらえ、会話や動作によって表現させる。
- ・ 「劇」を作る過程で学習者同士が意見交換を行い、交流の中で自ら気づくことを重点にした学習をさせる。

このような学習の中で、学習者が、場面の状況や登場人物の心情をとらえるために文章の中から情報を集めていく過程で、表現の仕方や文章の特徴に注目することによって、より豊かな想像力でその人物の人間像をとらえることができる。

しかし、文章から登場人物の人間像や心情を十分にとらえることが難しい学習者には、それぞれの人物の会話に注目させ、その立場の視点から詳細な心情把握をさせるようにしたい。

このような言語活動を通して複数の登場人物の心情を把握し、とらえ、表現することによって読み取りがさらに深まると考える。しかし、学習者の一人ひとりの学びの履歴によって、読み取りの深まりが違うので、TTという指導形態を活用し、丁寧に助言を与えながら学習を進めたい。

8 本校の研究主題「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラム・マネジメントー各教科等における言語活動の充実ー」 とのかかわり～新しい学習指導要領に向けて

新学習指導要領の下での学習評価の観点については、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」として整理された。国語科における「思考・判断・表現」の能力は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域を通して指導し評価するものとされている。

文学的文章を読むことを通して学習者が思考したり判断したりした内容は、言語活動を通して表現することによって初めて他者に伝え、また、自分自身も自覚することができる。通常、そのような言語活動は「読書感想文」や「書評」等の「書く」活動によって行われることが多いと考えられるが、今回は「劇」を演じる、すなわち「話す・聞く」活動で行うことで、より日常生活における言語活動で求められ、またそれに生かすことのできる能力を伸ばすことを考えた。さらに、「劇」を演じる際には、会話だけでなく、表情、視線、発声、動作等の非言語伝達の能力も求められる。言語と非言語の双方を活用して、各自の思考・判断を表現することは、主体的な「読み」の力を育成するとともに、「生きる力」としてのコミュニケーション能力の育成にもつながると考えている。この学年の国語科の授業では、「読むこと」の学習において、作品を素材として台詞を考えたり、劇化したり、

人物の心情や場面の情景を問う問題を作ったりする活動を行い、作品の文章を丁寧に読み解いていくことを継続して行ってきた。そのような学習によって培われる能力は、社会生活におけるコミュニケーションや、思考・判断・表現を求められる場面において必要不可欠なものであり、義務教育修了を控えた中学校3年生にとって、意味のある学習であると考えている。

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹
横浜市立港南台第三小学校 赤羽 恵子

1 日 時 平成22年 9月17日 (金) 4校時 (12:35~13:25)

2 学習者 (会場) 横浜市立港南台第一中学校 1年 5組 (教室)

3 教科の視点から育成を目指す能力

(1) 学習指導要領の指導事項から

- ・ 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりする能力。

(新学習指導要領 第1学年 B 書くこと オ 交流)

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
① 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめようとしたり、交流を通して考えを深めようとしたりしている。	② 書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。 ③ 意見や助言の交換から学んだことを、自分の表現の参考にしたりしている。	④ 事象や行為などを表す多様な語句について、自分が文章で表現するときどのように活用すればよいかを考えながら書いている。

4 単元・学習材名 「中学校生活を報告する文章を書いて交流しよう」

5 単元・学習材について

「書くこと」の指導事項オ「交流」については、小学校第1学年及び第2学年では「書いたものを読み合い、良いところを見つけて感想を伝え合うこと」、第3学年及び第4学年では「書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと」、第5学年及び第6学年では「書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと」について学習してきている。ここでは、第5学年及び第6学年の指導事項を受けて、書いた文章を交流し合う指導事項を扱っている。

いわゆる「作文」に対しては苦手意識を持つ生徒が多いが、現実の生活の中では「メール」「ブログ」など書き言葉によって自分の考えを発信する活動が多く行われており、「書くこと」の言語活動そのものに対して拒否反応を示す生徒は少ない。生徒の「作文が苦手だ」という発言の背景には、与えられたテーマについて生徒自身が「書くことがない」と

いう意識があると考えられる。書くべき内容がはっきりして、書くためのメディアが用意されてさえいれば、多くの生徒は生き生きと書く活動に取り組むものである。

いわゆる「中1ギャップ」を克服するための小中一貫カリキュラムの教科国語における取り組みとして、この時期の中学校1年生が小学校時代と現在の自分を見つめながら小学校の先生を対象とした報告文を書くという言語活動は、書くべき内容が明らかであり、また生徒には小学校の先生に現在の自分について伝えたいというモチベーションもあるので、取り組みにあたり抵抗感が少ないものである。

さらに、中学校に入学して半年間共に学び生活してきた仲間との交流を通して学習することにより、実生活においてまさに言語を活用しながら互いの能力を伸ばす場面とすることができる学習材である。

国語科の目標や指導事項の定着を図るには、9年間を見通した学習指導を実現し、日々の授業、単元・主題等、学年、小中学校間の指導内容の連続性のみならず、学習評価にもつながりをもたせて学習指導を支えることが必要である。この授業は中学校第1学年における「書くこと」の学習であり、学習指導要領に示された指導事項（つけたい力）の9年間の系統性を意識して授業を組み立てる必要がある。そして、この授業では小学校時代の自分と現在の自分を見つめながら報告文を書くという言語活動であり、内容そのものが小学校から中学校へのつながりの中で構成されている。

この授業ではこれらのことを考慮し、生徒の小学校における「書くこと」の学習を踏まえた言語活動と評価規準を設定した。

6 能力育成のプロセス（6時間扱い 本時は4時間目）

次	時	評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】	○ Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて
I	1		
II	2 ～ 3	④ 事象や行為などを表す多様な語句について、自分が文章で表現するときどのように活用すればよいかを考えながら書いている。 【報告文の記述の確認】～日常的な評価	○ 文章の中の自分の考えや気持ちの根拠が明確に書かれているかどうかを吟味し、それを表現するのによりふさわしい語句を選んで書いている。 ☆ 国語辞典を活用して、自分が表現したい内容について他の言葉で言い換えるとどうなるか、どの言葉を用いたらより効果的かを考えさせる。
	4 本時	② 書いた文章について、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。 【話し合いの行動の確認】～日常的な評価	○ 交流の際に、読み手(相手)である小学校の先生に対する意識を持ち、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」に即して書いた文章を読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。(A○) ○ 交流の際に、書き手と読み手の両方の視点から題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて自分の考えをまとめ、意見や助言を伝えている。(A) ☆ 他者から自分に対しての意見や助言をメモさせ、自分が他者に対してどのように考えを述べたらよいかの参考にさせる。(C○) ☆ 自分が書いた作文について、「何について報告しているか」「どんな材料を用いているか」「根拠となる事実(体験)は何か」についてもう一度考えさせる。(C)
III	5	③ 意見や助言の交換から学んだことを、自分の表現の参考にして書いている。 【推敲した報告文の記述の確認】～記録する評価	○ 交流における指摘を読み手からの意識であるにとらえ、読み手の立場に立って自分の表現を練り直して書いている。 ☆ 他者の作文を読んで良いと思った点や、他者からの助言をメモさせ、自分が書いた作文にどのように生かしたらよいかを考えさせる。
	6	① 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめようとしたり、交流を通して考えを深めようとしたりしている。 【振り返りの記述の分析】～記録する評価	○ 学習を振り返ることを通して、書く場面だけでなく話したり聞いたりする場面や読む場面において自分の考えを深めるにはどうしたらよいかを考えようとしている。 ☆ 報告する文章を書くにあたって、どのような点が難しいと感じたかを振り返らせながら、次に書く時はどうしたらよいかを考えさせる。

<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p style="text-align: center;">国語科における言語活動（下線）</p>	<p style="text-align: center;">留意事項</p>	<p style="text-align: center;">時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校入学時に、中学生になっての思いや決意についての<u>自分の考えをまとめて書く。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ この言語活動は中学校入学後すぐ、国語の授業についてのガイダンスが終わった段階で行っておく。 ・ 形式にはあまりこだわらず、自分の考え（思いや決意）を自由に記述するよう助言する。 	<p style="text-align: center;">1</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校に入学して半年が経過した時点で、小学校の先生に現在の中学校生活について、入学時の自分と比較しながら<u>報告する文章を書く。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 報告する対象が小学校の先生であることを念頭に置いて、書く材料を集めさせるようにする。 ・ 相手を意識して、伝えるべき事柄の内容や順序などを考えさせる。 	<p style="text-align: center;">2 ～ 3</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 3～4人のグループで書いた作文を読み合い、<u>意見や助言を交換し合う。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文章を書く過程で学んだことをもとに、次のようなことを重点に交流するようにさせる。 ・ 題材をどのようにしてとらえたか。 ・ 材料をどのようにして収集、整理したか。 ・ 根拠に当たる部分をどのように明確に書いたか。 ・ 他者からの意見や助言をメモさせる。 ・ 学習者が小学校6年生であった当時の担任とティーム・ティーチングで授業を行い、小学生の視点と中学生の視点の違いを意識させたり、「報告する相手」としての小学校の先生としての立場を学習者に伝えたりする支援を行う。 	<p style="text-align: center;">4 本 時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 交流した時に得た他者の意見や助言を生かして、<u>書いた文章を推敲し、清書する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手に正確に事実を伝えるという視点で、しっかり記述されているかどうかを確かめながら推敲させる。 ・ 報告するという目的に対して、足りない内容はないか。 ・ 相手や内容に合った適切な語句を選んで使っているか。 ・ 文字の表記や、漢字と仮名の使い分けは適切か。 ・ 文や段落の長さおよび文や段落の接続の関係などは適切か。 	<p style="text-align: center;">5</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の振り返りを記述し、報告する文章を書く時に自分の考えをどのようにまとめたらいいかや、記述する際に注意することについて、自分の考えを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「次に報告文を書くときにはどのような点に注意したらよいか、今回の経験をもとに考える」という視点で学習の振り返りを記述するようにさせる。 	<p style="text-align: center;">6</p>

7 授業にあたり

この授業は、今年度の横浜市教育課程研究委員会国語科専門部会研究協議会（平成22年8月17日・横浜市鶴見公会堂）において提案したものである。その主な内容は次のとおりである。

○ 生きて働く言語能力を育てるために、多様な内容や形態の言語活動を数多く行う。

国語科の授業は、言語活動を通して言語能力を身に付けていく営みである。「付けたい力」としての指導事項について、その力を身に付けるための「実践の場」としての言語活動を意図的・計画的に設定することにより、生徒一人ひとりの言語能力をより確かなものにするができる。この授業では、中学校生活を報告する文章を「書くこと」を行い、書いた文章を交流する、すなわち「読むこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動をはさんで再び「書くこと」に取り組むことを通して、書く能力をより確かなものにしていくことをねらいとしている。

○ 適切に伝え合うために、「言語意識」を明確にした言語活動を行う。

国語科の授業において育成する言語能力は、「社会生活に生きて働くよう、一人ひとりの生徒が言語の主體的な使い手として、相手、目的や意図、多様な場面や状況などに応じて適切に表現したり正確に理解したりする力」*1である。そのような力を「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語活動を通して育成する際は、「相手」「目的や意図」「多様な場面や状況」等について明確な意識を持たせて言語活動に取り組む必要がある。具体的には、「目的意識」（何のために、どのようなねらいをもって言語活動を行うのか）、「相手意識」（誰に対する言語活動なのか）、「場面意識」（どのような場面における言語活動なのか）、「方法意識」（どのような方法、手段、条件で言語活動を行うのか）、「評価意識」（言語活動の過程及び結果はどうであったか）等を明確にした上で言語活動を行わなければならない。*2

この授業では、「小学校の先生」という「相手」に対して、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」を持ち、「国語科の授業」という場面において、「報告する文章を書く」という「方法」で言語活動を行い、書いた文章を交流するという「評価」の場面を設定している。それぞれの言語活動の中で、常に言語意識を明確に持たせて取り組ませるようにしたい。

○ 言語活動を「小中一貫カリキュラム」に位置付ける。

横浜市が推進する「小中一貫カリキュラム」は、義務教育9年間の連続性や適時性を図

* 1 中学校学習指導要領解説 国語編 p.9

* 2 河野庸介『中学校新国語科授業の基本用語辞典』（2006年 明治図書）

* 3 中学校学習指導要領解説 国語編 pp.110-111

りながら、一人ひとりの子どもの学習状況に柔軟に対応するカリキュラムである。国語科の目標や指導事項の定着を図るには、9年間を見通した学習指導を実現し、日々の授業、単元・主題等、学年、小中学校間の指導内容の連続性のみならず、学習評価にもつながりをもたせて学習指導を支えることが必要である。

「中学校学習指導要領解説 国語科編」において、「B 書くこと」における「交流」の指導事項は、次のとおり示されている。^{*3}

小学校第1学年及び第2学年	書いたものを読み合い、良いところを見つけて感想を伝え合うこと。
小学校第3学年及び第4学年	書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。
小学校第5学年及び第6学年	書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。
中学校第1学年	書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。
中学校第2学年	書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げること。
中学校第3学年	書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、もの見方や考え方を深めること。

今回の授業にあたっては、小学生時代の自分の視点と中学生になって半年が経過した現在の自分の視点とを、自分自身が書いた文章を材料に振り返り、現在の自分について小学校の先生に報告する文章を書き、交流によってそれを練り上げていく言語活動を設定した。それに際して多様な視点からの助言ができるよう、学区内の小学校の先生（学習者が6年生当時の担任）とのTTを試みた。

なお、この授業は、今年度横浜で開催される第39回全日本・第53回全関東地区中学校国語教育研究協議会神奈川大会の第3分科会「書くこと」における研究授業として提案する。その際の研究協議は、本校が提案する「ラウンドテーブル型パネルディスカッション」の形式で実施する予定である。

8 本校の研究主題「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラム・マネジメントー各教科等における言語活動の充実ー」 とのかかわり～新しい学習指導要領に向けて

授業における言語活動は「パフォーマンス課題」であり、思考力・判断力・表現力等を評価する際に「パフォーマンス評価」を取り入れることにより、「指導と評価の一体化」を図る授業改善とより信頼性・妥当性のある評価が可能になる。

「パフォーマンス課題」とは、「リアルな文脈（あるいはシミュレーションの文脈）において、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような課題」であり、ここでは「論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）」が評価される。通常

の筆記テストは幅広い知識を覚えているかを評価するには適しているが、学びの文脈の中で知識やスキルを使いこなす能力を評価しようとする際は、パフォーマンスの評価が必要となる。指導と評価の一体化を図る授業において、パフォーマンス課題は、教育目標の中核部分、つまり、色々な文脈に転移して用いられるような重要部分に対応させて使う必要がある。つけたい力をうまく引き出し、伸ばすような条件を設定する必要がある。^{*4}

このことについて、平成22年3月24日の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の報告「児童生徒の学習評価の在り方について」では、「評価規準や評価方法については、近年諸外国においても様々な研究や取り組み」が行われていることを指摘し、そのような取り組みの一つとしての「パフォーマンス評価」について、「思考力・判断力・表現力等を評価するにあたって、「パフォーマンス評価」に取り組んでいる例も見られる。パフォーマンス評価とは、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等により評価をするという複雑なものまでを意味している。または、それら筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。」と説明している。^{*5}

この授業においては、単元の目標を実現するため、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の言語活動による「パフォーマンス課題」を設定し、実際の活動の中での生徒の表れを明らかにした評価規準を設定することにより、思考力・判断力・表現力等を育成する指導と評価の一体化を図っている。

また、同報告は、「授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である。一方で、指導後の児童生徒の状況を記録するための評価を行う際には、単元等ある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において「おおむね満足できる」状況等にあるかどうかを評価することが求められる」と指摘し、授業における「指導と評価の一体化」としての評価と「児童生徒の状況を記録するための評価」のそれぞれについて適切な時期に評価を行うことを求めている。今回の学習指導案では、前者を「日常的な評価」、後者を「記録する評価」として評価規準とともに示すことを試みた。

パフォーマンス評価を行うにあたっては、次のような「ルーブリック」（rubric：評価の指標）を活用することが有効である。^{*6}

A○	交流の際に、読み手（相手）である小学校の先生に対する意識を持ち、「中学生としての現在の自分について報告する」という「目的」に即して書いた文章を読み合い、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。
A	交流の際に、書き手と読み手の両方の視点から 題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の考えをまとめ、意見や助言を伝えている。
B 評価規準	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて意見や助言を交換している。
CO	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の意見を持つことはできるが、話し合いの中で意見や助言として発言することが難しい。
C	書いた文章について、題材のとらえ方や材料の用い方、根拠の明確さなどについて自分の意見をまとめることが難しい。

ここでは、評価規準に示した「おおむね満足できる状況」を実現していると判断される生徒のありようを「B」とし、「十分満足できる状況」を「A」、「十分満足できる状況のうち、特に高い程度のもの」を「A○」、「努力を要すると判断される状況」を「CO」、「努力

を要すると判断される状況のうち、一層の努力を要するもの」を「C」として5段階で示した。ただし、「AO」「A」で表される状況は必ずしも段階的に示されるものではなく、「十分満足できる状況」は多様な表れをする場合があることに留意しておきたい。また、「CO」「C」で表される「努力を要する状況」については、「B」で表される「おおむね満足できる状況」を実現するために必要な手だては生徒の段階に応じて示す必要がある。そこで、この授業の第4時（本時）においては、上記のルーブリックに基づき、「Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例」ならびに「Cの生徒への手だて」を複数示してある。

ルーブリックは、実際の生徒の状況（たとえば生徒が記述したパフォーマンス課題としての「報告文」）に基づいて再検討し修正する必要がある。その際は、あくまで指導事項に基づく評価規準を根拠として、生徒のパフォーマンスを上記のルーブリックにあるような記述語として表現する。

このようなルーブリックを作成・活用することにより、「Cの生徒への手だて」に示す手だてをより具体的なものにすることができ、また、「報告文」のような成果物を質的に評価する際にも信頼性・妥当性を確保することが可能となる。

ただし、ルーブリックを作成することに多大な時間や労力をかけ過ぎてしまい、実際の生徒のパフォーマンスに対する評価に十分な時間や労力が割けなくなってしまうのは本末転倒である。あくまでルーブリックは、評価規準に基づいて生徒のパフォーマンスを質的に評価するためのツールとして活用するものであり、生徒自身の学びの姿から作成するものであることを強調しておきたい。

* 4 「パフォーマンス課題」については、西岡加名恵・田中耕治 編著『「活用する力」を育てる授業と評価中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案』（2009年 学事出版）pp 8-10を参照。

* 5 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm

* 6 「ルーブリック」については、前掲書（* 4）pp.14-16を参照。

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

1 日 時 平成22年6月18日（金） 5校時（13：35～14：25）

2 学習者（会場） 横浜市立港南台第一中学校 1年3組（教室）

3 教科の視点から育成を目指す能力

(1) 学習指導要領の指導事項から

- ・ 古典には様々な種類の作品があることを知るとともに、文語のきまりを知り、古文を音読して、古典特有のリズムを味わう能力

（新学習指導要領 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」第1学年 アー（ア）（イ））

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	言語についての知識・理解・技能
① 幼少時から親しんできた「かぐや姫」と「竹取物語」を比較しながら読むことを通して、古典の世界についての新たな興味を喚起し、幅広い読書につなげようとしている。	② 歴史的仮名遣いなど現代の口語と異なる古文特有のきまりを知り、古文を音読して、古典特有のリズムを味わっている。 ③ 古典には様々な種類の作品があることを知り、「作り物語」とはどういうものか理解している。

- 4 単元・学習材名 「竹取物語」（東京書籍『新しい国語』1 pp.80-86）
角川書店 編『ビギナーズ・クラシックス 竹取物語(全)』角川ソフィア文庫 2001年^{*1}
平田昭吾 企画・校正・文／高橋信也 画『かぐやひめ』ポプラ社 1987年^{*2}
星 新一 訳『竹取物語』角川文庫 1987年^{*3}
江國香織 文／立原位貫 画『竹取物語』新潮社 2008年^{*4}
市川 崑 監督 映画『竹取物語』東宝映画・フジテレビ 制作 1987年

5 単元・学習材について

いうまでもなく「竹取物語」は「かぐやひめ」の物語として中学生にとってもおなじみの作品である。しかし、かぐや姫に求婚し難題をつきつけられた五人の貴公子がいずれも破滅的な結末をたどること、物語中のエピソードがいくつかの語の語源説の形式を取っていること、入内こそ拒否するものの帝とかぐや姫は手紙や歌のやり取りを通して心のつながりが形成されていくこと、かぐや姫が昇天した後、帝が不死の薬を富士山頂で焼かせることなどは、おとぎ話としての「かぐやひめ」にはほとんど描かれていない。また、今後小学校の国語科の学習において「竹取物語」が扱われるようになって、教科書に取り上

げられている『竹取物語』の場面はごく一部分であり、これらの点について小学校段階で十分に理解させることは難しいと考えられる。

そこで今回は、まず学習者一人ひとりが持っている「かぐやひめ」の物語の筋や登場人物についての記憶を振り返り、現代語訳によって『竹取物語』の全体像をつかんだ上で、学習者が興味・関心を持ったいくつかの場面について、原文に触れる学習を考えてみた。具体的には、ポプラ社の絵本「かぐやひめ」と角川文庫の「ビギナーズ・クラシックス」の現代語訳を比較し、絵本では省略されている場面やエピソードについて、その理由を考えたり、そのことによって物語全体の印象がどのように違ってくるかを討論させたりすることを通して、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れるとともに、それらについての自分の考えをまとめ、表現させるようにした。

学習者が幼少期に接した絵本やおとぎ話を窓口として古典に触れたり、蓮の花型の宇宙船で月からかぐや姫を迎えに来る特撮シーンが見せ場である映画を視聴したりすることにより、学習者の古典に対する敷居を低くすることができる。さらに、『竹取物語』には、江國香織や星新一による優れた現代語訳があり、今回読んだ訳とそれらを比較したり、前述の「ビギナーズ・クラシックス」等によって他の古典を読むことにつなげていったりすることで、中学生の読書の広がりを図ることができると考えている。

6 能力育成のプロセス（6時間扱い 本時は5時間目）

次	時	評価規準 (①～②は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】	○ Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて
I	1	③ 古典には様々な種類の作品があることを知り、「作り物語」とはどのようなものか理解している。 【記述の確認】	○ 既知の知識と関連付けながら、「古典」について自分の考えをまとめるとともに、さまざまな古典の作品に触れようとしている。 ☆ 「かぐやひめ」以外の昔話や古典の作品を挙げさせ、気に入っているものについての感想を述べさせる。
	2		
	3		
II	4	① 幼少時から親しんできた「かぐやひめ」の物語と『竹取物語』を比較しながら読むことを通して、古典の世界についての新たな興味を喚起しようとしている。 【記述の分析】	○ 「作り物語」としての『竹取物語』と、子ども向けのおとぎ話としての「かぐやひめ」の物語について、それぞれの読者に対する作者の意識を探ったり、表現の効果について考えたりしながら、古典についての自分の考えを明らかにしている。 ☆ 現代語訳の中で、自分が記憶している「かぐやひめ」の物語にはない部分を線を引くなどして確認させる。
	5 本時		
III	6	② 歴史的仮名遣いなど現代の口語と異なる古文特有のきまりを知り、古文を音読して、古典特有のリズムを味わっている。 【行動の観察】	○ 現代仮名遣いと異なる歴史的仮名遣いの法則性や現代語と異なる古語の意味に気付き、現代語訳も踏まえて音読を工夫している。 ☆ ふりがなを参照しながら何度も音読させ、現代語との発音の違いや、意味の分りにくい語句をチェックさせる。

<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p style="text-align: center;">国語科における言語活動（下線）</p>	<p style="text-align: center;">留意事項</p>	<p style="text-align: center;">時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「昔話」「おとぎ話」「古典」について、自分が知っていることやこれまで読んだ作品について話し合い、<u>気付いたこと・考えたことをメモする。</u> ・ 自分が記憶している「<u>かぐやひめ</u>」の物語について話し合い、ストーリー、登場人物などを整理して記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校の国語科で扱う「古典」の文学史的な知識について簡潔に説明する。 	1
<ul style="list-style-type: none"> ・ 『竹取物語』全編の現代語訳を読み、物語の全体像をつかむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 角川文庫「ビギナーズ・クラシックス」の現代語訳を音読させる。 ・ 登場人物や自分の記憶しているストーリーとの違いに着目させる。 ・ 必要に応じて星新一訳や江國香織訳も紹介する。 	2 ～ 3
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分が記憶している「かぐやひめ」の物語と、『竹取物語』の現代語訳を比較し、絵本では省略されている場面やエピソードを確認し、その理由やそのことによって物語全体の印象がどのように違ってくるかについて話し合い、<u>自分の考えを記述する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 五人の貴公子の求婚と彼らの身の破滅、かぐや姫と帝との手紙のやりとりによる交流、かぐや姫の昇天の場面の描写、後日談などに注意させる。 ・ 映画『竹取物語』のラストシーンを視聴し、作品のイメージを広げさせる。 	4
<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童向け絵本の「かぐやひめ」の物語を聞き、第1時に記述した自分の考えを確認した上で、3～4人のグループでそれらを交流する。 ・ 交流を振り返って、<u>自分の考えを記述する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本の読み聞かせの際、大画面テレビを使用して絵本の画像を見せるようにする。 ・ 交流（討論）は「特派員」形式で行わせ、多くの他者の考えに触れるようにさせる。 ・ 登場人物やストーリーの違い、その理由、それによる物語の印象の違い等を視点に意見交換をするようにさせる。 ・ 他者の考えを踏まえて、再度自分の考えをまとめて記述するようにさせる。 	5 本 時
<ul style="list-style-type: none"> ・ 『竹取物語』の冒頭の部分と「<u>かぐや姫の告白</u>」の部分を読み、古文特有のきまりを知り、古典特有のリズムを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2時に読んだ現代語訳の当該部分と対照させ大意をつかんだうえで音読させる。 	6



※ 2

7 授業にあたり

今回の学習指導要領の改訂により、これまでは中学校で初めて学ぶ内容であった「古文」が小学校でも扱われることになり、さらにそれが「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に位置付けられたことにより、これまで「読むこと」の中で行われてきた「古典」の指導について、発想の転換が求められている。

平成20年1月17日の中教審答申では、「我が国において継承されてきた言語文化に親しむことができるよう、長く読まれている古典や近代以降の作品などを、子どもたちの発達の段階に応じて取り上げるようにする」とあり、それは、今回の国語科の改善の基本方針にある「読書の指導については、読書に親しみ、その見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりするため、読書活動を内容に位置付ける」ことを通して指導されなければならない。そのために「古典に関する教材については、古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げること」を「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」3において明示している。

今回の授業は、「古典」を通して「読書に親しみ、その見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする」姿勢を伸ばすための、中学校1年生での授業について、新学習指導要領における「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の枠組みから提案するものである。

また、今回の授業では、新たに配当された大画面の液晶テレビを活用し、『竹取物語』を映像化した映画を視聴させたり、絵本の画像を拡大して見せたりするなど、国語科の授業における情報・メディア機器の活用も試みた。

8 本校の研究主題「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラム・マネジメント—各教科等における言語活動の充実—」とのかかわり～新しい学習指導要領に向けて

新しい学習指導要領に基づく国語科の授業で古典を扱う場合、今回のように「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の取り立て指導であれ、従来のように「読むこと」の領域で扱う場合であれ、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」としての評価をしなければならない。具体的には「言語についての知識・理解・技能」の観点での評価をすることになる。したがって、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の取り立て指導として行う場合には、「国語への関心・意欲・態度」と「言語についての知識・理解・技能」の二つの観点において評価規準を設定して評価することになる。

これらの評価規準で示された「つきたい力」、とりわけ「国語への関心・意欲・態度」の一人ひとりの学習者が実現していくことにより、「古典の世界についての新たな興味を喚起し」、「古典の世界を読み味わおう」とする意欲・態度を育てることが、「読書に親しみ、その見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりする」ことにつながっていくと考える。

本校では総合的な学習の一環としての朝読書を7年間継続しており、ほとんどの生徒が読書に親しむ姿勢を身に付けている。国語科の授業における古典作品との出会いを契機として、本校の学校教育目標にある「深く思考し、的確に判断し、豊かに表現する」力をつけることにつながる読書活動につなげていきたい。



※ 1



※ 3



※ 4

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

國學院大学文学部 小出 結美

1 日 時 平成23年 2月25日 (金) 3校時 (11:05~12:55)

2 学習者 (会場) 横浜市立港南台第一中学校 1年 3組 (教室)

3 教科の視点から育成を目指す能力

(1) 学習指導要領の指導事項から

- ・ 話の構成に注意し相手の反応を確かめながら話したり、自分の考えと結び付けて話を聞いたりする能力。

(新学習指導要領 「A 話すこと・聞くこと イ 話すこと／エ 聞くこと」 言語活動例 ア)

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
① 伝えたいことが相手によく分かるように工夫して話したり、必要に応じて質問しながら聞き合ったりすることを通して、自分の考えをより確かなものにしようとしている。	② 全体と部分、事実と意見との関係に注意して話を構成し、相手の反応を踏まえながら話している。 ③ 必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理している。	④ スピーチをする際に必要な言葉の働きや特徴、言葉遣いを理解している。

4 単元・学習材名

「2年生に向けての決意」のスピーチをして聞き合おう

5 単元・学習材について

新学習指導要領では、「『話すこと』と『聞くこと』とを一体的に捉えた現行学習指導要領の考えを継承しつつも、小学校国語科との一層の連携や指導内容の焦点化を図る」*1 ため、「話すこと」と「聞くこと」を分けて示している。このことについて富山哲也は「話すことと聞くことの指導事項を分けて設定することにより、特に聞くことの内容を一層明確にした。さらに、『必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理すること。』（第1学年I）など、能動的に聞く力を育成するための指導事項を新

*1 河野 庸介『中学校新学習指導要領の展開国語科編』（2008年明治図書）p.18

設した」*2 と指摘している。

国語の授業において「話すこと・聞くこと」の言語活動を行う際、ともすると生徒も教師も「話すこと」で手一杯になってしまい、聞き手をの反応を意識してそれに対応した話し方を工夫する余裕がなかったり、「聞くこと」がおろそかになってしまったりしがちである。今回の授業では、中学校において（英語科も含めて）「スピーチ」を扱う最初の単元であるため、クラス全員という大人数ではなく、2人組・4人組の少人数のグループの中でスピーチを行い、「聞き手の反応を踏まえて話すこと」「質問をしながら聞き取ること」を確実に行うことができるように配慮した。

今回の学習指導要領の改訂において、国語科では各領域とも指導事項の配列が学習のプロセスを意識した示し方になっている。自分の考えを表現する「話すこと」「書くこと」の指導事項においては、「話題設定や取材」「課題設定や取材」から始まり、「話すこと」「構成」へとつながっている。すなわち、「取材」や「構成」については「話すこと」においても「書くこと」においても指導することとなり、相互の関連を図ることが必要である。具体的にはそれぞれの領域における「取材」「構成」に関わる学習経験が、次の学習に生きるように配慮すべきである。1年生はこれまでの「書くこと」の学習の中で、さまざまな方法やツールを活用しながら取材したり、「はじめ－なか－おわり」の構成を意識しながら文章を組み立てることを習得してきている。今回の授業においても、そのような知識を活用しながら、与えられたテーマについて思考・判断した内容を「スピーチ」によって表現する一連の言語活動のプロセスを経験することができるよう、単元・学習材を構成した。

*2 富山 哲也「解説／各教科等の展望国語」「中等教育資料」第865号(2008年6月 ぎょうせい) p.27

6 能力育成のプロセス（5時間扱い 本時は4時間目）

次	時	評価規準 (①～④は、3(2)の評価規準の番号) 【評価の方法】	○ Aの状況を実現していると判断する際のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて
I	1 ・ 2	② 全体と部分、事実と意見との関係に注意して話の構成を考えている。 【ワークシート（構成メモ）の記述の確認】 ～日常的な評価	○ 事実としての豊富な体験・事例 ○ 根拠としての事実に基づく意見 ☆ 1年生を振り返って「達成できたこと」「課題が残っていること」を整理し、それを根拠に2年生で取り組むことを考えさせる。
II	3	④ スピーチをする際に必要な言葉の働きや特徴、言葉遣いを理解している。 【パフォーマンス（スピーチ）の観察】 ～日常的な評価	☆ メモの棒読みにならないように、話し言葉と書き言葉の違いに注意させ、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すようにさせる。
	4 本時	② 相手の反応を踏まえながら話している。 【パフォーマンス（スピーチ）の観察】 ～日常的な評価 ③ 必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理している。 【ワークシート（聞き取りメモ）の記述の確認】 ～記録する評価	○ 相手の反応に対する適切な反応 ☆ 視線を「メモ→聞き手1→聞き手2→聞き手3」の順に移動しながら話すようにさせる。 ○ 共通点や相違点を踏まえた考えの広がり ☆ 自分の考えと似ている点や違っている点をメモさせる。
III	5	① 伝えたいことが相手によく分かるように工夫して話したり、必要に応じて質問しながら聞き合ったりするを通して、自分の考えをより確かなものにしていく。 【ワークシート(振り返り)の記述の分析】 ～記録する評価	○ 「話す・聞く」言語活動を通しての自分の考えの深まりの自覚 ☆ 自分のスピーチと他の人のスピーチを比較し、内容の点で自分の参考になりそうな点を挙げさせる。



<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p style="text-align: center;">国語科における言語活動（下線）※</p>	<p style="text-align: center;">留意事項</p>	<p style="text-align: center;">時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでのスピーチの経験を振り返る。 ・ 自分のスピーチの内容となる事実と意見を確かめ、整理する。 ・ <u>スピーチの構成を考え、構成メモを作る。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中学校生活におけるPDCAサイクルのCheckとActionであることを意識させる。 ・ 「アイデアを生み出すツール」としてのブレーンストーミングや、「アイデアを整理するツール」としての「まず目になったメモ」「ウェビング」を活用させる。 ・ この内容を学年末テスト（「書くこと」）にも出題することを予告し、スピーチの構成メモをもとに「書き言葉」としての文章を記述させることも併せて行う。 	<p style="text-align: center;">1 ・ 2</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの学習を踏まえて、構成メモを修正する。 ・ 2人組でスピーチのリハーサルを行う。 ・ リハーサルを振り返って、自分のスピーチの内容や話し方を修正する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し手はメモの棒読みにならないように話し方を工夫するとともに、聞き手の反応に注意し、それに応じた話し方をするようにさせる。 ・ 聞き手は、質問を考えながら話を聞くようにさせる。 	<p style="text-align: center;">3</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 4人組のグループで順番にスピーチをする。 ・ 聞き手はスピーチを聞いて質問する。 ・ <u>グループでスピーチの振り返りを行い、自他のスピーチのスキルや内容について気づいたことを指摘し合う。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し手・聞き手ともに、リハーサルの経験を生かすようにさせる。 ・ 一人のスピーチが終わるごとに「質問タイム」を設けるようにする。 ・ 聞き取った内容や質問とその答えをメモさせる。 	<p style="text-align: center;">4 本 時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>今回の学習を振り返り、スピーチの内容や構成を考えたり、スピーチをしたり聞いたり、評価し合ったりする活動を通して気づいたことや考えたことを記述する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スピーチで話した内容について振り返らせるとともに、スピーチの話し方や言葉遣い、スピーチを聞く姿勢についても振り返らせる。 	<p style="text-align: center;">5</p>

※ 国語科における学習活動は基本的にすべて言語活動であるので、ここでは「話すこと・読むこと」の授業において学習者が思考・判断したことと、思考・判断した過程や結果を表現することに関わる言語活動を下線で示した。



7 授業にあたり

「5 単元・学習材について」に述べたように、限られた時間の中で、「話すこと」・「書くこと」の双方において相互の関連を図りながら「取材」や「構成」について指導することが必要である。今回は、「話すこと・聞くこと」の授業で作成したスピーチの内容を、学年末テストにおける「書くこと」の問題としても出題し、文章で記述することも行った。

1年生の英語科の授業では、今後クラス全体に対して自分の意見を述べるスピーチを学習する。中学校外国語科の学習指導要領では、英語科における「ア 聞くこと」については「(ウ) 質問や依頼などを聞いて適切に応じること」「(エ) 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること」また「イ 話すこと」については、「(イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること」「(ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること」「(オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」等の内容が挙げられている。第二言語としての英語でこれらの言語活動に取り組むにあたっては、当然母国語である日本語によるこれらの言語活動の経験がその基礎になることは言うまでもない。思考・判断したことを表現するためのツールとしての言語を活用する機会を、国語科の授業の中で保障する必要があると考えている。

今回の研究発表会では、この授業に続き同じ学習者（クラス）による書写の授業を公開する。今回の書写の授業では、このスピーチの内容（2年生に向けての決意）を漢字一字とそれを説明する文章を毛筆で書いて作品を作る活動を行う。書写について、新学習指導要領の「解説」では、「国語科をはじめとする各教科等の学習や生活での活用場面を見通した学習活動の工夫や、適切な教材の開発なども必要である」*3と指摘している。4校時の授業では、「話すこと・聞くこと」の学習としてのスピーチの内容を焦点化した言葉を毛筆で表現する活動を通して、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」における、書写の学習の1年生のまとめとしての「生活に生かす書写」に取り組ませたい。

8 本校の研究主題「思考力・判断力・表現力の育成を図るカリキュラム・マネジメントー各教科等における言語活動の充実ー」 とのかかわり～新しい学習指導要領に向けて

新学習指導要領中学校国語科における「A 話すこと・聞くこと」の言語活動例は、各学年とも「ア 報告や紹介、説明や発表、時間や場の条件に合わせてスピーチ」の系列と、「イ 対話、討論、意見を述べ合うこと」の系列が示されている。授業者（三藤）は、「ア」の系列の言語活動を扱う授業として、これまで「フリップを用いたプレゼンテーション」（2年）、「情報機器を用いたプレゼンテーション」（2年）、「時間や場の条件に合わせた即興的なスピーチ」（3年）等を提案してきた*4。今回の授業は、2年・3年におけるこれらの言語活動につながるものとして設定している。

*3 『中学校学習指導要領解説国語編』（平成20年9月文部科学省）p.44

*4 これらの実践については、横浜市教育委員会『横浜版学習指導要領国語科編』（2009年3月 ぎょうせい）p.50p.51p.53を参照。

音声言語による「話すこと・聞くこと」の言語活動は、日常の言語生活と深くかかわるものであるが、それゆえに、学習者（生徒）にとって国語科の学習としての意識を持ちにくい面もあると思われる。自らの体験・経験をという事実をもとに次年度の決意としての具体的な行動という意見をスピーチし交流するという言語活動に取り組むことによって、国語科における言語活動が日常の言語生活に生きるものとなるよう、「生きる力」としての言語能力の育成を図っていきたいと考えている。



※ ゴシック体の部分は、「プロセス重視の学習指導案」作成にあたっての考え方を示しています。

国語科学習指導案

横浜市立港南台第一中学校 三藤 敏樹

1 日 時 平成23年 9 月 9 日（金） 5 校時（13：35～14：25）

2 学習者（会場） 横浜市立港南台第一中学校 2 年 1 組（教室）

3 教科の視点から育成を目指す能力

（1）学習指導要領の指導事項から ※ここには、学習指導要領の指導事項をそのまま記述している。

- ・ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること。

（新学習指導要領 「C 読むこと イ 文章の解釈」 言語活動例 ア）

（2）評価基準

評価基準の作成のための参考資料（平成22年11月 国立教育政策研究所教育課程研究センター）

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
① 物語について感想を持ち、交流して考えを深めようとしている。	② 描写の効果や登場人物の言動の意味などを考えて物語の内容を理解し、自分の感想を持っている。 ③ 物語に表れているものの見方や考え方について、自分の知識や経験と関連づけて感想をまとめ、交流して深めている。	④ 話し言葉と書き言葉との違い、共通語と方言の果たす役割、敬語の働きなどについての理解を、文章を読むことに役立てている。

※ ここには「評価基準の作成のための参考資料」の文言をそのまま入れているので、本単元の内容と完全に合致していない部分もある。それらについては、次ページ「能力育成のプロセス」の「具体的評価基準」の欄に、本単元の学習に沿った形でより具体的に記述している。

4 単元・学習材名 太宰 治「走れメロス」

5 単元・学習材について

「走れメロス」は太宰治の代表作であり、現在横浜市立中学校で使用されているすべての教科書に掲載されている作品である。

この作品について奥野健男は、「人間の信頼と友情の美しさ、圧政への反抗と正義とが、簡潔な力強い文体で表現されていて、中期の、いや太宰文学の明るい健康的な面を代表する短編である。（中略）しかし単に明るいだけではなく、暗さ、不安の中から迷い、苦しみに耐えて、はじめて息吹いた健康さであり、信頼であり、明るさであるところに、この

作品の深い感動の奥行きがある。」*1と述べており、「友情」「信実」といった言葉を手がかりに読み進める授業実践が多いと思われる。

しかし「友情」「信実」といった価値を指向した読み方のみでは、「読むこと」を通して付けたい力がなおざりになり、いわゆる「文学的な文章の詳細な読解」に陥ってしまうおそれもある。そこで、今回は「登場人物の言動の意味」（指導事項イ）や「文章に表れているものの見方や考え方」（指導事項エ）に焦点化し、自他の読みを交流する言語活動を考えてみた。

本作品は、2年の国語の授業で初めて扱うある程度の長さを持った小説である。小説を読んで「描写の効果」（指導事項イ）について考えたり、「知識や体験と関連付けて」（指導事項エ）自分の考えを記述すること、さらにそれらを交流することを通して、日常の読書生活の充実につなげることを目指して、本単元を設定した。

※設定の理由、年間指導計画上の位置、この単元で付けたい力、等を記述している。

*1 奥野健男 新潮文庫『走れメロス』解説（昭和42年／新潮社）p.238

6 能力育成のプロセス（6時間扱い 本時は5時間目）

次	時	具体的評価基準 (①～④は、3(2)の評価基準の番号) 【評価の方法】	○ Aの状況を実現していると判断する際 のキーワードや具体的な姿の例 ☆ Cの生徒への手だて
I	1	※ 「能力育成のプロセス」の導入の段階では、学習活動（言語活動）はあっても評価を行わないこともあり得る。その場合は「具体的評価基準」の欄は空欄となる。	
	2 ・ 3	③ 物語に表れているものの見方や考え方について、自分の知識や経験と関連づけて感想をまとめ、交流している。 【ワークシート（会話文）の記述の確認】 ～記録する評価	○ メロスの性格・人柄について、他の登場人物との関係性に注目しながら文章を根拠に考察して自分の考えをまとめ、交流して深めている。 ☆ 「メロスは～である。」という表現に着目して考えさせる。
	4	④ 話し言葉と書き言葉との違いや、敬語の働きなどについての理解を、文章を読むことに役立てて、登場人物の心情を会話文で表現している。 【ワークシート（会話文）の記述の確認】 ～日常的な評価	○ 人物についてとらえた心情を話し言葉の表現に生かしたり、人物どうしの関係を反映した敬語表現を用いたりしている。 ☆ 文中の会話文と地の文とを比較させる。
II	5 本 時	② 考えた会話文やその理由を交流することを通して、描写の効果や登場人物の言動の意味などを考え、物語の内容を理解して自分の感想を持っている。 【ワークシート（話し合いのメモ）の記述の確認】 ～記録する評価	○ 本文に描かれている情景や心情を生かした会話文を書き、その根拠となる自分なりの作品の解釈について説明している。 ☆ 本文に会話文が含まれている部分について、その会話に続く会話文を考えさせる。
III	6	① 物語について自分の感想を持ち、交流することを通して考えを深めようとしている。 【ワークシート（振り返り）の記述の確認】 ～記録する評価 ※ 「関心・意欲・態度」とは、その単元・学習材に対してどのような関心があるかということではなく、その単元、学習材の学習を通して育成された「関心・意欲・態度」の評価であるので、能力育成のプロセスの前半で評価することはあり得ない。	○ 自分だけでなく他者の思考の過程も参考にしながら、自分の作品の読みを振り返り、今後の読書に生かそうとしている。 ☆ 自分が書いた会話文の内容や表現について、なぜそのように書いたのかを振り返らせる。

<p style="text-align: center;">主な学習活動</p> <p style="text-align: center;"><u>国語科における言語活動（下線）※</u></p>	<p style="text-align: center;">留意事項</p>	<p style="text-align: center;">時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「走れメロス」の全文を読み、登場人物や筋を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ メロスの性格・人柄や心情の変化を表す語句や表現に着目しながら範読を聞かせる。 	<p style="text-align: center;">1</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物を確認しながら「走れメロス」を読み、メロスの言動や行動からその性格・人柄や心情の変化について考え、<u>意見交換をして自分の意見を記述する。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文中の語句や表現を根拠にして、メロスの性格・人柄や心情の変化について記述させる。 ・ 自由なグループで意見交換をさせる。 	<p style="text-align: center;">2 ・ 3</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 最後の場面（「群衆の中からも～勇者は、ひどく赤面した。」）のメロスの心情を、<u>会話文の形式で書く。</u> ・ 一つの場面を選び、メロス以外の一人の人物について、その場面での心情を<u>会話文の形式で書く。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他の部分を参照して会話文の内容や文体を考えるようにさせる。 ・ メロスが不在の場面のセリメンテウスまたはディオニスの心情、あるいは二人の会話を考えて記述させる。 ・ 時間がある学習者には、妹、婿、少女の心情についても考えさせる。 	<p style="text-align: center;">4</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 書いた会話文を交流し、<u>意見交換の話し合いを行う。</u> ・ 話し合いを踏まえて、<u>会話文を書き直す。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3～4人のグループになり、始めに、自分の書いた会話文を朗読させる。 ・ 自分の書いた会話文の内容や文体について、根拠となる表現や語句を挙げて説明するようにさせる。 	<p style="text-align: center;">5 本 時</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今回の学習を振り返り、登場人物の性格・人柄や心情の変化を読み取ることについて気付いたことや交流を通して考えたことを記述する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他の小説を読んだ体験と比較したり、今後の読書についての考えなども記述するよう助言する。 	<p style="text-align: center;">6</p>

※ 国語科における学習活動は基本的にすべて言語活動であるので、ここでは「読むこと」の授業において学習者が思考・判断したことと、思考・判断した過程や結果を表現することに関わる言語活動を下線で示した。

7 授業にあたり

※ 言語活動の具体、評価、授業にあたって工夫した点、学習者（生徒／学級）の状況等を記述している。

学習指導要領では、文学的な文章を「読むこと」の言語活動例として「詩歌や物語などを読み、内容や表現の仕方について感想を交流すること」を挙げている。また、『横浜版学習指導要領』では、「登場人物の履歴書作り」「物語や小説を読み、読書会を開く」等の言語活動を提案している。小説等の文学的な文章を読んで訓詁注釈をしたり指導者の読みに誘導したりすることに陥ることなく「付けたい力」を育成するためには、さまざまな言語活動を行うことが有効である。

今回の授業にあたっては、黒田 諭氏（北海道教育大学附属函館中学校）ならびに山内 裕介氏（横浜市立岡村中学校）の実践を参考にさせていただいた。両氏の実践では、学習者が作者の立場で太宰の文章に記述されていない場面を記述する、という言語活動が設定されていたが、ここでは前述のとおり「登場人物の言動の意味」や「文章に表れているものの見方や考え方」に焦点化するため、「会話文」を記述する言語活動に改め、さらにそれを交流する言語活動を設定した。その際に「描写の効果」について考えたり「知識や体験と関連づけて」自分の考えを記述したりすることにより、小説を読み味わう手だての一つを学ぶことを意図した。

※ 空いているスペースにはワークシートやその他資料の資料を入れてもよい。

※ 教育実習等場合によっては、ここに「本時案」を記述することも考えられる。

三崎中学校 第3学年 国語科学習計画（6月1～2週・4時間）

学習内容	事実を通して描かれている筆者の主張を読み取り、人間についての自分の意見を持つ学習。	
身につけたい力（学習目標）	説明的な文章を読んで、筆者の主張を踏まえた上で人間について自分の考えを400字で述べる力身につけよう。	
単元・教材	「平和を築く」（「現代の国語3」三省堂）	
評価規準		
関心・意欲・態度	読むこと的能力	言語についての知識・理解
① 文章に書かれた具体的な事実から筆者の主張を読み取ろうとしている。	② 文章を読み、人間と社会のあり方や戦争と平和の定義などについて、筆者の考えをとらえている。 ③ 筆者の問題意識が表れている文章の構成や展開から内容を読み取り、それについての自分の考えを持っている。	④ 戦争と平和の定義について、辞書の記述と文脈上の意味を比べている。
学習の計画		
時	具体的評価規準（評価方法）	学習活動
1・2・3 （本時）		1 「学びの道しるべ」1～3を読み、今回の学習のゴールは「筆者の主張を踏まえた上で人間について自分の考えを400字で述べること」であることを確認する。 また、この学習材は4時間で扱い、各自が自主的に課題（「学びのみちしるべ」）に取り組み、交流をすることで自身の考えを深めるものであることを確認する。 2 教科書を通読する。
	② 文章を読み、人間と社会のあり方や戦争と平和の定義などについて、筆者の考えをとらえている。 ③ 筆者の問題意識が表れている文章の構成や展開から内容を読み取り、それについての自分の考えを持っている。 ④ 戦争と平和の定義について、辞書の記述と文脈上の意味を比べている。 （ノートの記述内容の確認）	3 「学びの道しるべ」1を各自で取り組む。終了したら教師の確認印をもらい、他の生徒と交流を行う。 4 「学びの道しるべ」2、3を同様に取り組む。
4	① 文章に書かれた具体的な事実から筆者の主張を読み取ろうとしている。 ③ 筆者の問題意識が表れている文章の構成や展開から内容を読み取り、それについての自分の考えを持っている。 ④ 400字の中で漢字を120字程度使用している。 （ノートの記述内容の分析）	5 筆者の主張を踏まえた上で人間について自分の考えを400字で述べる。
この教材、単元で学んだこと		

三崎中学校 第2学年 国語科学習計画（3月2～4週・5時間）

学習内容	美術で作った自分の「三浦市のキャラクターデザイン」をプレゼンテーションし、考えをよりよく伝えたり、深める学習。	
身につけたい力（学習目標） 相手や場に応じて話す能力、表現の工夫を評価して聞く能力。		
単元・教材	三浦市のキャラクターデザインをプレゼンテーションしよう。	
評価規準		
関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと的能力	言語についての知識・理解
① 聞き手を説得するために、どのように話したらよいか考えようとしている。	② 相手意識を持って話したり表現の工夫を評価して聞いたりしている。	③ 時間や場の条件に応じて語句や文を効果的に使い、説得力のあるプレゼンテーションを行っている。
学習の計画		
時	具体的評価規準（評価方法）	学習活動
	<p>あなたは三浦市の募集する市の「キャラクター・デザイン」を作成することになりました。そして市の企画会議の席上でコンペティションを行い、その「キャラクター・デザイン」の良さをアピールします。</p> <p>そのコンペにおいて、他の生徒は市の担当者となり、どの「キャラクターデザイン」が最もよいか協議し、1つの「キャラクターデザイン」を採択します。</p>	
1 ・ 2	③ 時間や場の条件に応じて語句や文を効果的に使い、説得力のあるプレゼンテーションを行えるよう、考えをまとめている。 (ワークシートの記述内容)	1 自分の創り上げた「キャラクターデザイン」について、そのセールスポイントを整理してワークシートに記入する。 2 プレゼンテーションの柱や構成を考える。
3 ・ 4	② 相手意識をもって話したり表現の工夫を評価して聞いたりしている。 (プレゼンテーションを行っている様子)	3 自分のデザインについてのプレゼンテーションを行い、意見の述べ方や説得力のある話し方、示し方について理解を深める。 4 他者のプレゼンテーションを審査員の立場で、さまざまな視点から評価しながら視聴する。
5	① 聞き手を説得するために、どのように話したらよいか考えようとしている。 (ワークシートの記述内容)	VTRを視聴して互いのプレゼンテーションを振り返り、効果的なプレゼンテーションについて考えたことを文章を書く。
この教材、単元で学んだこと		

三崎中学校 第2学年 国語科学習計画（1月・3時間）

学習内容	互いの読みを交流して、古典の価値に気づく力を身につける学習。	
身につけたい力（学習目標） 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物の思いを想像して読みながら、古典の価値を理解し自分の生活に引きつけて役立てる能力。		
単元・教材	福永武彦訳『今昔物語』巻二十五第十二話	
評 価 規 準		
関心・意欲・態度	読むこと的能力	言語についての知識・理解
① 古典に触れることを通してその価値に気づき、そこに伝えられているものの見方や考え方を自らの生活に役立てようとしている。	② 現代語訳を通して、古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどについて考えている。	③ 作品の書かれ方や内容から読み取れるものの見方や考え方を、自分の知識や体験と関連づけながら理解している。
学 習 の 計 画		
	具体の評価規準と評価方法	学習活動
1	③昔のある出来事を語り手が伝えているという物語の書かれ方を理解して読めている。 (記述の確認)	1 「親子で馬盗人を追いかける話」の現代語訳を読んであらすじを確認する。 (設問一、二、三)
2	③語り手はこの話のどこに興味をもったのか、本文中の内容や登場人物の描かれ方を基に考えている。 (記述の確認) ②お互いの考え方の根拠や内容のとらえ方を参考に、自分のものとのとらえ方や考え方を見直している。 (記述の確認)	2 語り手が着目した「価値」や「意味」を頼信、頼義の言動を踏まえて考える。 (設問四) 3 お互いの考えた理由を交流しながら、その妥当性について考える。
3	③文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連づけて自分の考え方を持てている。 (記述の確認) ①古典の持つ価値を理解し、そこから読み取れるものとのとらえ方や考え方を自らの生活に役立てようとしている。 (記述の分析)	4 交流から気づいたことも踏まえて「この物語の価値が現代にどう生かせるか」について自分の考えを書いてまとめる。 5 学習について振り返る。
①指導上の留意点、②B規準に到達しない学習者への指導・支援		
①・座席の近い他者との意見交換を3回繰り返して意見の交流を行う。 ・解答に至る過程を互いに説明し合うことを眼目にする。		
②・漫画のプリントを配布してあらすじを確認させる。 ・設問四の「油断大敵」の例の後半部分を引き写すようにさせる。 ・場面ごとの登場人物の言動を表す表現をおさえ、そこから読み取ることのできる心情をとらえさせる。		

三崎中学校 第2学年 国語科学習計画 (12月～1月・5時間)

学習内容	作品に描かれた登場人物のものの見方や考え方について、知識や体験と関連づけて自分の考えをもつ学習。	
身につけたい力 (学習目標) 作品の内容や構成、表現上の特色を踏まえて読み、人間の生き方について自分の思いや考えを表現することができる能力。		
単元・教材	「走れメロス」 (「現代の国語2」三省堂)	
評 価 規 準		
関心・意欲・態度	読むこと的能力	言語についての知識・理解
① 人間の生き方についての自分の思いや考えと照らし合わせながら、小説に描かれた人物の行動や思いについて考えている。	② 作品の構成や、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめている。 ③ 作品に描かれた登場人物のものの見方や考え方について、自分の知識や経験と照らし合わせながら考えている。	④ 主人公の行動とそれを支える心情の描写に着目し、それぞれの表現の特徴を理解している。
学 習 の 計 画		
	具体の評価規準と評価方法	学 習 活 動
1		1 全文を通読し、あらすじを確認する。
2 3 4	② 作品の構成や、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめている。 (記述の確認) ③ 作品に描かれた登場人物のものの見方や考え方について、自分の知識や経験と照らし合わせながら考えている。 (記述の確認) ④ 主人公の行動とそれを支える心情の描写に着目し、それぞれの表現の特徴を理解している。 (記述の確認)	2 次の話題について、立場を決めて討論に参加できるように、自分の意見が言える理由や根拠を本文から探して、意見をまとめる。 A メロスが王を殺そうとする考え方について B セリヌンティウスの行動について C メロスは真の勇者か、メロスは偽善者か
5	① 人間の生き方についての自分の思いや考えと照らし合わせながら、小説に描かれた人物の行動や思いについて考えている。 (記述の分析)	3 話し合ったことをもとに、「もし私が○○だったら」という題で学習した内容について考えたことを1000字で書く。
この学習材で学んだことを書いてみよう		
<p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p>		

三崎中学校 第3学年 国語科学習計画（9月3～4週・5時間）

学習内容	話し合いが効果的に展開するように進行の仕方を工夫し、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合う学習。	
身につけたい力（学習目標）	ラウンドテーブル型パネルディスカッションを行って、取り上げた問題についての話し合いを通して、考えをよりよく伝えたり、深めたりすることができる。	
単元・教材	高校生活について考えよう～ラウンドテーブル型パネルディスカッション	
この学習が始まる前に身につけておきたいこと・確かめたいこと		
①話題について、自分なりの方法で調べたことをまとめることができる力。 ②異なる立場や考えを想定して、展開や構成を考えながら話すことができる力。		
評 価 規 準		
関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと的能力	言語についての知識・理解
① 目的や場面に応じて、相手や場に応じて話したり、他者の発言を考えや立場の違いを踏まえて聞いたりして、考えを深めようとする。	② 社会生活から選んだ話題について、自分の経験や知識などから考えをまとめて話している。 ③ 話し合いが効果的に展開するように意識して話し合いに参加して、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合っている。	④ 場の状況や、話し合いの相手に対する敬意に基づいて、適切な表現で話し合っている。
学 習 の 計 画		
時	具体的評価規準と（評価方法）	学 習 活 動
1	② 社会生活から選んだ話題について、自分の経験や知識などから考えをまとめている。 （ワークシートの記述内容）	1 高校入学後に力を入れて取り組むことについて考えている内容を整理してワークシートに記入する。 2 話し合いのどの立場に立つかを決める。
2	③ 話し合いが効果的に展開するように意識して話し合いに参加して、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合っている。 （話し合いに参加している様子）	3 自分たちの立場がどのような根拠によるのかを明確にして、中心となる意見を決める。 4 根拠となる資料を基に、プレゼンテーションの資料を作成する。
3	④ 場の状況や、話し合いの相手に対する敬意に基づいて、適切な表現で話し合っている。 （話し合いに参加している様子）	5 異なる立場の主張や、反対意見を想定して、その立場への質問や予想される意見に対する反論を考える。
4 本 時	③ 話し合いが効果的に展開するように意識して話し合いに参加して、課題の解決に向けて互いの考えを生かし合っている。 （話し合いに参加している様子）	6 ラウンドテーブル型パネルディスカッションを行い、様々な視点から高校生活について理解を深める。
5	① 目的や場面に応じて、相手や場に応じて話したり、他者の発言を考えや立場の違いを踏まえて聞いたりして、考えを深めている。 （ワークシートの記述内容）	7 話し合いを通して考えたことを基に、「私が考える高校生活」という題で意見を主張する文章を書く。 8 話し合いについて振り返り、どのように話し合いに参加できたか、効果的な意見の述べ方や説得力がある示し方について考える。
この教材、単元で学んだこと		

22年度の授業担当は（小清水）

愛川東中学校 第2学年 国語科 指導計画（6月4週～・6時間）

学習内容	ポスター制作を通じて、書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて、アドバイス交換を通じて、自分の考えを広げること。Bオ	
目標 (身につけさせたい力)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや気持ちを相手に分かりやすく伝えるように工夫して書く力。 ・書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて助言をしたりして、自分の考えを広げる力。 	
単元・教材	復興支援ポスターを作ろう	
評価規準		
関心・意欲・態度	書くこと的能力	言語についての知識・理解・技能
① 目的や意図に応じ、構成を工夫し、伝えたいことが効果的に伝わるように文章を書こうとしている。	② 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫している。 ③ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用の仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げている。	④ 読み手に自分の考えやその根拠などが効果的に伝わるように文章の展開を工夫している。
学習の計画		
	具体的評価規準と（評価方法）	学習活動（下線は言語活動）
1		<ul style="list-style-type: none"> ・ポスターには制作者の意図や思いが込められていることを知る。 1 「復興の狼煙」のポスターを見て、感じたことや気づいたことをノートに書く。 2 「きっかけ」を読み、このポスターの意図を考える。 3 グループで意見交流し、考えをさらに深化させていく。 4 改めてポスターを見て、ポスター制作者の意図を考えたり、感じたことを書く。
2 ・ 3	② 自分の伝えたい思いやメッセージを明確にして、文章の構成を工夫している。 ④ 読み手に自分の考えや思いなどが効果的に伝わるように文章の展開を工夫している。	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災に関連する写真を用い、キャッチコピー等を加えてポスターを制作する。 1 次の3点について考えて、ポスター制作意図（コンセプト）を決定する。 <ul style="list-style-type: none"> ・誰に見てもらいたいのか？ ・どこに張るのか？ ・ポスターを通じて伝えたいメッセージは何か？ 2 ポスターのコンセプトを基に、キャッチコピー等を入れ、ポスターを完成させる。 3 <u>ポスターに込められた思い（「ポスターへの思い」）</u>を書く。
4 本 時	③ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や語句の活用の仕方などについてアドバイス交換をし合い、自分の考えを広げている。	<ul style="list-style-type: none"> ・「<u>ポスターへの思い</u>」を互いに読み合い、アドバイス交換をする。 1, 4人グループで行う。 2, 作文を交換し合い、読み終えたら、アドバイス内容を付箋に書く。 3, 全員が読み終えたら、付箋をもとにアドバイス交換を行う。
5 ・ 6	① 目的や意図に応じ、構成を工夫し、伝えたいことが効果的に伝わるように文章を書こうとしている。	<ul style="list-style-type: none"> ・アドバイスを基に推敲し完成させて、作品を読み合う。 1 アドバイスを基に推敲する。 2 写真と組み合わせ、完成させる。 3 他グループの人の作品も読み合い、感想を述べ合う。 4 <u>自分の作品と他の作品を比べての感想</u>を書く。
①学習のポイント・②B基準に到達しない学習者への指導・支援		
①・表面的な思いつきでポスターを制作させるのではなく、自分の伝えたい思い、メッセージといったコンセプトを大切にさせたい。 ・自分の思いを「ポスターへの思い」の中に表現できるようにさせる。 ・アドバイス交換ではポスターに表現されている「ポスターへの思い」が読み手に伝わるかをポイントにアドバイスさせる。 ②・上手くコンセプトを考えられない生徒には、「東中生へのメッセージ」等、具体的な場面を与えて、考えさせる。 ・アドバイス交換では文中で理解できなかった部分に関してアドバイスを考えるところから始めさせる。		

「思考力・判断力・表現力」の育成のための学習指導案

国語科 学習指導案（話すこと・聞くこと） 第1学年

単元名 「身の回りのちょっと変なこと」

1 身につけさせたい力（単元の目標）

- ・日常生活の経験等の中から話題を決め、自分の考えや思いを聞き手に分かりやすく工夫して話す力。
- ・話し手の考えや思いを注意深く聞いて、自分の経験と比較しながら、自分の考えをまとめる力。

2 学習内容

- ・日常生活の中で気づいた「身の回りのちょっと変なこと」について考えをまとめ、聞き手に興味深く聞いてもらえるように工夫してスピーチする。

3 単元の評価規準

- ① 日常生活における身の回りのことに関心を持ち、自分の考えや思いを話そうとしていたり、話し手の言いたいことを注意深く聞こうとしたりしている。（国語への関心・意欲・態度）
- ② 自分の考えや思いを分かりやすくまとめ、聞き手に伝わりやすいように、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方など工夫して話している。（話す・聞く能力）
- ③ 話し手の考えや思いを注意深く聞いて、自分の考えと比較している。（話す・聞く能力）
- ④ 指示語や接続詞などを適切に使い、自分の考えや思いを分かりやすく話している。（言語についての知識・理解・技能）

4 学習活動計画（全5時限扱い）

◎第一次（1時限目）

- ・前回の授業の最後に予告しておいた、「身の回りのちょっと変なこと」というテーマについて、各自思いついたことをワークシートに箇条書きにする。
- ・箇条書きにしたものから、今回発表したいものを選び、どのように発表すればよいか、構成や表現の仕方について考えてまとめる。

◎第二次（2時限目）

- ・4人のグループを作り、それぞれの考えや思いを順番にグループ内発表し、自分以外が発表しているときには、話し手の考えや思いの要旨をワークシートにメモをとる。
- ・それぞれの発表が終わった後、自分以外の発表について自分の考えと比較し、感じたことや考えたことなどをワークシートに記述する。

◎第三次（3時限目）

- ・グループ内で感想の交換を行った後、最も共感できたものやインパクトが強かったものなど、クラス内で発表したいものを話し合って1つ選ぶ。
- ・聞き手に伝わりやすいような話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、また、指示語や接続詞など言葉の使い方などをどう工夫すればいいかについて話し合う。時間に余裕がある限り、グループ内で試したり練習したりする。

◎第四次（4時限目）

- ・グループ内から発表者を1名選び、順番にクラス内発表を行う。（発表者は、考えや思いの提案者以外から選ぶことをルールとする。）
- ・自分たちのグループの発表や他のグループの発表を聞き、「話し方の工夫」について、気づいたことをワークシートに記述する。ワークシートは授業の最後に提出する。

◎第五次（5時限目）

- ・提出されたワークシートから特徴的な意見や教師からのアドバイスを聞き、これから意識したい話し方や聞き方について考える。
- ・テーマである「身の回りのちょっと変なこと」について再考し、「当たり前」や「常識」だと思っていたことについて、改めて注目してみるという「課題発見の視点」についても考える。

5 評価規準と評価の方法、留意事項など

第一次……前時に予告したとはいえ、考えてきていない生徒や思いつかなかった生徒もいる。そのような生徒への例示やアドバイスは机間巡視するなかで個々に行うようにする。

特に、テーマを「身の回り」「ちょっと」「変なこと」と三分割して、「変」とは何か、たとえば、「理解に苦しむ」「不平等」「納得がいかない」「奇妙」など、別の言葉に置き換えるとよいだろう。

第二次…☆〔評価規準①〕（行動の確認）

日常生活における身の回りのことに関心を持ち、自分の考えや思いを話そうとしていたり、話し手の言いたいことを注意深く聞こうとしたりしている。（国語への関心・意欲・態度）

☆〔評価規準③〕（記述の点検）

話し手の考えや思いを注意深く聞いて、自分の考えと比較している。（話す・

聞く能力)

評価規準①については、第一次も参考にしてもよい。評価規準③については、最後に集めたワークシートを点検することによって評価する。ここでは話し方の工夫よりも話し手の思いと自分との比較が評価の中心となるだろう。

第三次…☆ [評価規準②] (行動の確認)

自分の考えや思いをわかりやすくまとめ、聞き手に伝わりやすいように、話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方など工夫して話している。(話す・聞く能力)

話し合いや練習風景によって評価する。身振りや手振りで誇大な表現をしようとするグループには、「言葉」で工夫するようにアドバイスする。文と文の間の適切な接続詞や、聞き手に伝わりやすい指示語を使うように特に指示する。

第四次…☆ [評価規準④] (行動の確認)

指示語や接続詞などを適切に使い、自分の考えや思いを分かりやすく話している。(言語についての知識・理解・技能)

☆ [評価規準①] (記述の分析)

日常生活における身の回りのことに関心を持ち、自分の考えや思いを話そうとしていたり、話し手の言いたいことを注意深く聞こうとしたりしている。(国語への関心・意欲・態度)

評価規準④について、第三次に特に指示をした点ができているかについて、焦点を当てて評価する。グループ代表の発表ではあるが、グループ全体の話し合いと練習の成果であると考えたとよいであろう。評価規準①については、最後に集めたワークシートによって分析し、第二次で行動の確認ができなかった点について補完する。

第五次……「話すこと・聞くこと」に焦点を当てた単元であるが、今後よりよいスピーチをするために、普段から様々な物事に疑問を持つことや別の視点から考えることの大切さも考えさせたい。

他者との着眼点の違いから学ぶことに気づくことができれば大きなプラスになるに違いない。

単元全体を通じて評価の方法に偏りが感じられるかもしれないと思われる。しかし、現実に教師が多数の生徒と対応している教室で、しかも活発な活動の中で生徒一人ひとりを信頼性と妥当性の高い評価を完璧に行おうなどとすれば、学習活動のコントロールが困難になることは自明である。

今回の授業案を例にすれば、第一次は授業にうまくついてこられない生徒への手だてが最重要であるため、次の授業のための形成的な評価のみにとどめた。第二次と第三次では円滑なグループ活動を盛り上げつつ、行動の確認を行う。その中では評価しきれないものに関しては、最後に集めたワークシートを用いて行うように最初から計画しておけば、生徒の学習活動に集中できる。第四次では「グループ代表の発表ではあるが、グループ全体

の話し合いと練習の成果であると考えればよい」と上述したが、観点の一つくらいはグループを評価してもよいのではないかと考えている。合唱や合奏の評価のようなイメージである。また、第五次のまとめに関しては、生徒に話すことに集中するために、あえて評価はしない。最近、あまり教師が語ることは良くないという風潮もあるが、単元でやったことや次へつながることなどを、最後に考えさせて単元を閉じる従来のやり方もいい意味で残していきたいと考えている。

以上

(横浜隼人中学・高等学校 南崎 徳彦)

愛川東中学校 第1学年 国語科学習指導案

指導者 志村 克己

目標 (身につけさせたい力)	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にする力。 ・書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にする力。 B書くこと (1) エ、オ	
学習内容	小学生向けの学校紹介を作る。	
単元・教材	学校紹介の作成 (自主制作教材)	
評 価 規 準		
国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
① 学校紹介の作成に関心を持ち、グループ活動を通して、伝わりやすい文章を書こうとしている。	② 学校紹介の作成において、仲間の意見を参考にしながら相手や目的、意図に応じ、筋道を立てて、分かりやすく読みやすい文章を書いている。	③ 文章を書く上で、言葉のきまり、漢字などについて理解し使ったりするとともに、文字を正しく整えて書いている。
学 習 の 計 画		
	具体の評価規準(評価方法)	学 習 活 動
1		<ul style="list-style-type: none"> ・グループで分担を決める。 ・ワークシートに下書きを書く。
2		<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに下書きを書く。 ・自分が書いた文章を推敲する。
3 ・ 4	② 仲間の意見を反映させて文章を書いている。 (ワークシート)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで推敲する。(付箋を用いる) ・手直したものをワークシートに書く。 ・手直したものをグループで確認する。
5 ・ 7	③ 漢字を適切に使用し、文字も正しく整えて書いている。 (作品)	<ul style="list-style-type: none"> ・リーフレットを作成する。 (清書用紙に書き、貼り付ける。)
小学生に見せ、意見をもらう。		
8 (本 時)	② 意見を反映させて文章を書いている。 (ワークシート) ① グループ活動に主体的に取り組み、伝わりやすい文章を書こうとしている。 (ワークシート)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生の意見を基に再度グループで推敲する。 (付箋に記入する) ・推敲した部分をワークシートに記入する。 ・手直したものを方眼紙に清書する。
9		<ul style="list-style-type: none"> ・小学生の意見を基に再度グループで推敲する。 ・手直したものを方眼紙に清書する。 ・ワークシートに自己評価を記入する。
①学習のポイント ②B規準に到達しない学習者への指導・支援		
①・他の人の文章の良い点、改善点を付箋に書き示す。 ・付箋の内容を踏まえて推敲したものをワークシートに書く。 ②・机間指導をしながら助言を与える。 ・参考例を提示する。		

愛川東中学校 『学校紹介評価用紙』

1年 組 グループ

	担当者	テーマ	読みやすさ	分かりやすさ	様子が浮かぶ
記入例	愛川 東子	部活	きれいな字で書かれているけど、字が小さくて、行間がせまいので少し読みづらかった。言葉や漢字も習っていない難しいものがあった。	全体的にはだいたい分かったが、言葉や表現が難しかった。特に「○○」の意味が分からなかった。□□部のことはよく分かった。	△△部の様子がよく分かった。ただ、部活動の雰囲気があまり伝わってこない。全体の様子や先輩の様子などをもっと知りたい。
表紙					
1ページ					
2ページ2					
裏表紙					

1年国語 『学校紹介を作る』

自己評価カード

(組 番 グループ 氏名)

☆ 次の表に自己評価を記入して下さい。

項 目	評 価
①教科書を参考にしながら自分の文章を推敲することができたと感じた部分を具体的に書いて下さい。	
②自分が他の人にアドバイスしたことはどんなことか。具体的に挙げて下さい。 (良い点でも改善点でもよい。ただし、「全部」「なし」などは記入しない。)	
③他の人のアドバイスをもらったおかげで「良い文章を書けた」と実感したことを具体的に書いて下さい。(具体例を挙げて説明してもよい。)	
④本番用紙に書くときに適切に漢字を使い、整った字で書くためにどんなことに注意したり工夫したりしましたか。具体的に書きなさい。	

《 評価 》

- 4点・・・よくできた
- 3点・・・まあまあできた
- 2点・・・あまりできなかった
- 1点・・・まったくできなかった

1年国語

『学校紹介を作る』推敲シート

(組 番 グループ 氏名)

(1) 小学生からもらったアドバイス

(2) グループの人からもらったアドバイス

《 直す前 》

《 推敲したところ 》

